

Repair! ～TS転生して奴隷になったけど、日本に戻れました～

豊科奈義（旧名：焼ききゅうり）

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

短いあらすじ：TSつ娘が成人男性に拾われてイチヤイチャする話。

詳しいあらすじ：ヘムカは、異世界の亜人に転生したTSつ娘。家族で幸せに暮らしていたが、ある時兵士に襲われ家族を殺され奴隷になってしまう。軍の指揮官に売られ、虐げられる。ある時時空の歪を見つけ吸い込まれてしまう。そこは、元いた日本だった。そこで、男に拾われる。

純度100%の精神的BLです。

余分なもの（百合等）は一切含まれていません。

えっちなシーンはないよ！

カクコム・ハーメルンにて投稿しています。なお、カクコムでは先行配信しています。

初日は1〜10話まで。二日目以降は一日3話投稿する予定です。

誤字脱字衍字、理解不能な文等あったら気軽に報告して下さい。

※本作には、若干残酷な描写があります（一章）。苦手な方はご注意ください。

※この物語は、法律・法令に反する行為を容認・推奨するものではありません。

※この物語はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。

# 目次

## 第一章

第1話	名状しがたい夢から覚めて	1
第2話	元に戻るものと戻らないもの	8
第3話	その宴会は誰が為に	12
第4話	矛盾	17
第5話	燃えて、燃え尽きた	25
第6話	所詮は空っぽ	29
第7話	真つ暗な夜明け	32
第8話	売れ残りへムカ	36
第9話	甘い罠	40
第10話	逃走	44

## 第二章

第11話	光を目指して	48
第12話	不安定	51
第13話	怪しい	55
第14話	何も知らない井蛙たち	58
第15話	この線に、気づいてほしい	61
第16話	一步前進	65
第17話	覗き見よう	68
第18話	きつく締めて	72
第19話	やけに疲れた買い物	76
第20話	異端	79
第21話	こねこね	83
第22話	電話はどこ?	87

第23話 綻び 91

### 第三章

第24話 夜は明けた 95

第25話 死の直前 99

第26話 彼には追いつけない 103

第27話 明日は我が身 107

第28話 危機一髪 111

第29話 ある歯車が欠けて 115

第30話 ブレーキはなくなった 119

第31話 丸見え 122

第32話 ぐつぐつ 126

第33話 かくして、彼は壊れてしまった 130

第34話 邪魔するものは何もない 134

### 第四章

第35話 ジレンマ 138

第36話 乗り換え 142

第37話 もう、止まらない 145

第38話 波のよう 148

第39話 歪の謎 151

第40話 光は見えない 155

第41話 やはり傀儡 158

第42話 壊れた傀儡は翻る 161

第43話 慮りの関係は 165

第44話 最後の日 169

第45話 歪の修復 173

第46話 伝えたかったこと  
エピソード

181 177

## 第一章

### 第1話 名状しがたい夢から覚めて

強い風が吹きながらも、雲は少なく満月が綺麗に輝いているある日のこと。

松の木が茂る山と山の間には挟まれた幹線道路があった。車通りは少ないが、一応市町村同士を結ぶ大切な道路。そんな道路の脇に、車が停まっていた。

黒の軽自動車だ。決して真新しいわけではなく、それなりに使われている車だ。

そんな中、山の中から一人の男が少女を抱えて車の中へと乗り込んできた。男は痩せ型で、それ以外はとりわけ特徴がない。

一方の少女は寝ており、頭頂部から生える狐耳と朽葉色の髪の毛、尾骨の辺りからはふっくらとした狐のようなしっぽが生えておりロボロボの貫頭衣を着ていた。

男は少女を助手席に寝かせ、シートベルトを装着する。そして、運転席へと乗り込むとエンジンペダルを踏む。

仮免許といったほうがしっくりくるほどに男の運転はどうにも辿々しい。

赤信号で丁度車を止めると、男は改めてその異質な少女を見た。男が今まで見てきた世界とは異なる世界からやってきたと言われても自然なほどに異質である。

「やだ……やめて……」

少女は涙を流し始めた。怖い夢でも見ているのだろうか。

男は優しく涙を掬ってあげる。だって、男にはそうすることくらいしかできないのだから。

「大丈夫だから……ね？」

男は優しい言葉を少女に投げかけた。眠っていて聞いていないとわかっているのにも関わらずだ。

信号が青になり、辿々しい運転を繋ぎながら田園地帯へと突入す

る。各所に家屋も点在していた。

男はその中の一軒家の一つに到着した。

駐車スペースに車を停めると、少女を抱えて玄関前まで向かう。

ブロック塀に囲まれた一軒家で、中には苔むした庭があり濡れ縁から出入りが可能だ。全て一階建てで、洋室はあるものの和風建築が主であった。

男は何かに気がつくど慌ててトランクへと戻った。そして、トランクの中に入っている膨大な量の荷物の中から箱を取り出し、さらにその中から鍵を取り出した。玄関へと戻ると、その鍵を使い扉を開けた。

人が住んでいなかったのか、各所に埃が溜まっている。

「掃除しなきゃな……。それに……当分帰れなくなるんだから」

男はそう呟くと、家の奥へと向かっていった。

◇

少女はゆつくりと瞼を開け天井を仰ぎ見た。少女といっても、完全な人間ではない。人間からは亜人とされている種族の一種だ。頭頂部に狐を彷彿とさせる大きな耳、そして尾骨の辺りには同じく狐を彷彿とさせるしっぽが生えている。それらの部分を囲う毛の色は朽葉色であり、瞳の色は橙色。肌の色はさほど人間とは変わらなかった。

耳としっぽを除けば彼女は人間そっくりである。同年代と比べて貧相な体をしているものの、見窄らしいボロボロの貫頭衣のおかげで瘦躯は隠れるため見た人はそれほど気にならないだろう。

少女が見ているのは、茅葺きの天井。そして、少女が今置かれている状況を認識する。

「夢か……」

彼女が見ていたのは、何とも名状しがたい、何かと何かが接触するような夢だ。これに至っては、説明が何とも難しい。

そして、もう一つ。彼女が人間だったときの夢。それも男性の時のときのものであった。

最近ほとんど見なくなっていたので、改めて自分が男だったのだ

と感じさせられる。とはいえ、女性として暮らしてきて今ではすっかり年頃の少女だ。最初は自分が女性になったことに慣れなかったが、今ではすっかり慣れ男性だった時の記憶など邪魔だとすら思っていた。

「顔でも洗うか」

沈んでしまった気持ちをどうにかしようと、体に掛けられた薄い布を取る。同じ布を掛けて寝ていた妹を起こさぬように、布から出ると、太陽光が差し込む出入り口から外に出た。扉なんて概念はないのだ。

大型の茅葺き竪穴式住居から出ると、茅葺屋根で造られた同じような住居がいくつも並んでいる。一際目立った建物もなく、村長の家ですら少女の家よりも一回り大きい程度だ。

辺り一帯に見える草原の中に造られたこの村は、人口百名もないとても小さな村だ。村の外を見れば、平気で野生動物たちが生息している。とはいえ、ここらに住む動物は温厚な性格ばかりで向こうから攻撃してくることなどほとんどない。少女は、村の中心部にある井戸へと向かった。底も手押しポンプもない普通の井戸だ。

底に溜まっている水に容器を落としそれを組み上げるという簡単な動作だが、水が思いの他重く、しかも地上まで持ち上げなければならぬためその苦労は前世で想像していた何倍も苦しい。

少女は容器を井戸のそこへと垂らす。そして、容器内に水と空気が混ざった音が聞こえ、水が入ったことを確認するとロープを引っ張る。

「んんっ……」

少女はロープに力を込めて、自分の体重もかけるとやっこのことで井戸の囲いである石垣に組み上げた容器を乗せる。そして、水の中に零さないように顔を洗い口に含む。雑菌が入っているだろうが、この世界ではそんなことわからないし誰も気にしない。ノーシーボ効果を出さないためにも、あまり考えないようにしているが夢に現れた前世の記憶は瞼の裏側からそう簡単に消えてくれそうにはない。

前世の記憶を思い出す中で、異世界転生ものを讀んだことがあった

ことを思い出す。

作中に出てくる主人公は前世で得た知識を用いて活躍していった。少女がこちらの世界に転生し、ふとその作品のことを思い出すなり自分も前世で得た知識を使い活躍しようと計画したものだ。

しかし、現実はどううまくはいかない。転生ものの主人公は平然と知識を知っていたが、普通の生活を送っていた少女に人に教えられる知識などなかった。

少女が知っているのは学校で習うようなものばかりだ。文学の知識、日本の歴史、世界地理、英語。それらは、こちらの世界では役に立つわけがないのだ。

作中の主人公は、一体どこでそのような知識を知る機会があったのか。ぜひ教えてもらいたいものだった。その結果、少女は何の知識もこの世界に享受させることも叶わずこの年まで生きてしまったのだ。

「はあ」

少女は大きなため息をついた。それが不甲斐ない自分に向けたものなのか、全く現実的ではない転生ものに落胆してしまったのかは正直自分でもよくわからないくらいに。

そんな中、足音が聞こえた。少女の家の方からだ。警戒する間もなく、足音の正体が姿を表した。

「へムカお姉ちゃん？ どうしたの？」

現れたのは、少女——へムカの妹であった。彼女も、へムカと同じ両親から産まれたこともあって、同じ髪色、瞳の色をしている。外見は、成長しているか成長していないかでしか大別できないが、中身はまるつきり違っていた。

前世の知識のあるへムカと違い、妹は真正正銘この世界で初めて生を受けた。天然で無垢な性格は、前世の経験がありどうしても熟慮してしまうへムカとはまるつきり正反対のものだ。

「ちよっと変な夢見ちゃったけど、何でもないよ」

へムカは慣れきったように姉が妹に見せるべきの笑みを浮かべる。

「変な夢？ どんなの？ 教えてー！」

妹はへムカの見た夢に興味があるようだった。妹はへムカに小走

りで近づくと、そのままその大きな耳としっぽを動かして興味津々な瞳でへム力を見つめた。

その瞳に映っている自分はどれほど魅力的なのだろうか。そんなことを考えつつも、へム力は慈母のような顔で妹の頭を撫でた。

「ここではないどこか。部屋を縦に重ねたような石で造られた建物がいっぱいあって、私はそこを歩いていたんだ」

へム力が語ったのは、へム力の死の直前の記憶だった。

実際に見た夢を妹にわかりやすく脚色して述べるへム力を、妹は目を光らせて欽慕している。

いくら何でも夢に興味もちすぎではと思い、少し考えてしまう。

「お母さんが言ってた。夢はいろんなことが知れるからできる限り覚えておきなさいって」

妹は、へム力の考えを察したかのように説明し始めた。仮にも姉妹だ。ある程度はわかるのだろう。

夢なんて前世の知識があるへム力からすればただの脳の錯覚だが、こんなことが解明されていないこの世界では違う。迷信や宗教的な意味合いも含むのだ。妹がへム力を欽慕しており夢の話聞いているのも少なからずそれが理由である。

「そしたら、自動車……うーん？」

自動車なんてわかるわけもない。どうやって説明しようかと考え倦ね自動で動く石の車に落ち着いた。このことを説明すると、妹は首を傾げる。

「牽いているわけじゃないのに、どうして動くの？ 魔法？」

夢に現れた謎の車に興味津々の妹。

異世界ものに出てくる主人公だったらどうして作り方を知っているのかはさておききつと自動車も造れるのだろうかと思う。

「まあ、そんなもんだよ」

妹には悪いが答えをはぐらかす。

「きつと、予知夢だよ。魔法で動く車がいつか現れるんだよ」

妹は声を弾ませて想像に胸を膨らます。そんな妹にへム力は柔らかい視線を送る。

「そうだといいね。じゃあその車が現れるのを見るためにも、長生きしなきゃね」

その車が現れるためには、こちらの世界でも産業革命が起きるかあるいは車を発明できる転生者が現れなければならぬ。

尤も、そう簡単に高度な技術を持った転生者が現れるのであればこの世界はとつくに産業革命を迎えているだろう。

そんな残酷なことをへムカは妹には告げられない。ただ妹の心に寄り添うように、同調する他なかったのだ。

「他には？ 他に何か夢見てない？」

「そ、そうだね——」

へムカは何の夢を話そうかと考えると、今朝見た謎の名状しがたい夢を思い出す。妹にとつては難しいとはいえ、妹であればきつと喜んで聞いてくれるだろう。名状しがたい夢をどうにか口頭で説明しやすいうように言葉を選んでいく。

「あるところに、二つの大きな玉がありました」

「玉？ 何の玉？」

「透明で、とても大きな玉です。人間どころか、この世界を包み込んでしまうくらいのもんです」

妹の方を見ると、妹は頭の中で考えているのか腕を組み唸っている。

「その玉同士がぶつかると、ほんの僅かな穴が空きました。やがて、その穴が大きくなり二つの玉は一つになってしまいました」

これが夢の内容だった。しかし、妹は意味がわからないのか首を傾げ唸り続けている。

「うーん？」

妹は一度考えると当分は考えっぱなしなのでどうにかしようと、話を変えることにした。

「そっちはどうなの？」

へムカが話しかけたことにより、妹はへムカの方を向き自分自身を指差した。

「私？ 夢を見ていた記憶はあるんだけど、覚えてないんだよ……」

そんな中、妹から変な音が鳴る。発生箇所は妹の腹部で、胃を収縮させたなんとも情けない音だった。

「そろそろ朝ごはんの時間だ……帰ろうか」

「うんー」

へムカに向かつてにつこりと元気に微笑んだ妹は、そのまま家へと何とも鈍くさい動きで走って戻っていった。

けれども、どこか愛しい。

へムカは、そんな妹の様子を微笑みながら眺めると両親の待つ家へと帰っていった。

## 第2話 元に戻るものと戻らないもの

「ただいま」

ヘムカたちが家に帰ると、両親はすでに朝食を作り始めていた。母親は地床炉じしょうろの上に置かれた焙烙ほうらくで木の実を炒っており、一方の父親は草原で狩れたウサギの燻製を捌いている。そのせいか、家中が芳しくなっていた。

「ああ、お帰り。ヘムカ、少し手伝ってくれ。お前の好きなウサギ肉だぞ」

父親はヘムカにウサギの燻製を誇るようにまるまると見せた。

ヘムカは、転生しておいしいものが少なく絶望しかけたが一方でウサギ肉だけは好物だったのだ。

父親から石包丁を渡されると、適度なサイズに刻んでいく。

そんな食欲を掻き立てる匂いを嗅いでしまえば、妹はただ待ってはいられなかった。

「私も手伝う」

浅い言動のまま妹は調理場まで走っていくと、何か頼ってほしくて父親と母親を交互に見る。しかし両者ともに妹に振れる仕事などない。ヘムカが石包丁を握れるのは、年齢はもちろんとして落ち着いているということもあった。同年代と比べても落ち着きがない妹には、両親のみならずヘムカも当分調理には参加できないということまで一致していた。

ましてや、朝食の調理に使っているのは火と石包丁。初めての調理にはいささか危険すぎた。

父親は母親とヘムカから目配せを受けると、妹に対し膝を少し曲げた。

「ごめんな、今手伝わせることがないんだ。でも、やれそうな仕事があったら頼むことにするよ」

「本当?」

「ああ、本当だ」

父親は妹の頭に手を乗せて撫でる。

妹にとつても心地よいのか目をつむり蕩けたような表情をする。

「わかった」

無事に納得してくれた妹は、おとなしく床に座り朝食ができるのを待つ。すると、皿に乗った木の实と捌かれた燻製肉を両親とヘムカが持つてやってくる。

すると、妹は早速手を伸ばして食べ始めた。

そんな妹を見て、ヘムカはもどかしさを感じた。

いただきますとごちそうさま。両方ともこの世界にはない単語だ。異世界ものでは主人公たちが広めているケースもあつたが、別世界の文化を持ち込むべきなのかと考えるとやはり積極的にはなれなかった。

そして、食器もそうだ。東アジアでは箸が使われているが、この世界では箸もなければスプーンもフォークもない。手づかみだ。最初こそ抵抗はあつたが、今では違和感を覚えつつも食べれるようになっていた。

「ねえ、ヘムカお姉ちゃん。この木の实おいしいよ?」

考え事ばかりで全く食べていないヘムカを見て、妹は摘んだ木の实を無理やりヘムカの口の中に入れる。

「うん。おいしいね」

甘さや酸味などない。種実類のような味だ。けれども、農業をあまりしないこの地においては貴重な主食である。燻製も食べれば、すぐにお腹が膨れる量だった。

「ヘムカお姉ちゃん? もう食べないの?」

妹が木の实を口いっぱい頬張らせて質問する。

「うん。お腹いっぱいになったから」

妹が両親の方を見ると、両親も食事を終えていた。そのため、残りの木の实を独占できると思つたのだろう。焙烙を手づかみする。

「あつついー!」

妹は反射的に焙烙を上へ投げてしまい木の实が宙を舞う。そして、そのまま床に落ちると謹んだ高い音を立てて割れてしまった。

その瞬間、家族団欒の場は静まり返つた。

衛生観念などないこの世界においては、床に食べ物落ちようともまり気にしない。けれども、焙烙は別だ。作るのに長い時間かかるため、貴重品扱いだ。

真つ先に沈黙を破ったのは父だった。父はへムカを見つめてこう言った。

「へムカ、すまん。修復魔法」

「わ、わかった」

へムカは散らばった焙烙の破片を集めると、念じた。すると、すぐに焙烙の破片に数多の色の光が宿り重力を感じさせられないような、まるで穏やかな水の中にあるかのように浮遊しくつついていく。こうして、以前と同じ状態になると床の上に静かに置かれた。

焙烙は無事に元に戻ったが、家族間の空気はすぐには戻らなかった。

焙烙が元に戻る様子を何も言わず見届けた父親は、焙烙が元に戻るとすぐに妹の方へと視線を向けた。

「こつちへ来なさい」

「……はい」

妹は耳としっぽから力が抜け、自身の行為を反省するかのようだが父親に従い外へ出ていった。

こうして残された母親とへムカ。

「そ、それにしても、へムカの修復魔法本当にすごいよね」

空気を変えようと、母親はへムカの修復魔法についての話を振った。

へムカの修復魔法は、たまたまへムカが身に付けたものだ。以前、魔法に秀でた村人に魔法適正を見てもらったことがあったが、修復魔法に長けているとのことだった。そのため、へムカが自力で才能を開花させたのである。なお、修復魔法以外には何も使えない。

「そんな便利なもんじゃないよ。疲れるし、あんまり出番ないし。それに、魔力に敏感だから日によってこそばゆいんだよ」

魔法には魔力が必要だ。そして、その魔力は常に空気中に漂っていて自然に体内に吸収される。けれども、日によって多い日や少ない日

もあり多すぎる日だと皮膚がむずむずして痒くなるのだ。

前世では低気圧になると偏頭痛になる体質だったため、転生しても気候により体調を左右されるという柵からは逃れられないのかと嘆いたものだ。

「でも便利よ。万が一壊れたときとか本当に大助かりなんだから」

修復魔法が使えるからといって、別に壊すのが許されたわけではない。ごく普通の巫人として、ごく普通の規律を守り生活を送る。ヘムカとしてもそれを守っていた。この普通に暮らすということを、ヘムカは幸せに感じているのだ。

そんな中家の扉が開かれる。すすり泣く声が聞こえ、妹が戻ってくる。

泣いてはいるが、大泣きした形跡はない。軽く叱っただけのようだ。

「ヘムカ、すまん。こんな日に」

父親はヘムカに謝罪するが、肝心のヘムカは意図をつかめていなかった。

「ん？ 今日何の日だったけ」

そもそも、この世界は暦が曖昧だ。冬の間は暦が止まる。それに、現代日本とは違って休日や祝日という概念がない。あくまでも農業の時期を知るためのものでしかない。農家からすれば重要だったが、ヘムカは違うので暦がわからないのも自然なことだった。

「何って誕生日だろう。自分の誕生日くらい覚えたほうがいい」

ああ、そうだったとヘムカは思った。

巫人に誕生日に祝う風習はない。しかし、八歳の誕生日は違う。八歳になると、子どもは子どもでなくなってしまう大人になるのだ。

そして、ヘムカは今日八歳になっていた。

「だからこそ、家で宴を開こう。ささやかだがな」

父親は直前まで妹を叱っていたとは思えないほど爽やかな笑みを浮かべた。

### 第3話 その宴会は誰が為に

「乾杯！」

木製のコップがぶつけ合う音が聞こえたと同時に村の男たちの喚声が始り一帯に轟く。家の中にいるヘムカからすれば、耳を塞ぎたくなるような大声だった。

ヘムカの成人を祝して行われた宴会は、ヘムカの家族の他に村長やら村の重鎮。そして、彼らの家族も参加したため、一瞬ささやかという言葉の意味を今まで誤用していたのかと思えるくらいの喧騒だった。

主役であるはずのヘムカは全く相手にもされず、ただ村の男たちが喚き散らかすのみ。居心地が悪くなり、混沌と化している家の居間を立ち去り家を出る。

まだ昼下がりということもあって、そこには案の定男たちの喧騒に耐えられなかった参加者が風に当たっていた。

すると、村の幹部の夫人たちがヘムカに気がつく。

「あら？・ヘムカちゃん。あなたもこっち来たの？ 宴の主役なはずなのにね」

「全くです。何かと理由をつけて騒ぎたいだけですよね、あれ」

ヘムカは村の幹部の夫人たちに同調し軽く世間話をする。

やがて夫人は去っていったが、別の夫人を見つけるなり談笑を始める。彼女は夫たちのことを批判していたが、彼女もまたただお喋りがしたいだけ。似た者夫婦であった。

ヘムカは家の壁に持たれ腰を下ろし、穏やかな風に当たる。夜風の雰囲気も好きだが、昼間の風も中々に乙なものである。しかし、比較的冷涼なこの地域だからできたことであった。

風に当たりつつあれこれ考えていると、家の扉から出てくる人がいた。

「悪いな、ヘムカ。お前の宴なのにな」

「すまねえ、嬢ちゃん」

出てきたのは二人。一人はヘムカの父親、もうひとり村の若い幹

部だ。二人はへムカに対して詫びを入れた。

この若い幹部は悪酔いするらしく酒を減らしているらしく、常識は弁えている。

父親はへムカの隣に蹲踞のような座り方をして一息ついた。

「へムカが大人か……」

父親はへムカに何かしらの返事を求めるわけでもなく虚空に呟いた。いろいろ思うところがあるのだろう。父親が様々なことを思案していると、へムカの方に向き直る。

「へムカ」

改まった声掛けに、へムカも父親同様に向き直る。

「大人になったからこそ楽しいこともある。だが、逆もある。苦しいこともあるだろう。一人で抱え込むな。つらかったら俺たちに言え。その場に俺たちがいなきや信頼できる人に助けてもらえ。わかったな」

父親から真っ直ぐな目を向けられ聞かされたのは大人になるにあたっての心構えだ。きつと、両親ともにその言葉通り楽しいことも苦しいこともあったのだろう。

「わかった。そうするよ」

へムカは、告げられた言葉を胸に受け止めた。本当の八歳だったら、きつとよく意味がわからなかっただろう。しかし、へムカは違う。前世の経験も経て、少しばかり同年代と比べて大人びている。今告げられた言葉にも、価値があるのだときちんと理解していた。

「何かっこつけてるんだ」

口を挟んだのは、先程父親と一緒に家の外に出た村の若い幹部だった。彼はビールを注がれたコップを持っており、それをへムカに渡した。

前世において酒は二十歳以上でなければ飲めなかったが、祝い事の際しか飲めないものここでは子どもも大人も当たり前のようになっている。村の人から言わせれば、酒ならばお腹を壊すことがないらしい。

当初はへムカは前世の倫理観から戸惑ったが、井戸水でお腹を壊す

ことは少なくとも諦めてビールを飲むようになっていた。

ヘムカはビールの注がれたコップを受け取ると少しずつ口の中へと流し込む。

一方の若い幹部はというと、酒を減らしているとか言っている割には注がれていたビールを一気飲みしていた。

「この村は開村以来危機に見舞われたことなんてないだろう？」

若い幹部は呆れたように言った。要は、格好つけているがそんなことこの村では起きないと言いたいのだ。

「気を抜かないに越したことはないからな」

父親自身、この村が何かしらの危機に見舞われるとは思ってもいないのだろう。

「そーいや——」

父親の話聞き、若い幹部は何かを口走った。ヘムカも、父親も若い幹部の方を向く。

「ウサギを狩るため少し森から出たんだがそこで怪しいやつがいてな」

若い幹部は遠目に見える森の方を指差した。

「怪しいやつ？」

気を抜くなど言った側から気が抜けない言葉が聞こえてくる父親。本当に気の抜けないことだからなのか、この場で重要視しなければヘムカに言ったことの説得力が大いに欠けてしまうためか。父親は若い幹部の話に出てきた不穏な言葉を聞き返す。

「ああ、獲物を借りに森の近くまで行つたんだ。そしたら、妙な音がしてな。近づいてみると、何やら人間がこちらの様子を窺つてたんだ。すぐにどこかへ消えたけど」

ヘムカたちが住んでいる村は、最寄りの人間の居住区からも相当離れている。ヘムカは人間と出くわしたことはないが、村の人からはそう聞かされていた。

「ただ迷い込んだだけとかでしよう」

楽観的で若い幹部は早々に私意を結論づける。この村にはとりわけ何か珍しい作物や鉱石があるわけでもない。技術水準も人間と比

べても劣っているだろう。人口も、百人程度。この村を襲うメリットはないからだ。

若い幹部は他に喋り相手がほしいのか、どこかへと去ってしまった。

一方の父親は一考する。単に交易目的の接触か。あるいは、奴隷の補充か。ただの八つ当たりの可能性もある。

「お父さん？」

父親は、考えるがあまり表情が固くなっていた。そんな父親を心配したヘムカが、顔を覗かせる。

そして、改めて今日という日がどんな日であるかを思い出す。今日はヘムカの成人を祝った日だったと。朝家族の空気を淀ませてしまったのだからせめて、こんな日くらいは楽しませようと。

明日大人たちに諮ろうと考えるも、やっぱり脳裏によぎるのはヘムカだ。ヘムカも大人になったのだから、早速考えてもらわなければならない。

「大丈夫だ、ヘムカ。今日はいっぱい楽しもうか」

そう言つて、父親はヘムカを連れて家の中に入る。家の中では我が物顔で振る舞っていた村の幹部たちどんちゃん騒ぎを起こしていたが、父親がそれを押さえ込み改めてヘムカを主役に据えた。

ヘムカはビールを飲んだり飲まされたり。途中、村の幹部の一人が途中まで村の幹部が事実上の主役だったことを指摘。そしたらお前もそうだってではないかということになり口論が勃発。いつしかじやれ合いというには少し過激な戯れへと発展した。

心の底から楽しかったわけではないが、皆が自分自身を祝ってくれているようで嬉しかった。

幹部同士の戯れは比較的高齢者が多いこともあつてか、すぐに体力が持たなくなり終わってしまった。アルコールが入っていたこともあり皆寝入ってしまった。そんな中、事後の静寂を楽しみつつビールを少しずつ飲んでいく。すると、戯れに巻き込まれ少々ふらふらしている父親がヘムカの隣に座った。

「ヘムカ。どうだ？ 宴は」

へムカは思ったことを整理する。少々父親に言うには小恥ずかしいものだったが、こんなときでなければ言う機会もないと思い腹を決める。

「ちよつとうるさかったけど、すごく良かった。私、幸せ」

「そうか、なら良かった……」

父親は穏やかに一言発言すると、手をへムカの頭の上に乗せてゆつくりと撫でる。

へムカは家族愛とはこういうものなのだなと感じつつその心地よさに身を委ね、すぐに寝てしまった。

## 第4話 矛盾

へムカは、いつの間にか眠っていたことに気が付き目を擦りながら顔を上げた。辺りを見渡しても、そこにあるのは不安を煽る暗闇。辛うじて突上窓から月光が差し込んでいただけだった。

しかし、その月光も満天の雲に覆われ月そのものの姿を視認することは難しい。月光がぼかされて差し込む程度。

誰かしらのいびきと思われる轟音が鳴り響いているため、皆疲れてそのまま眠ってしまったのだろうとへムカは考えた。踏んではまずいと思い、突上窓から体を乗り出しそのまま外へ出る。

へムカが外に出た目的は、単純に水を飲みたいからだ。村には蝋燭はあるが、貴重品であるため緊急時以外の使用は認められていない。このような場合は、月明かりを頼りに進むのだがそれすらもままならない。井戸の近くにあった建物を思い出しつつ、該当する建物に沿いながら井戸へと向かった。

日暮れとともに就寝し日の出とともに起きる生活を続けていたへムカにとって、こんな闇の中を歩くのは初めてだった。

井戸に到着するなり、へムカは穴を囲う石垣に抱きついた。石垣は削つてあるといっても表面に多少なりとも凹凸は残っている。まるで鳥肌を撫でているかのような感触に襲われた。

水を汲み、喉の乾きを潤し帰ろうとすると誰かしらの足音が近づいてくる。近くの森で人間が彷徨っていたという情報を知っているへムカは、思わず身構えた。そして、暗闇の中小柄な影が闇の中に映し出される。

「だ、誰……?」

その影は、へムカも聞いたことのある声で反応した。その影はさらに近づき、へムカが顔を視認できる距離まで近づいた。

「へムカお姉ちゃん?」

井戸にやってきた影、それは妹だった。

妹は井戸にいる人物がへムカだと気がつくやと強張らせていた表情を一気に緩ませた。へムカも同様に、近づいてきた人物が妹であると

わかれると身構えるのを止めた。

「お姉ちゃんも水を飲みに？」

妹は井戸の底に沈んでいる容器を引き上げると、警戒中の不安を晴らすかのような顔でへムカに喋りかけた。

「うん、今飲み終えたところ」

へムカも、妹に対して安堵したかのように答える。

妹は容器を石垣に載せ、水を手で掬うと口へと運んだ。

「それにしても、最初ここに誰かいるとわかったときは怖かったよ。暗いから誰かもわかんないし」

井戸にいた相手がへムカだったからこそ軽口を叩けるが、改めて考えると怖いものだろう。村人は全員見知った顔とはいえ、明かりがなく直前まで誰かわからなかったら怖いと思ってしまうのは必然だ。

「それ、私もおんなじ」

代名詞を強調し、自分も同様に怖かったことをへムカは伝える。

「そっちなもかー」

警戒が杞憂だったことに二人とも緊張の糸が解れてしまったのか、井戸の石垣に腰掛けてしようもない話でも思わず話し込んでしまう。

「じゃ、そろそろ帰る？」

「うん」

二人とも石垣から降りると、へムカの家の方角へと見る。本来であればこの薄暗い月光の中、何も見えないと思うのだが遠くに不気味な明かりが見えた。

「何あれ」

妹も不気味な明かりに目が入ったようで、へムカの貫頭衣の前身頃を掴む。

目を凝らしてよく見れば、それは一つだけではない。無数の光炎だ。しかも、その光炎は列をなして動いており確実にへムカのいる村へと向かってきていた。

「怖いよお……。何あれ？ 人間？」

ますます貫頭衣の前身頃を掴む力が強くなる妹。

そんな妹を見て、真っ先に思ったのは妹を守らなければということ

だった。

「とりあえず、ここに隠れていて」

炎の持ち主たちがどういう行動をするなかって、ヘムカにはわかるわけがない。ヘムカにできるのは、とりあえず隠れさせることだった。

村の外に逃すことも考えたが、杞憂に終わった場合捜索が大変だし、何より先も見えないこの真つ暗闇の中に放つなど危険すぎるからだ。

ヘムカは、妹を隠す場所に井戸の石垣の影を指定した。しゃがんでいれば見えやしない。

「すぐ戻ってくるからね」

ヘムカは軽く妹の頭を撫でてやると、一笑する。

「うん……」

対する妹は、憂い顔をしながら拙い首肯をした。

妹を置いていくことは心苦しかったが、そんな悠長なことは言ってもらえない。ヘムカは急いで家へと向かう。先程歩いてきた道のりなので、暗闇といえどもある程度はわかりすぐに家へと到着する。

家へと入るなり、ヘムカは近くにある人物を片っ端から叩いていく。暗闇で見えないので、村人だと確認次第叩いていった。

声を出して起こしてもいいが、最悪の場合この近くに来ていた人間に見つかってしまうかもしれない。

「……ん？」

呑気な声を上げながら幹部の一人が目を覚ます。ヘムカはその呑気な声の元に飛びついた。

「人間がこの近くに来ているんです！ それも大勢で！ すぐに対策を考えましょう！」

切羽詰まった様子でヘムカは幹部を説得する。しかし、返ってきたのは思ってもみない言葉だった。

「人間？ そういえば俺は昔、狩りの時に人間と出くわしたことがあつてな——」

口にしたのは、人間という言葉から関連付けられたであろう昔の自

慢話。ひどく泥酔している幹部はまともに思考ができていないようだった。

焦燥に駆られ、辺りに雑魚寝している幹部を叩きまくっている誰かが身を起こす音がした。

「ん？ 嬢ちゃん？ どうしたんだ。そんなに焦って」

声から察するに若い幹部だった。彼は寝てはいたものの、酔ってはいなかったのだ。

「た、大変です。大勢の人間がこの村に来ているんです。何かしない」と

理性的な言葉を喋る若い幹部に急いで駆け寄ると、ヘムカは事態を説明する。「そうか……」の言葉の後、しばし沈黙が訪れた。楽観視していた若い幹部といえども、この状況はさすがにおかしいと考えたのだろう。

「こんな夜中にか。交易目的なら絶対こんな時間に来ないだろう。すると、この村を襲うのが目的か」

喋ったのは二人のいずれかではない。落ち着いたヘムカの父親の声だった。父親もまた、会話をする二人の方へと近づいた。

「こいつらは酒を浴びるように飲んでたからな、当分は起きんぞ。とりあえず若い衆らをどうにかしないと。ところで——」

よりにもよってこんな日に襲われたことに絶望を感じながらも、父親は若者の避難を優先すべきと説く。しかし、その言葉は途中で止まった。誰かを探しているかのようにだった。

ヘムカにはすぐに誰を探しているかわかった。妹のことだと。

「もしかして、嬢ちゃんの妹か？ すまんな、生憎人の名前が覚えられなくてな……」

若い幹部も、名前は思い出せないながらも父親の考えていることを察する。

「井戸の影に隠れています。私も井戸にいましたが、隠れるように言っただけに知らせに来ました」

ヘムカは冷静に、自分がなしたことを二人に伝える。父親は考え、そして一つの決断を下した。

「俺が行く。お前は若い衆らを叩き起こせ。へムカは……隠れていろ」

若い幹部はすぐに若者たちを起こしに向かった。父親はへムカを安全な場所に隠れるように移動させるつもりだったのだが、へムカは動かなかった。

なぜ動かないのか。父親が訝しげにへムカを見るが、へムカは喋つた。

「私も行く」

「駄目だ。へムカ、危ない。ここにいろ」

へムカの決断を、父親は尽く拒否した。

父親とて、へムカが大切なのだ。危険な場所へは連れていけない。

「いや、行くよ。だって私——大人だから！」

父親は、初めて自分が子に気圧される感覚を覚えた。生半可な決意ではない。ただならぬ決意であることがひしひしと父親にも伝わった。

「わかった。道案内頼む」

父親はへムカのことを愛娘としてしか見られなかった。先入観を捨てて、改めてへムカの方を見る。

妹のために全力を尽くす大人だと父親は思えた。

「了解！」

へムカはすぐに家を飛び出す。へムカには井戸まで往復した経験がある。それを活かし、父親をこの暗闇の中において井戸までの道を案内した。井戸の近くまで来ると、隠れていたであろう妹が石垣の影から顔を出す。

「お姉ちゃん？」

妹はまだこの暗さの中、目の前の二人を姉と父親だとは認識していないように猜疑心が見て取れた。

「良かった、無事だったんだ」

妹が無事でいてくれたことに胸をなでおろした。

「お姉ちゃん！」

妹はへムカの声に反応し、目の前の相手が姉であるとわかるなり飛

びついてきた。

「ちよつと〜」

ヘムカは微笑しながら妹の手をどける。構ってあげたいのは山々だが、こんなことしている暇などないのだ。

「無事でよかった。さて、ヘムカに——」

我が子と無事再開できたことに、強面の父親の顔も少なからず解れる。しかし、ヘムカの母親のことが心配な父親はすぐに動こうとしてヘムカに指示を出そうとした。

ヘムカたちが見たのは、こんな真夜中では絶対に見ることのできない光炎だった。

炬火が家に当たろうものなら、村にある易燃性の茅葺き屋根は容易にその火の粉を貰い受ける。そして、瞬く間に猛火となっていた。

三人はただ何も喋ることも動くこともなく、悍ましい風景に立ち竦んでいた。

そして父親は歯を全力で食いしばった。わずかばかり歯茎から生えている歯のバランスが崩れる。だが、そんなことどうでもよかった。真つ先に母親を無事を確認しなければならぬ。危険だとはわかっていても、一步一步。着実に父親は歩みを進めた。

しかし、そんな違和感のある動きをしていればヘムカは父親の心中を察することができた。

「お父さん、大丈夫？」

愛娘の心配そうな音色。父親にとって妻も大切な存在だが愛娘も同様だ。心配は絶対にかけまいとヘムカの方を向いた。

「二人ともよく聞いてくれ。俺はお母さんを助けに行ってくる。ここでじつとしていろよ」

先程、大人だからとヘムカの同行を認めたのに。やっぱり危険だからついてくるなんて、なんて自分勝手な父親だと父親は自認する。

けれども、家族全員父親にとって大切な存在だ。一人も欠けてはいけないと思っている。今回は、先程とは違って危険も大きい火の粉が降り注ぎ人間も近くにいるかもしれない。火が明かりになって先ほどと比べても大幅に人間に見つかりやすいのだ。

父親は覚悟を決めると、一步一步着実に家へと向かう。

しかし、へムカも同様に不安だった。家族愛ならへムカも負けては  
いない。自分は大人であると心の中で復唱すると父親のすぐ側に付  
いた。

「へムカ、付いてくるな。危ないぞ」

父親は諭すような優しい声でへムカを退けた。

「いや、私も行く。だって私も大人だもん！ それに、二人の方がもつ  
と多くの人を助けられるかもしれない！」

へムカは、大人しい少女だという自覚はあった。両親の言うことに  
は常に従った。だからこそ、両親から愛されていると思っていた。し  
かし、あろうことか父親はへムカの頬を引っ叩いた。

痛みよりも、父親がへムカを叩いたことに対する衝撃のほうが大き  
くへムカは何かしらの反応をするわけでもなくただ頬に手を当てな  
がら呆然と父親を見ていた。

「落ち着け、へムカ。大人が取り乱してどうする」

へムカは大人になったからこそ、大人の責務を全うしようと頑張り  
すぎた。今回の事件も、頑張つて助けようとするがあまり慌てすぎた  
のだ。

「二人行って、もし二人とも亡くなったらあいつはどうなるんだ!？」

父親はきつく拳を握りしめると、打つて変わつて声を荒げた。

「あっ」

一人よりも二人。火の手が上がったことを寝ている人たちに伝え  
れば助かる可能性は上がっただろう。へムカもそう信じていた。

だからこそ、多数の命を優先するがあまり一つの命——妹の命を考  
慮していなかった。先程は妹のために全力を尽くしていたのに。

一人の命より複数人の命が大切というのは、間違つてはいない。け  
れども、そんな重大な判決をすぐに行うのは大人としても家族として  
も倫理的にも駄目だと、少なくとも父親は強く思えたのだ。

「すまん、へムカ。早速矛盾しているな」

父親だつて、へムカの思いを無碍にはしたくない。父親のただの工  
ゴであつた。

父親は渋々了承したへムカを慰めてやりたい気持ちでいっぱいだけれども、時間はもうない。助け向かうことは、人間と遭遇する可能性が高い。すなわち、危険が大きすぎるのだ。今生の別れになるかもしれないのに、愛娘たちを怒鳴りつけたくはなかった。

「へムカ、これは大人としての命令じゃない。家族としての命令だ。強く生きろよ。じゃあな」

いつものように朗らかな笑みを浮かべた、へムカの父親がそこにいた。

「お父さん！」

へムカは咄嗟に父親に向けて手を伸ばす、しかし、父親は全速力で火の手が上がっている方へと向かって行った。

## 第5話 燃えて、燃え尽きた

ヘムカと別れた父親は、急いで燃える家屋を見つけた。その側では泥酔状態でない者が必死に救助しているのかと思っていたが予想以上に少ない。特に若者に至っては非常に少なく救助に躍起になっているのは中年以上ばかり。

まだ未来のある若者は、村の外に避難させられたのだ。誰かがヘムカの母親を保護してくれているのではとも考えたが、事態は予想以上に深刻のようだった。それがわかるなりヘムカの父親は何の躊躇いもなく燃えている家屋へ入っていった。

「暑い……」

茅葺屋根は激しく燃えているものの、柱や梁といった基幹部分は火の粉を浴びとろ火程度で済んでいる。しかし、木材を簡単に組み合わせただけであり耐久性、耐火性ともに全く頼りがいがない。助けたらすぐにでも脱出しなければならぬ。

屋内を見渡すが、あれだけ沢山いた雑魚寝集団はごくわずかしが残っていないかった。大半が親族に救出されたのだろうが、それでもまだ残されている人もいる。ヘムカの父親が搜索を続けるなり、ヘムカの母親を発見するも動いている様子はない。

ヘムカに言わせれば酸欠だと言うのだろうが、そこまで科学の発展していないこの村ではなぜか意識がないということになる。

だが、そんなことどうでもいい。問題はいかに早くヘムカの母親を助けるかだった。

「大丈夫か？」

ヘムカの母親の肩を強く揺さぶったりして意識を確認するが、起きる気配はない。ヘムカの父親は彼女を担ぎ上げるなり、すぐに家から脱出した。

脱出した直後に家屋が炎によって一気に崩れ落ちる。全壊はしていないが、入り口に炎上している梁が落ちてきており入るのは危険だった。間一髪、彼女を助けられたことにヘムカの父親は安堵した。

改めて次はどうしようかと辺りを見渡すが、違和感を覚えた。辺り

に誰もいないのだ。少なからず、若くない亜人は泥酔者の救出作業に当たっていたはずなのだが一人もいない。全員逃げたのだろうと憶測し妙な胸騒ぎに警戒を緩めていると、担ぎ上げていた彼女が動き始めた。

「……………ん？ あれ？」

ヘムカの父親はすぐに彼女を火の気から遠い場所に下ろした。

ヘムカの母親はゆっくりと瞼を上げ、辺りを見渡し事態の把握に努める。

「な、何これ！」

気が動転し、思わず大声を出してしまう。

「し、静かに」

目が覚めたら外に運ばれており、家が燃えている。驚くのも無理はなかった。ヘムカの父親はそんな彼女の心情を読み解くと、ただ一言念押しする。

「人間に放火された。恐らく、皆は避難しているはずだ」

状況を説明するなり、すぐに彼女の手を掴み逃げようとするヘムカの父親。近くの影に隠れながら遠くを様子を見る。そこにいたのは、大勢の武装した人間の兵士だった。槍を構えている兵士が多いが、中には腰に短剣を構えた弓兵もいた。

燃える建物の明かりで見えた彼らは、一箇所に固まり笑いながら何かをしているようだった。

兵士が話していたのは、密閉魔法についてだ。空気の流動を抑える魔法だが、機動性はよくなく攻撃力そのものもないため使い勝手が悪い。けれども、屋内に使用ば中を密閉でき不完全燃焼を起こせるすぐれものだった。

父親はその兵士の会話自体は聞けていないが、無事に逃げられそうだとということに心理的に楽になる。

光源は村の中心部にあるため、村から離れば離れるほどに見つかる可能性は低くなる。兵士たちがよそ見をしている間が絶好の機会だった。

「今だ」

間隙を縫い、二人は村からだいぶ離れることに成功した。途中見つかるかもしれないという不安もあったが、幸いにも見つからなかったようだ。

兵士が見えず、炬火が辛うじて目視できる場所まで来ると次の目的はへムカたちとの合流になる。出来れば今の内に見つけて家族揃って逃げたいものだ。けれども、この暗さでは合流のしようがない。諦めて今は逃げることに徹しようと考えていたときだった。

巫人の少女の、甲高い叫び声が聞こえた。

村から外れすっかり安心しきった二人は、すぐに面持ちを変化させた。

「今のつてまさか……」

へムカの母親が、震えながらに声を出した。

「……ああ」

間違いなかった。叫び声の正体、それは愛すべき娘たちの叫び声だった。

そう思うと、二人は考えるよりも先に体が動き始める。

急いで娘たちを守らなければと。

二人は兵士の視界に入ることなどまるで気にせず、草原を駆け巡る。案の定兵士にも見つかってしまったが、そんなこと構っていられないのだ。

そして二人は今まさにへムカたちに襲いかかろうとする兵士たちを発見した。へムカの父親は、その兵士たちに迷わず突進を開始する。

それに気づいた兵士はすぐに臨戦態勢を整え、少女よりも目の前の敵を優先する。

憤怒に身を任せているへムカの父親といえども、狩りの経験のみで軍事経験はない。へムカの母親も同様だ。

兵士に襲いかかっても大勢の兵士の前では分が悪かった。

そして、そんな二人の行動を眉を顰めて見る人間がいた。彼は武器を持たず、ただ目の前で繰り広げられる戦いを見ていた。

「……この娘たちの親ですかね」

「どうかしましたか？ ライベ指揮官？」

「いや、何でもありません。できるだけ殺してはいけませんよ」

そう言っただけ——ライベは別の場所へと向かった。

けれども、指揮官が一人別の場所に行った程度で何か状況が変わるわけではない。ヘムカたちは、自分たちのために体を張って守ってくれている両親から目配せを受け心残りながらも両親の期待に沿うべく急いで駆け出していった。

そうして、油断してしまったのだろう。両親ともに兵士に組み伏せられた。

「全く、手間かけやがって……」

兵士の何気ない呟きが聞こえてきたが、それを言いたいのには本来ヘムカの両親側である。必死に抵抗しようにも、兵士の押さえつけがひどくびくともしない。

「逃げた二人も追わないとな」

兵士は何気ない一言を呟いたのだが、それは組み伏せられていた両親にも聞こえていた。少しでも娘たちを守るため、両親はともに最後の力を振り絞り抵抗を解くと兵士目掛けて急襲する。

そして、ヘムカの両親の体にはともに剣が突き刺さった。

「おっと危ない」

ヘムカの母親は首に剣を受けていたらしく、生首が飛び即死だった。

ヘムカの父親はちょうど心臓に剣を受けており、そのまま草原の冷たい地面へと俯せで倒れる。

「……落ち着けか。一番取り乱してるのは、ヘムカじゃなくて俺だったか……」

散々ヘムカに落ち着けと言っていたくせに、対する自分はいつも感情で動いていた。なんと、情けない親だ。せめて、一助になっていれば。

ヘムカの父親は、ヘムカが逃げていった方向へと振り向くとそのまま息絶えた。

## 第6話 所詮は空っぽ

ヘムカたちは走っていた。兵士たちの魔の手から逃れるためだ。両親はヘムカたちのことを思い、兵士の前に立ち塞がりそして犠牲になった。その様子を見ていないながらも、ヘムカは恐らく殺されたのだらうと確信する。そして、そんな犠牲になった両親の思いを無碍にはしたくない。ただ、逃げ続けていた。

とはいえ、少女の全力疾走と兵士の走り。どちらが速いかは言うまでもない。ましてや、ヘムカは妹を連れている。兵士たちは、すぐ目の前にヘムカたち二人を捉えた。

「はあ……はあ……」

一方の、ヘムカの妹は限界だった。

ヘムカに引つ張られ、慣れない速さで走らされている上に後ろから兵士が来ているという恐怖感。とうに体力は尽き、死にたくないという思いが脚に鞭打ち強制的に走らせる。

だからだろう。足元は安定しておらず、草原に存在する些細な石ですらヘムカの妹のバランスを崩すには充分だった。

バランスを崩したヘムカの妹は、そのまま草原の地面へと倒れ込み俯せになる。そして、そんなヘムカの妹と手を繋いでいたヘムカもまた影響を受けてその場に倒れ込み仰向けになった。

ヘムカはすぐに立ち上がるも、ヘムカの妹はどうも立ち上がらない。  
い。

「うっ……うっ……。人間怖い、人間怖い……」

妹は、脚を酷使しすぎて思うように動けなかった。また、人間への恐怖心が余計に体を執拗に震わせて正常な動作の邪魔をしているのである。

そうしている間にも兵士たちはすぐ側までやってきており二人とも剣を突きつけられた。

「おとなしくしろ、さすれば痛い思いはしないで済む」

ここまでかと、ヘムカはゆっくりと両手を上げ屈従の意を見せる。しかし、ヘムカの妹の様子は違った。

兵士たちが村を襲った理由。それは、奴隷確保のためだとヘムカは理解した。しかし、それは前世の記憶があったからだ。

だが、ヘムカの妹は違う。前世の記憶なんてないし、村には奴隷制度はなく、奴隷制度を用いている人間とは出会うのは初めてだ。そもそも、奴隷の概念を理解しているのすら怪しい。人間というのは恐ろしいと村の者に吹聴されたこともあるのだろう、兵士の投降の呼びかけに応じる気がまるでなかった。

投降するくらいなら、抵抗したほうがましだとヘムカの妹は思ったのだろう。妹は歯を食いしばると、そのまま全身全霊を以て兵士に襲いかかる。

しかし、結果は明らかだった。体力が戻っていないのもあり、兵士に避けられたかと思うとそのまま別の兵士が持つていた槍の柄で頭を強打された。

「……………え？」

ヘムカは、目の前の光景が信じられなかった。

ヘムカの妹は、体を一瞬だけ波打つように動かしただかと思うとその後体の動きはない。ただ、頭から大量の血が垂れ流されるのみ。

「嘘……………だよね……………」

ヘムカは涙を溜め、兵士がいることも気にせず一步一步ゆつくりと妹の亡骸へと近づいていく。しかし、近づけば近づくほどにそれは亡骸だということを思い知らされる。

亡骸の眼前まで来たとき。立つことすら叶わぬ絶望に打ちひしがれ倒れるように手をついた。

そして、ゆつくりと亡骸に触れた。脈も、息も感じないまだ体温を保っているだけの存在。

「ねえ、起きてよ」

ヘムカは、虚空を見つめるような光のない目で妹の体を揺らした。

「ねえってば」

ヘムカは再度妹の体を揺らした。

「お姉ちゃん怒るよ？」

ヘムカは妹の体を強く揺らした。

「ねえ、ねえ、ねえ、ねえ！」

性懲りもなくヘムカは妹の体を揺らし続ける。しかし、妹の亡骸は動こうとはしなかった。

ヘムカは、自分でもわかっていた。目の前にあるのは、妹の亡骸。動くわけもない。それでも、物心ついたときにはいた妹が目の前で殺されたという事実が飲み込めなかったのだ。

「うう……」

何も見つめていない瞳に、涙が溜まる。限界までその涙を溜めた後、決壊したかのように頬を伝い妹へと滴り落ちる。

ヘムカは心からの慟哭をした。しかし、草原には何ら遮る物はない。反響するわけでもなく、一定の距離を取れば自然に聞こえなくなってしまう程度の虚しいものだった。

喉が枯れたのか慟哭を止めると、全身の気が抜けたように脱力しその場に倒れ込む。草原にいる虫たちが、興味本位でヘムカの体を登るが気づきすらしない。仮に気づいたとしても、反応を示さないだろう。もうどうにでもなれと思つたヘムカは、あまつさえ草原の肉食動物に襲われたとしてもその運命を粛々と受け入れるだろうから。

「別れは済みましたか？」

声をかけたのは、ライベだった。彼は、ヘムカの妹が抵抗する気を見せたときからもうこの場において様子を見ていたのだ。

皮肉にもライベは、ヘムカが妹の前で泣き喚いたことに対し何も行動を取らず、ヘムカが何も行動を起こさなくなると声をかけた。しかし、反応はない。二人とも、色のない死体であるかのようにだと思えた。「連れて行け」

ライベの一声により、ヘムカは兵士たちに枷をつけられる。しかし、ヘムカは何ら抵抗する気を見せずとも簡単に装着が終わる。

そして、他の奴隷たちと一緒に兵士たちに引きずるように歩かされるこの村——虚無と化した村を去った。

## 第7話 真つ暗な夜明け

夜が明けた。

へム力を含む奴隷たちは、兵士の先導により草原を歩かされた。数時間にも及ぶ行軍。普段から歩き慣れている兵士はささやかながら靴を履いているが、基本的に裸足で生活する亜人の足は限界だった。足の裏の皮は剥がれ、時折道なき道に転がっている鋭利な石を踏みつけては足に傷ができる。誰か一人でも転べば手枷の影響で皆が転び傷を負う。そうしている間にも、奴隷同士での不信感が高まっていき兵士の思うつぼであった。

「休憩にするか」

先頭に行く兵士がそんなことを他の兵士に告げた。これで自分も休めるのだと、へムも安心しきり安堵のため息をついた。

けれども、この休憩は奴隷のためではない。あくまでも、兵士のための休憩であった。

奴隷たちはその場に待機。一方で、兵士たちは気が合う者同士で集い合うと食べ物や飲み物が支給される。それらを、奴隷たちの前で美味しそうに食べるなり談笑し始めた。

奴隷たちは座ることが許されただけでも温情だろう。単純に、休憩時間くらいは奴隷たちの面倒を見たくないなので放置しだけかもしれないが。

「うう……。あ、あのー」

休憩中の兵士たちに声を上げたのは、奴隷たちの一人。へム力と対して年が違わない少年だった。彼は、体をくねらせながら休憩中の兵士に向かって言う。

彼から一番近い位置におり、談笑している兵士たちのグループはその声に気がつくお互いに目配せをする。そして、一番立場の悪いであろう兵士が澁面を作りながら彼の元へとやってきた。

「何だ？」

いいように自分が使われていることに内心苛ついているのか、睨みを利かせながら少年に問う。

「ずっと我慢してたんですけど、……その、漏れそうなんです……」  
少年は、兵士に恐縮しながらも多くの奴隷が同じように考えていたことを代表するかのよう質問した。

しかし、兵士の反応は芳しくない。わざとともとれる大きなため息をついた後、渋々答えた。

「はあ？ そんなんそこですりやいいでしょ」

吐き捨てるように言い終わるなり、すぐに兵士は談笑しているグループの中へと戻っていった。

一方の少年は固まっていた。彼は、奴隷というものをよく理解していなかったのだろう。けれども、そうしている間にも尿意は限界に近くなる。

「もう……無理……」

少年は粗相をした。

兵士の中には、少年を談笑のネタにする者も少なくなく最大限の屈辱を味わう。けれども、他の奴隷たちは少年を慮り何ら反応を示さない。彼らもまた、尿意が限界であり自分も同じようなことになるかもしれないと思うと決して笑えやしないのだ。

奴隷たちの中にはすっかり泣きじゃくったりする者も少なくなく、近くの奴隷たちが慰めあっていた。

そんな中で、平然と垂れ流す者もいる。なぜなら、彼は生きていれども心は死んだようなものだからだ。ヘムカもまた、その一人だ。

大人になったのに、誰一人守れなかったトラウマが心を蝕んだのだ。

「休憩終わりだ！ にしても、くっせえな」

兵士たちは冷笑しながら奴隷たちを街に運ぶべく持ち場に着く。奴隷たちも立とうとするが、中にはショックのあまり立てない者もあり苛立った兵士が該当する奴隷の前に立つと脛や腹部に蹴りを入れ無理やり立たせる。

「さっさと立て！ 殺したっていいんだぞ？」

兢兢とする奴隷は、体を震わせながらにしてようやく立った。

「いっくら、そんな物言いはいけませんよ」

先頭兵士の近くにいたライブは、優しく咎める。

「こ、これは失礼いたしました。指揮官。つい調子に乗ってしまつて」先程までの傲慢な態度が打つて変わり、必死に指揮官に阿るただの部下。見ていた奴隷たちは、少なからず気が楽になった。

「では、これより向かう。ついてこい」

先頭兵士の呼びかけに、奴隷たちは渋々従い歩き始める。

ちょうど地平線から朝日が登り始めていた頃に歩き始め、その朝日がすっかり高い位置に移動してしまつた頃へムカは見慣れぬものを見た。

ここら一帯は草原と森しかない。見るのは植物と土くらいなものだが、見えてきたのは明らかに自然のものではない石の人工壁。その付近には全身の金属の装備を固めた兵士がいた。

その兵士に蔑まれながら横を通る。そして、城壁の中へと入つた。

へムカが元いた世界には及ばないものの、中世程度には技術が発達しており大通り沿いには数階建ての建築物がある。大通りの中には、多数のバザールとそれらを利用する大勢の住人でごつた返していた。

とはいえ、蔑まれることには変わりない。もし兵士の先導がなかったら嫌がらせもあり得るのだろう。

「人間様の素晴らしい街の様子をたんと目に焼き付けるがいいさ。そんくらいは奴隷でも許してやるよ」

奴隷たちを先導する兵士たちが奴隷たちに声がけする。実際、多くの奴隷たちは見たこともない街の様子を感慨深く眺めていた。しかしへムカは、あまり前世で見慣れておりそんな気すら起きない。街の人からどんな心無い言葉を投げかけられても何ら気にしていない。

そして大通りを歩いて少し。街の中でも一際大きな建物へと到着した。すると、先頭にいた兵士が振り返る。

「ここは偉大なる領主様が考案され、それに感化された同志たちが精力的に建築に携わり完成した奴隷管理施設である。今日からお前らはここで奴隷としての才を伸ばすことになる。喜べ、お前たちは何もしないのに食事が出る。なんて、羨ましいのだろうか。その上、領主に尽くせるのだからな。感謝しろ」

何やら精力的に兵士は語るが、そんなもの奴隷たちの耳には微塵も届いていなかった。そうこうしている間に、奴隷たちは収容されるべく移動となった。中は比較的明るいものの、とにかく汚い。そんな思いを奴隷たちは持っていた。

床に付着しているのは、体液だった。血はもちろんとして、他の体液も混ざりあっている。

「ここがお前たちの部屋だ」

兵士たちに案内された部屋という名の監獄へとへムカたちはおとなしく足を踏み入れた。廊下と同じように体液が散乱。様々な小虫が這い蹲っている。

ここでどんな目に合わされるのか、へムカ以外の奴隷たちは考えていた。けれども、へムカに至ってはもうどうにでもなれと、ただ諦めの心しか持ち合わせていなかった。

## 第8話 売れ残りへムカ

へムカが施設に入れられて数日が経過した。

この施設での生活は、ひどく厳しいものだった。食事は最低限度のものは出るが、切れ端や残り滓など当たり前。腐ったものすら出されることもありそのたびにお腹を壊す奴隷もいた。

また、量も少ないため部屋に侵入してきたネズミなどを食べる者すら現れている。

そして、多くの客がこの施設の中を見歩くようになった。その客の殆どが上流階層で、こんな汚い場所に行くとは思えないほど立派で小綺麗な格好をしていた。そしてそんな彼らは奴隷たちを、舐め回すかのような下賤な目で吟味する。

奴隷になるならせめて優しそうな主人に買われたい。そんな思いが多くくの奴隷たちにあったが、ここに来て奴隷を求めるような客に優しきなどあつたものではなかった。

吟味のために奴隷を出そうものなら暴行を受けるなど当たり前。辱めを受けることすらあり、そんな願いを持つ者はもはや誰もいなくなった。

少しでもましな客が現れれば媚態を作つて近寄り、そこに同郷の者という仲間意識は全くなかった。

へムカはというと、妹を亡くしていこうずっと放心状態が続いていた。ただ、情性で。父親から言われたこともあり最低限の食事は摂っているが一々味なんて気にしていない。

そんな者を買おうとする物好きなどいるわけもなく、気がつけば部屋の者はへムカ以外全員売ってしまった。

奴隷施設の管理者側としては、食費がかかる以上どうしても早く売りたい。その思いで、職員の一人在へムカの様子を見に来る。

「おい、お前！」

へムカに向かって叫んでもへムカは反応なし。部屋にはへムカしかいないにも関わらず。

そして、幾度も呼び続けた後ようやくへムカは自分のことを呼んで

いるのだと気がついた。

「……なんですか？」

ヘムカは面倒くさそうに鉄格子越しに兵士の前へ移動した。しかし、その姿は相変わらず目に光がない。

「お前も早く客に媚びたほうがいいぞ。価値のない商品は処分するぞ」

施設側としても、殺したくはない。後処理が大変だし金にならない。そういった意味でも、早く売れるように促すのは自然なことだった。

けれども、ヘムカは微動だにしない。そして、ゆっくりと兵士に視線を向ける。

「好きにしてよ……」

すっかり諦めの境地にいるヘムカは、死を宣告されようとも何ら抵抗しようとは思わなかった。

「駄目だこりゃ」

兵士は、諦めた。売れそうな奴隷たちは全て売っぱらってしまい、残っているのは心が死んでいる奴隷ばかり。決して少ない人数ではないので処理費用が多くかかる。そのことを悩んでいると、廊下に足音が響き渡った。

新しい客かと思い振り向くが、そこに歩いているのはここにいるのが不自然なほどに高位の人物だった。

「遅いので様子を見に来れば」

そう零しながらやってきたのはこんな施設に似合わぬ立派な軍服を着ているライベだった。

「ら、ライベ指揮官！」

兵士は急いで廊下の端に行くとライベに敬礼をする。

「先日はありがとうございます。兵士一同、ライベ指揮官には感謝しています」

ライベは、感謝されることに慣れているのか何も動じず首を横に振った。

「私は指揮官です。部下たちが最善を尽くせるように努力するのは上

司として当然のことですよ」

そう言い残すと、部屋の中にいるヘムカの様子を見る。

「ああ、あの子か」

ヘムカを見た後、ライベは意味深長な面持ちで呟いた。

しばらくヘムカを眺めた後、ふと何かを熟考する。そんな様子が兵士には奇妙に映ったのか、兵士はライベを心配する。

「どうされましたか？ ライベ指揮官」

「彼女、魔法を使えますね。何が使えるんでしょう？」

兵士は近くに部屋の入り口に書かれている奴隷名簿からヘムカの名前を探す。

「えーっと。恐らくは、修復魔法かと」

施設に入れられた当初、奴隷たちは適正を調べるために検査を受けさせられたのだ。とはいっても、専門家が目視するだけのため全く動きたくないヘムカでも問題なく検査できたが。

「修復魔法ですか、私も使えますが……まあいいでしょう」

そして、ライベは何かを決めると口元を緩めた。

「決めました。彼女、買いますよ」

「ほ、本当ですか？ 指揮官？」

冗談かと思っただのだろう、兵士は確認を意を込めてライベに問う。

「処分に困っていたんでしよう？ 値引いてくれると嬉しいですよ」

「は、畏まりました」

どうするべきか考えた挙げ句、上司の命令に従うことを決意。兵士は急いで購入準備のため事務所へと向かった。

そして、ライベは改めてヘムカを見つめる。

「今日から私があなただのご主人さまです」

その発言により、ヘムカもライベからの視線に気がついた。没個性な兵士とは違い、ヘムカはライベのことを覚えていた。

けれども、ライベは兵士たちに殺すのを躊躇させた側だ。もしこれが殺すのを促した側であったなら、我をも忘れて襲いかかったはず。

ヘムカはライベの評価を決め倦ね、何ら行動を取らなかつた。

「よろしくね」

そうライベが呟くと、先程購入準備のために走っていった兵士が戻ってくる。ちょうど廃棄処分の前だったこともあり、破格でライベは奴隷を手にかかすことに成功する。

「それにしても、良かったのですか？　思うように働いてくれるとは思わないのですが？」

兵士が思うのも尤もだった。もっと早く来ればいい奴隷がいつばいいたのと言いそうな顔をする。

「ええ、いいんですよ。ああいうので」

目の前に兵士がいるにも関わらず、思わず不敵な笑いを浮かべ代金をその場で一括払い。通貨の枚数を数えて一致するなり、兵士は部屋の扉を解錠した。

「おい！　出ろ！」

兵士はへムカに向かって叫ぶ。しかし、今までの状況から動こうとしないと判断したのか叫ぶなりすぐにへムカの元までやってくるとへムカに金属製の首枷を付け担ぎ上げた。扉から出すと、ライベに物を扱うかのようにへムカを雑に放り投げた。

ライベはへムカを無事受け止めるなりゆっくりと帰路についた。

## 第9話 甘い罠

ライベは、ヘムカを立たせたものの動かないため引きずるしかなかった。しかし、それもまた面倒であるため、ついにライベはヘムカを担ぎ家へと向かった。

「あら、ライベさんじゃない?」

「ライベさん! こんちやうす!」

真昼間から奴隷を担いでいたということもあり、ライベは近隣住民からの視線を多く浴びる。ライベは気にしていないどころか、気さくに手を振ったりしてもいる。人望があるのだろう。

ヘムカの方も見ているが、ライベが担いでいるとあつては無闇矢鱈に聞くのとはばかられる。そのため、変な目で見るものこそ多かったが、直接害を与えられはしなかった。

しばらく歩き続け街の端まで行くと、一軒の家の前でライベは止まった。ヘムカたちがやってきたのは、街の端にある巨大な邸宅だった。住宅街はここら一帯で途切れていることもあり、この辺りは街の中心部から連続する市街地としては最果てのようだ。この邸宅を過ぎると、草原となっている。

大理石を用いた二階建てで、広大な敷地の中に庭や池などもある立派なものだった。そして、邸宅の敷地は高い金網、そしてその上は鉄条網で囲まれている。

「ここが私の家です。立派でしょう?」

ライベはヘムカに目をやるが、何も反応を見せない。

「まあいいです。奴隷を従順にするのも主人の務めですからね」

ライベは意味ありげな笑みを浮かべるなり、門扉を過ぎる。すると、門扉の側で佇む門衛がライベを見つけて敬礼した。

「お疲れさまです!」

「そちらこそお疲れさまです。適宜休んで下さいね。ですが、休憩部屋に彼女を連れ込むのは感心しませんよ」

兵士はその瞬間、一気に顔が真っ青になり至るところから汗が吹き出る。

「そ、それは——」

言葉を選ぶのに迷っているも、ライベの顔は特段変わらなかった。「まあ、きちんと働いてくれるのであれば何も言いませんよ」

兵士に告げるなり、兵士は緊張の糸が解けたのかその場に倒れ込みライベを仰ぎ見た。

「ありがとうございます！」

ライベに対して土下座しつつ咽び泣きながら感謝している兵士のいる門扉を過ぎ玄関から邸宅の中へと入る。

内装も、外見にふさわしい立派な豪華絢爛なものばかり。

玄関を過ぎると、中にあつたのはいくつもの扉だ。

「気になりますか？ 私はいろいろと研究しているのですよ。そのためには、部屋はいくつあっても困りませんからね。いずれは見せてあげましょう」

いくつもある扉にへムカの日線が向いていたのを感じたライベは、部屋を大まかに説明した。

しかし、へムカはただ見渡していたに過ぎなかったのだ。

その後、ダイニングへと向かう。担いでいるへムカを、無理やりダイニングの椅子に座らせる。

どんなことをされるのか。そもそも、こんな邸宅を買えたり、守衛を雇えたりする時点で相当な財力を持ち合わせていることは明白。そんな彼がへムカを買った理由——。それは、お金を積んでも憚られるようなことをする以外にへムカは考えられなかった。

痛くなければいいと願っていると、ライベはへムカの耳元に口を寄せた。

「ちよつと待っててね」

そう優しく囁くと、ライベは手枷と足枷を外しダイニングを離れ奥の厨房へと向かう。そして少しの時間が経過した後、ライベはサービスワゴンに何かを載せてやってきた。

へムカから見て、サービスワゴンに乗っているのはクローシユ。クローシユをわざわざそのまま運ぶことなどないので、恐らくは料理に被せているのだろう。けれども、それらの料理はへムカに提供される

ことはない。奴隷はお情けの切れ端などで充分なのだ。

しかし、ライベはサービスワゴンをヘムカの隣まで移動させるとクローシユを被せた料理皿をヘムカの目の前に置いた。

これは何か。そうヘムカは思いライベの方を見る。

ライベは微笑をすると、クローシユを取った。

クローシユの下に隠れていたのは魚のポワレだった。何の魚かはわからないが、見た感じ白身魚。香ばしい匂いが漂い、ヘムカも思わず無意識の内に唾液を貯める。

しかし、奴隷が食べてはいけない。そう思い我慢しようとするも、ライベはナイフとフォークを差し出した。

「食べていいよ」

本当に食べていいのかわからなかったが、とりあえず言われたままにナイフとフォークを手に取り魚を切り刻む。そして、一欠片をフォークに挿しそれを口の中に運ぶ。

「おいしい……」

他に言葉が出なかった。

奴隷になつてからの数日間、碌なを食べていない。そもそも、村にるときでさえ料理とは焼いたり茹でたりするもので味付けはほとんどなかった。

長らく貧乏舌だったヘムカにとって、この調理された魚のポワレは一級品のよう感じられたのだ。

「だろ？ とっておきなんだ」

ライベは先程からずっと笑みを浮かべていた。

そんな中、ヘムカはふとナイフとフォークを落とした。わざとではない。手に力が入らないのだ。

「あれ……？ 眠くなつて……」

ついでにヘムカの意識まで朦朧としてくる。ライベの方を見る。そこには、悍ましいほどに口角が上がったライベがいた。

そして、ふとヘムカが気がつくとも見えなかった。手足も動かさない。力が入るのだが、何かに固定されて動けやしないのだ。

「起きたのかい。ようこそ、気に入ってくれたかい？」

聞こえてくるのはライベの声。ようこそと言っている当たり、きつとこれはライベが望んだものなのだろうとヘムカは確信した。

「おやおや、奴隷がそんな態度じゃいけないよ？ それとも、お仕置きをお望みかい？」

ライベは逃うかのように戒める。けれども、その目はひどく笑っていた。

## 第10話 逃走

何を隠そう、ヘムカの両手両足は台に縛られていた。また、口には猿轡。目には目隠しをされてある。

「実は私、魔法が得意なのですよ。だから治癒魔法の実験をさせてください。従順なる奴隷なら当然のことでしょう？」

そう言つて、一切抵抗できないヘムカに向かって短剣を取り出すと何の躊躇いもなく各所に突き刺す。

当然のように血が溢れ、一般人にはとても見るに堪えないような姿になっていた。

「やめ……やめて……」

放心している状態のヘムカですら、この苦痛には耐えられなかったのだろう。猿轡をされながらも必死に声を出す。

もちろんライブには聞こえているのだが、そんなことで止める人物ではない。

「うるさいです……。恐らく、虫でもいるのでしよう……。おや、あなたの口元に虫が止まっています。殺しましょうか」

当然だがヘムカの口元に虫なんていない。ヘムカの声や虫の音にわざと例え、その声を止めるために口に短剣を突き刺そうというのだ。

ヘムカは感づくも抵抗などできやしない。

ヘムカの口元に短剣が突き刺さった。

その瞬間、ヘムカの声から叫び声が響き渡る。猿轡もあつて籠もっているのにも関わらず聞くに堪えない声だった。

「いいねえ」

ライブは恍惚の表情を浮かべた。

叫び声が却つてライブのサディズムに火を付けたようであり、ライブの魔法実験という名の虐待は夜遅くまで続いた。

虐待が終わった後は、全身に治癒魔法を掛けられ全身の傷が消え失せるが少しの痣や傷は残された。

「ほら、治癒が済みましたよ。少し位傷を残した方が動きにくくて脱

走も考えられにくいですからね？　もうちよつと従順なら完全に治癒することも吝かではありませんが」

ライベは治癒魔法をかけたが、それは肉体的なものだ。心に残った傷までは消えない。

ライベを見ながらヘムカが戦々恐々しながら震えていると、ライベが顔色を不機嫌そうに変える。

「ひい……」

ヘムカは、ライベのいかなることに恐怖心を覚えるようになってしまった。その場に尻もちをつきながら縮こまる。

「おやおや、ご主人様に対してその態度はどうでしょうか……。決めました。明日は魔法実験の時間をもつと長くしまししょうか」

汚れきつたライベの、無垢を装う提案。

ただでさえヘムカは壊れている。どんなことに対しても受け流せるはずだった。けれども、ライベのその提案は壊れたヘムカの心が萎縮してしまうほどに恐ろしいものだった。

「逃げなきや」

ライベの邸宅に連れてこられてまだ一日も経っていない。にも関わらずここまでの恐怖を植え付けられるのははや才能だ。

本能的に、ここから逃げろとヘムカの心が訴えている。逃げたところで行く宛があるわけではないが、どこであろうとここよりひどいところはないだろうと腹を決める。

そうして、夜が訪れた後ライベが寝静まった。

わかるわけではないが、仮にもライベは村の襲撃に同行している。疲労も相当なものがあるはずだ。もし今日を逃してしまえば、次の機会はいっになるかわからない。

ヘムカが向かったのは邸宅の二階だ。この邸宅では、私兵が雇われており夜の間も出入り口には兵士が常駐しており逃げるには不利である。

ヘムカが考えついた方法は、二階から怪我を覚悟で鉄条網を登り、そこから脱出するというものだ。

万が一のために、追手を撃退できそうな石ころを持ち二階へ行く

と、音を立てないように静かにベランダのドアを開ける。

「やあ、どうも」

ベランダの扉を開けるなり、出てきたのはライベだった。不自然なほどの笑みを浮かべており、ヘムカを見下している。

「私は仮にも軍の指揮官です。あなたが逃げるために考えそうなことくらい、わかっていますよ。生憎、私は物は最後まで大切に使う性格なのですよ。逃しはしませんよ?」

どうするべきか?

ヘムカは瞬時に考える。

そして、ヘムカは石ころを窓に向かって投げつけた。

ガラスといえども、この世界では高度なガラス技術などない。脆いガラスであり、石ころを投げつけただけで当然のように窓が一面割れた。

ライベの気が逸れた瞬間に、ヘムカは走り出し割った窓から小柄な体を活かし外へ出た。とはいえ、ガラス片で怪我をしたため外に出た後も立ち止まってしまう。そこでライベは空いた窓から手を伸ばしそんなヘムカを掴もうとする。

しかし、ヘムカは秘策があった。そして、案の定窓から掴もうとしたライベの手を避けると魔法を発動した。

ヘムカが発動した魔法、それは唯一使える魔法。

修復魔法だった。

ガラス片が一斉に元の位置まで戻ると固まった。ライベの腕が挟まったまま。

「くっ……」

ライベが窓に腕を挟まれている間に、ベランダを抜け金網に飛びつく。そして、その上にある鉄条網を掴み登り始めた。もちろん針が刺さり出血するが、そんなこと気にしていられない。

そうこうしている間にも、ライベが窓を突破し、ヘムカの元まで向かう。そして、ヘムカは銃を構えた。銃といってもマスケット銃だが当たれば治療して再び魔法実験に使うのだろう。

どうにかして避けようとヘムカは登りを進める。

そんな中、ライベも装填が完了しヘムカに向かって発砲する。幸い、弾はヘムカの直ぐ側を通過するも直接当たるとはなかった。

ライベは舌打ちをしながらも、再び弾を装填しヘムカの方へと構えた。そのとき、ちょうどヘムカは鉄条網の最上部まで登りきっており、ライベは再びそこに発砲した。今回も弾は当たらなかったものの、鉄条網に直撃し不愉快な金属音が鳴る。鉄条網の有刺鉄線が銃弾によって取れ、そのままヘムカの脚に突き刺さる。

有刺鉄線が刺さったヘムカは、痛みにより思わずバランスを崩す。そして、ライベとは反対方向に落ちていった。

落ちる間、下を見ると見えるのは草原。

ああ、逃げられないのか。そう思っていると、どうも真下の草原の一部が歪んでいるようだった。しかし、落下時間は一瞬。ヘムカは考えうる時間もないままその歪みへと吸い込まれていった。

## 第二章

### 第11話 光を目指して

風が吹く。すると、周囲にある木々の葉擦れの音が一齐に聞こえ始めた。数秒間辺りをざわめかせた後、何もなかったかのように静かに戻る。

そんな中、ヘムカは意識が戻った。暑いわけではないが、風が吹くと体の熱を冷ましてくれるようで涼しく心地よい。目を開けるわけでもなく、この風と葉擦れの音の余韻に浸りたいばかりに表情を緩め寝返りを打つ。寝返りを打ったヘムカを優しく包み込んでくれるのは褐色森林土。当初は褐色森林土の温もりを全身で感じていたが、徐々に自分がどんな目に会ってきたのかという記憶が蘇る。

ヘムカは咄嗟に飛び起き、辺りを見渡した。真っ先に警戒すべきはライベだが、幸いライベは見当たらない。胸を撫で下ろすと、ふと違和感を覚えた。

「……、ど……？」

ヘムカが覚えている最近の記憶は、ライベの邸宅を囲む鉄条網から落下したということ。しかし、ヘムカがいるのは傾斜のある森の中である。辺りには高さ数十メートルはありそうな松の木が密集しており、あまり見通しは良くない。てつきり、ライベに連れ戻されたのではと覚悟していたがその様子はない。

安心すると同時に、先の見えない不安に襲われる。

ヘムカが真っ先にすべきこと。それは、ここがどこなのかということだ。ライベから逃げるためにもその情報は必要だった。

「そ……ういえば……」

ヘムカが鉄条網から落下する際、草原に空間の歪のようなものが見えた。あれは何だったのかと疑ってみるも、何か手がかりがあるわけでもない。

ライベが仕掛けた罠ということも考えたが、空間が歪んでいたのは草原の一部分。ライベはわざわざ地面の一部分に落下させるために

誘導していたことになる。そう考えると、マスキット銃での誤射はわざとということになり拭えきれない違和感があった。

ヘムカは、空間の歪みを見つけることにする。

ここはどこかもわからない以上、帰りたくはないが万が一のために帰る方法を確認しておきたいからだ。ちようど近くにあつた松と松の間を確認しようとする。ヘムカがこの松を選んだ理由は、謎の切り込みがあり興味を持ったからだだったが、近づくと近くに何やら黒い毛玉を発見する。

黒い毛玉、それはツキノワグマだった。熊はヘムカから二十メートルもない場所にいる。切り込みもとい爪痕の犯人がわかったと呑気なことを考えていたが、熊はゆっくりとヘムカを目で捉え近づいてきていた。

死んだふりをしたほうがいいのか。いや、死んだふりは効果がないと聞いたことがある。

咄嗟の熊との遭遇にヘムカは冷静な判断ができなかった。

ライベから逃げられたのは僥倖だった、しかしすぐに死んでしまいたくはない。

あれだけ生への執着を諦めていたのに、自分でも不思議と思えるほどに生へ執着していた。

ライベの元で実験という名の甚振りを受けたからこそ却って苦痛のないこの生に執着してしまったのだろう。

ヘムカはゆっくりと熊を刺激しないように立ち去ろうとした。しかし、ヘムカと熊の距離は近すぎた。

熊がヘムカに向かって突進してくる。しかし、密生している松のおかげで熊も思うように速度が出せていない。そのせいで幸いにも逃れることができているが、気を許せば追いつかれてしまう。

そのことがヘムカを煽らせた。目の前の崖に気づかないほどに。

「あつ……」

気がついたときにはもう遅かった。

ヘムカが落下するなり、その山肌を転がり下りていった。幸いそこまで高さがある崖ではなかったため、死に直結するようなものではな

く全身を強打する程度で済んだ。けれども、鉄条網を登っていた時の傷などもあり全身傷だらけであった。

全身が痛む中で動くことは容易ではなく、頑張つて歩みを進めようとするが数歩進んだだけでその場に座り込む。まともな食事をしたのも、ライブの邸宅に連れてこられて早々に出された魚のポワレのみ。しかも、そのポワレも食べかけであった。

当然ながら極度の空腹であり、全身の痛みも相まって意識を保つのがやっとのことであった。

「死にたくない……」

風が吹いたら消えてしまいそうな微かな声だった。しかし、音を出すものが何もないこの森ではへムカの声も、僅かながらに響いていた。

へムカの意識が朦朧とし始める中、視界に黒い人影が現れた。

「誰だ？」

「へ？」

困惑するへムカ。来ないと思っていた返事が来たのもあるが、日本語であったのも大きい。しかし、意識は朦朧としておりそんなことを考える暇もなかった。目の前の人物の顔を碌に認識できやしない。そんな人物は、何かに気がつくへとへムカの目の前まで急いでやってきた。

「大丈夫？」

そうやってへムカを覗き込む。

「助かった……の……？」

へムカを助けた人物が誰かはわからない。けれどもライブという人物を体験してしまっている以上、どんな人物でもいいやという余裕が生まれていた。

「ああ、そうだよ」

その人物は優しくそうな声でそう呟いた。そして、へムカは意識を失った。

## 第12話 不安定

「……………」

へムカはゆっくりと目を覚ました。程よく暖かく、地面からは懐かしい藺草の香り。無意識の内に匂いを堪能しようと大きく吸い込んだ。

「あれ？」

へムカの記憶に残っているのは、意識が朦朧としている中誰かが近づいてきたということだけだ。しかし、付近に人物の気配は全く感じられない。

辺りを見渡すと、数年ぶりに見る襖、障子。そして地面には畳が。天井には紐式の蛍光灯。この異質な光景にへムカは目を見開いて驚き、そして悟った。

ここはあの世界ではないのか。

そう思うのが自然なほどに、この部屋の技術は進歩しすぎている。へムカの前世と同じ世界だろうか。そんなことを考えつつも、へムカは紐付きの蛍光灯に目をやった。もし紐を引っ張って明かりが点くようであれば、ここが元いた世界ではないことの証明になる。

「照明だけに……………」

へムカはそんな下らないことを呟くと、微笑した。別に駄洒落が面白いわけではない。駄洒落を考えられるほどに、心に余裕が戻ったのだと安心したからだ。

妹を殺され、ひどい甚振りを受け、熊に襲われてよくここまで余裕が出たのだと自分でも驚いていた。

立ち上がろうと足に力を入れるが、足のみならず全身に痛みが走る。

「うっ……………。痛い」

まだ怪我は完全に治ってはいないのだ。

体をよく見ると、そこには包帯で巻かれていたり治療の後が見受けられる。

お礼の言葉を考えながら、何とか痛みを耐えつつ立ち上がり紐を

引つ張る。すると、予想通りに点滅した後明かりが点く。とはいえ、ずっと点いているわけではなく度々点滅するのだ。

へム力は微笑した。余裕が出たといってもそれは命を繋ぐことだけだ。余裕が生まれ始めた以上、すぐ何か目標を見つけるのかもしれないがそれまではただ惰性で食いつなぐだけだ。

へム力は紐を再度引つ張り明かりを消す。そして、他の部屋も見て誰かを探そうと障子戸を開けた。

濡れ縁の外に広がるのは傾きかけている日光が照らす小さな庭。庭と言っても全体的に草が生えて岩には苔むしており整備されているというわけでもない。

玄関から一番近い部屋から探そうと移動すると、玄関から解錠の音が聞こえた。

家主が帰ってきたのだと思い、へム力は玄関の方に向かった。

「あー」

へム力は声をかけつつ恐る恐る玄関の方を覗き見た。

靴を脱いでいたのは、痩せ型の男だった。痩せているというよりは、やつれていると言った方が正しいような体型。髪の色、瞳の色は当然黒であり大きな耳やしっぽなど、生えているわけもなかった。紛れもない人間である。

へム力の視線に気づいた男は、彼女の姿を見るなり驚いたように固まった。男は、へム力の姿が珍しいのだ。森で助けた時や、治療の時に散々姿を見ていたがこうして動いている様子はまた別物の様に感じられるためだ。頭頂部から生える狐耳やしっぽを驚愕しながら眺めている。

「あー?」

特段言動がないので、へム力は再び男に声をかける。

我に返った男は「ああ」と声を漏らした後、靴を脱ぎへム力の前へと歩いてきた。

「えっとその……具合はどうですか?」

男は跡切れ跡切れの日本語で、へム力に確認する。

「だ、大丈夫です」

へムカが返事をする、男の表情が緩んだ。

「その、ご飯食えますか？ アレルギーとかは……」

男は両手に持っているレジ袋をへムカに見せるように持ち上げた。「多分ないと思います」

へムカのアレルギーは、少なくとも今まで食べた食べ物の中では一つもなかった。とはいえ、冷涼地帯にある農作物が主であるため温暖な気候を好む農作物や卵や牛乳などは摂取したことがない。もしかしたら、アレルギーの可能性もあった。

「お名前聞いてもいいですか？ 僕は佐藤樹さとういつきって言います」

久方ぶりに聞いた前世で幾度も聞いた日本人らしい名前。へムカは思わず感極まってしまい言葉を紡ぎ出すのが遅れる。

「わ、私はへムカです」

その言葉に、男が少しばかり気まずい表情をする。

「外国の方ですか？ 日本語とかは」

「大丈夫ですよ。お気になさらず」

前世で日本語を使っていたといつても、転生したから八年が経っている。さすがにあまり難しい表現は覚えていないが日常生活を送る上では申し分なかった。

その後、へムカたちはオープンキッチンへと向かった。水切りかごを見ると何も汚れておらず皿の一枚もなかった。

樹がレジ袋からいろんな物を取り出すと冷蔵庫へ入れ、残りの物は開封するなり電子レンジへと入れる。その間に、樹は鍋で湯を沸かし始めた。

「すみませんね、僕料理できないんですよ……」

樹はカップスープの箱を開け始めると、自嘲気味に苦笑した。

へムカからすれば料理ができるできないは大した問題ではない。ただ、空腹であり食べるものがあればそれで良かった。何かを考えようとしても頭が回らないのだ。

電子レンジが鳴り終わり、樹はへムカの前に温められたばかりのものをテーブルに置いた。

「食べにくいかもしれませんが、それで我慢してもらえますか？」

へムカの前にプラスチックのトレイに入ったばかりの鯖の味噌煮と白米、割り箸が置かれる。

「大丈夫ですよ。ありがとうございます」

へムカは樹に笑って礼を言うと、割り箸を割ると鯖の身を解し食べ始める。生姜の汁でも掛かっているのかほんのり生姜の味がする。

「……おいしい」

これが冷凍食品なんだとしても、人工的な添加物が入っていて自然の味ではなくてもおいしいものは美味しかった。

八歳故、大人と比較しても胃の容量は小さいがそんなこと気にせず目の前の食事に向かっていく。

「スープ置くね」

キャベツと人参が浮かんでいるカップスープを樹は白米の隣に置く。しかし、樹はへムカの方を見るなり一転し慌てふためいた。

「大丈夫？」

樹はへムカに駆け寄ってきた。自分は何もしてないと思っていたのだが、気がつくるとへムカの目尻から涙がたれて頬を伝っていた。すぐにボロボロの貫頭衣の袖で拭う。

「ありがとうございます。佐藤さん」

ライベがひどすぎたというのもあるが、へムカはここまでしてくれた樹に向かって微笑んだ

「……どういたしまして」

見知らぬ少女を助け少し緊張していた樹だったが、へムカの笑顔に多少は緊張が解れた気がした。

## 第13話 怪しい

へムカの目に前にある鯖の味噌煮と野菜スープは、まるで早食いでもしているのかと思うほどに早く消え失せていった。

樹はあまりの早さに噛んでいないかと思っただが、へムカはきちんと噛んでいるようで鯖の骨も丁寧に取り出している。

「ふう……」

鯖の味噌煮も、野菜スープも綺麗に食べ尽くしたへムカはコップに注がれた麦茶を飲み干し満足げなため息をついた。

自分でも食べている最中のことをあまり覚えておらず、それだけ目の前の料理にがつついていたということだろうか。

久しぶりの満腹に腹を擦っていると、樹から視線を感じる。樹が食べているのは豚の生姜焼きでまだ食事途中だった。何しろ、調理の際にはへムカを優先していたし特段空腹だったというわけでもない。ただ、いつもどおりに空腹なだけ。けれども、樹はへムカの食事速度に合わせるように料理を口に流し込む。

そして、へムカが食事を終えて数分。樹がようやく食事を終えるなり、樹はテーブルの上で両手を組む。へムカが樹の方を見ると、樹は何かを伝えたい目をしていた。

「その……話、いいかな」

樹はへムカに遠慮しとずっと待っていた。食べながらも良かったのだからけども、必死で食べるように食べるへムカを見て話をかけられなかったのだ。

「ええ……」

へムカは息を呑む。食事代を請求されてもへムカには払えないし、何より警察にでも連れて行かれたら厄介だ。そもそも、骨格レベルで狐耳やしっぽが生えている亜人に基本的人権が尊重されるのかさえ危うい。最悪、警察から研究機関に引き渡され解剖なんてこともあるかもしれない。そう考えると、ライブのトラウマが蘇り全身が震え上がった。

「その前に、質問いいですか？　ここは日本ですか？」

ここは確かめておきたかった。もしここが日本なら、奴隷制は認められていない。つまり、万が一ライブが来たとしても自由人として振る舞えるからだ。

「ん？ ええ、そうですけど……」

肯定されたことにヘムカは愁眉を開く。

しかし、樹の方は困惑していた。ここが国境地帯や港湾、空港などの出入国できる場所であればわかるが、こんな港湾からも空港からも程遠い森の中に居た人物が言うのに違和感を覚えたからだだった。

「もしかして、外国から連れて来られたり？」

先程樹はヘムカに外国人かと聞いたが、これは日本語が通じるかを聞くためで深い意味はなかった。しかし、様子からしてそうとしか考えられなかった。

「いえ、ここには自分の意志で来ました。どうやってここに来たのかは詮索しないでくれると助かります」

「わかった。詮索はしないよ。でもね……」

興味がないといえば嘘になるが、樹はヘムカについて詮索はしないことにする。けれども、樹の目の前の少女には聞きたいことが山程あった。

「……親御さんはいるの？」

樹はあまり乗る気ではなかったが、一応礼儀としてヘムカの親を確認する。

「私の親は……もういません」

ここで殺されたなどと言えば、却って混乱を招くだけ。そう思ったヘムカはそれだけの表現に留めた。

「ごめん……」

余計なことを言ってしまったと樹は自制し口を噤む。その結果、両者ともに何か喋るわけでもなく静寂の時間が過ぎる。

「あ、あの！ 差し出がましいようですがここに泊めてもらえますか？」

ヘムカはテーブルに両手を叩くように乗り出すと、樹に頭を下げた。

樹は何泊か泊めることを想定していたが、ずっと泊めることには躊躇があった。まず、外出できないことだ。

狐耳としっぽが生えている少女など、とてもじゃないが外に連れて行かせられない。フードなどを買おうにも、ヘムカが着ているのはロボロの血まみれ汚れまみれの貫頭衣。洗えば汚れや血痕は落ちるだろうがロボロの貫頭衣など着て服屋に出かけられない。服屋に行く服がないとはまさにこのことであった。

そして、一番の問題は首枷だ。成人同士のS Mプレイならまだしも、相手は年端も行かぬ少女。誰かに知られたら何を言われるかわかったものではない。

「迷惑ですか？ それともお金ですか……？」

ヘムカからすれば、まさに死活問題である。この家から出れば間違いなく通報される。人権が認められても、児童養護施設等に入れられるだろうが問題は山積みだ。狐耳やしっぽが生えている中でまともな日常生活など遅れるとは全く思っておらず、好奇の視線に晒されることは明白だ。樹の家に居ても問題は解決するとは思っていないが、最近のヘムカは心が休まらない日々を送っており少しでいいので時間がほしかった。

そう思うと、自然にヘムカの目に涙が溜まる。

「私、家から極力出ませんから……」

ヘムカは涙ぐんだ声で、樹の情に訴えかける。

こんな怪しい人物を泊めることなど、並大抵の人なら断るだろう。しかし、樹にとっては怪しき故に安心できる部分もあった。

「わかった。泊まっていよいよ」

熟考の上、樹はヘムカが泊まることを一応認めた。

## 第14話 何も知らない井蛙たち

「そ、その……。不躰な質問なんですけど、耳としっぽって……。本物？」

寢床を確保して安堵しきっていたヘムカに対し、樹はヘムカの狐耳やしっぽに対して訝しげな視線と質問を投げかけた。

日本なのだから、耳やしっぽの生えている亜人を見たことがないのは当然の反応だ。侮辱されたわけでもないのに、この際にしつかり紹介しておくことにする。

「本物ですよ、ほら」

ヘムカは狐耳を動かしてみる。力を抜いて見たり、入れてみたり。とてもじゃないがコスプレグッズでどうにかできるものではなかった。同様に、しっぽも動かす。

けれども、初めて見る耳としっぽに樹は未だ信じられないというようにな目線をしている。

「もしかして、ご家族とかも？」

「ええ、まあ。普通の人間たちからは亜人って呼ばれていましたね」

家族は普通の人間と嘘をつこうとも思った。とはいえ、家族が普通の人間なのに自分だけ狐耳やしっぽが生えているというのは支離滅裂で遺伝子操作の様な悪印象を与えかねない話である。そのため、一応は認めることにした。

しかし、家族も同様ということとは亜人という人種が世界にはいることを言っているのも同じで、樹を混乱させていないかとヘムカは不安だった。

だが、樹は混乱しているどころかヘムカを興味深そうに眺めている。

「触ってもいい？」

単純な知的好奇心だった。

「だ、駄目です。その……。ダニとかついているかもですし」

ヘムカは否が応でも触らせたくないため、必死に断る。

しかし肝心の樹は、ダニがついているのであれば触った後によく洗

えばいいだけの話。などと高をくくっていた。

それどころか、そこまで頑なに断る理由があるのかと樹の知的好奇心は却って擽られた。どうにかして触ってみたい。そんな感情が樹の中で渦巻く。

「わかったよ」

樹はへムカを安心させるべく了承の旨を伝えると、テーブルの上に広がるプラスチックのトレーやら割り箸やらを回収する。立ち上がり、トレーを持ち、へムカの分も回収しへムカの後ろへと回る。その瞬間を見計らい、自然な動作でへムカのしっぽを掴んだ。

「ひゃいつ……」

へムカは嬌声を出し電撃でも食らったかのようにびくついた。その勢いでへムカは膝をテーブルにぶつけてしまい、木を金槌で叩いたような音が響き渡った。

「あつ……うつ……」

へムカは膝を抱え、痛みに悶ていた。膝頭には擦り跡が見える。

さすがの樹もここまでのものだとは思っていなかったため、一瞬どうしていいのかわからなかった。ただ、申し訳ないという気持ちはある。

「あ、あの？　へムカさん？」

樹はさすがにやりすぎたと反省し、謝罪しようとへムカを刺激しないように声をかける。しかし、へムカは体操座りで膝を大切に抱えたままゆっくりと樹の方を向く。その目は、悲傷的な目だった。

「へムカ……さん？　その、ごめんね……」

再度呼んでも、謝ってもへムカは口を噤んだまま何も言う気はない。

「本当に、その、悪かったよ。もう二度としないから……」

手をすり合わせ、跪き非礼を詫びるがへムカの様子は決して芳しくない。ただ、両者ともに何も言わず重たい静寂の時間が訪れた。

「と、とりあえずお風呂入る？」

話をどうにか続かせようと、樹はふと思いついたことを提案する。  
「わかった……」

へムカも渋々ながらに承諾する。樹は風呂場へと向かいお湯を張り始めながらその後のことを考えた。

今回ばかりは樹が悪いと自分でもわかっているため、へムカの入浴後に真つ先に真摯に謝ろうと考える。そして、別に考えたのは服のことだ。へムカが着ている服は貫頭衣であり、替えの服などない。ましてや、樹は大人の男性。へムカに合う服など持っているわけもない。もう一度あの貫頭衣を着させることも考えたが、血まみれの服をもう一度着させることになるかと考えるとどうしてもいい気はしない。

「買いに行くか……」

子どもに着させる服を言うと言えば別に怪しくはないのだろうが、仮にも少女。へムカのような少女がどのような服を着るのかもわからないが、何より下着だ。こればかりは、服以上にわからない。

ただでさえ怒らせているのに、下着なんて聞けない。その場で考えようとも考えてみるが、子供服売り場の少女用下着を吟味する自身。最悪通報されかねない光景である。

「駄目だ……わからん……。インターネット契約しようかな……」

樹が考えたのは、ネットショッピング。しかし、樹はこういったものには疎い。それに、わざわざ契約するくらいなら直接買いに行ったほうがいい気もしてくる。

止めどない悩みに混乱している樹は上縁面に肘を付き、手で額を支える。ふと浴槽内を見てみると、栓がされておらず蛇口から浴槽に注ぎ込まれているお湯が底面を通り渦を巻きながら排水口へと流れていった。

「はあ」

落胆したように深いため息をつき、体を乗り出すと栓を閉める。ようやく底面に水が溜まり始める。

「ま、最後にはこういうのもありか……」

そう風呂場で呟くと、脱衣所にバスタオルを用意しダイニングへと戻り財布を取る。そしてそのまま外へと出た。

## 第15話 この線に、気づいてほしい

樹は西日が眩しさに目を細めつつも、外へ出るなり敷地内に停めてある自動車の横を過ぎ自転車置き場へと向かう。そこに停めてあるのはクロスバイク。決して安くはないものだが所々錆びびついている。自転車の跨ると、漕ぎ始めブロック塀に囲まれた敷地内から出た。目的地は特に決めてはいない。というか、わからないのだ。

「おや、佐藤さん。おでかけですかよ？」

幸い漕ぎ始めたばかりであり速度も出ていなかったため、樹は通り過ぎることもなく自転車を止め声の方へと顔を向けた。

方言全開で話しかけてきたのは樹の家の隣に住む渡辺だった。樹も詳しいことは知らないが御年六十八であり、妻には先立たれたのだという。

渡辺は自身の家の前にある花壇に水やりをしていた。

「ええ、まあ。服を買おうと思ひまして。……そういえばこの辺に安い服屋つてあります？」

へム力を無駄に刺激しないように早く帰るつもりで樹は、目的に合致するような衣料品店を渡辺に聞いた。渡辺は生来この地に住んでいるため、頼りになると考えたのだ。

「ええ、ありますよ。若者が好きそうな店だと……西羽黒駅らへんとか。いっぱいあるから」

樹は北を指差した。

西羽黒駅というのは、樹たちが住んでいる羽黒市内にある鉄道駅だ。

「ありがとうございます。ところで、渡辺さんは水やりですか？」

「ええ、終わったたらキックボクシングジムでも向かおうかと」

渡辺はキックボクシングらしき動きを見せるが、知識のない樹はよくわからない。

「キックボクシング？」

「ええ、若い頃は大会で優勝したこともあるんですよ。でね、その時の相手が——」

話しかけたのは樹だが、このまま話を聞いていたら永久に終わらなさそうと思えた。

「そ、それでは失礼します」

樹は渡辺に会釈をし感謝を述べる。

「え？ ああ、いいって、また聞いてくれよ？」

渡辺は朗らかに笑い感謝を軽くだけ受け取る。

「はい」

渡辺と別れると、樹は北西へと向かう。

樹は十分程かけて西羽黒駅周辺まで向かい、辺りを調べる。大手ファストファッションチェーンや総合スーパーなど、買えそうな場所は多い。

悩んだ末に入ったのは総合スーパーだ。最悪、ヘムカに指図された通りにまた買い物すればよい。

入って子ども服売り場に行くなり真っ先に悩んだのは下着だ。身長が百十ほどしかないヘムカのシャツとズボンは簡単に決まる。しかし、下着は違う。何しろ、貫頭衣の下には何も着ていなかったからだ。

下着なしでも別に構わなさそうなのだが、万が一外出するときを考えると買っておいた方がよい。

適当な物を買った物かごに入れ、忘れずにパーカーも入れる。これで狐耳を強引に押し込めば見えなくなるし、着方によっては首枷も見えなくなる。しっぽはパーカー内に入れば、確実に違和感を持たれるだろうがどうにかならないこともない。

「多分……大丈夫だ」

樹は会計を終えると、おとなしく自転車に乗り帰路につく。樹が家を出てすでに三十分程度。ヘムカを待たせないようにと急いで帰ってきたのだ。

「ただい……ま？」

言うべきなのか迷ったが、仮にもしばらくの間同棲することになる。帰宅の挨拶をして玄関を上がりリビングへと向かう。ヘムカは入浴を終えたようであり、バスタオルに体を包みながらテレビを眺め

ていた。

テレビは丁度夕方のニュース番組をやっており、アナウンサーがニュースを読み上げていた。するとテレビスタジオから、規制線が張られ大量の警察官で溢れかえっている場面が表示される。

「本日、羽黒市において男性の死体が発見されました。羽黒市で遺体が発見されるのは今週二度目であり、市民の中には不安の声も聞こえます」

ヘムカはニュース番組に目が釘付けになっていたが、帰ってきた樹に気がつくのと一瞥し視線を再びニュース番組へと戻す。

「……おかえり」

テレビに向かって言っており樹への信頼の無さが改めて浮き彫りになる。ヘムカは今日目が覚めたばかりなのだから、仕方ないこともある。けれども、樹は同棲するのだからもう少し信頼し合いたいと思っている。ヘムカを怒らしてしまったことは痛手だった。

「ヘムカさん。その……ごめんなさい。嫌がっていたのに、興味本位で触ってしまったって本当に申し訳ないと思っている。二度としないと誓うよ。服も買ってきた」

樹は土下座し、ヘムカに頭を垂れる。けれども、肝心のヘムカはニュース番組に釘付けだ。

「どうしたら許してもらえる？ 何か欲しいものはある？」

樹は謝罪を続ける。そんな中ヘムカは一瞥したかと思うと、大きくため息をつく。さすがに鬱陶しく思えてきたのだ。それに、本当のことを言わずに無駄に好奇心を刺激したのは自覚している。

頭と床をすり合わせている樹の方を振り向くと声をかけた。

「どうしてそこまでするの？」

樹は頭を上げた。

「私さ、自分で言うのもあれだけど怪しいよ？ 狐耳生えてて、しつぽも生えてて、首枷してるし、着てた服だって血まみれ。警察に突き出されても文句は言えないよ？」

ヘムカがこの家に来て感じた疑問だった。居候なのに家主の機嫌を損ねて、正直追い出されても文句はいえないと思っていた。

「そうだね……最初君を見た時、昔の自分を思い出したんだ。昔いろいろあってね。君を放っておけなかった」

「とぅとぅ?」

樹をこんな人間に育てたその事実が興味深く感じられ、深堀りしようとする。しかし、樹は首を横に振った。

「言えない。今は、まだね? それに、僕は自信がないんだ。みんなを不幸ばかりにする。僕の家を発つのは早いほうがいいよ」

樹の顔色が急に変わる。何か苦い経験をしてきた表情で、喋っている間も苦しそうだった。ヘムカも少なからず、苦しく人にいえない経験をしてきた以上詮索はしない。

「わかった、でも新しい居場所が見つかるまで暫くかかると思う」

樹はほんの少し安心できたが、まだ信頼関係を構築できてないし先の件のこともまだ許して貰っていない。表情が曇るまで時間はそうかからなかった。

ヘムカとしても、信頼関係を構築したいのは同じだった。

「いいよ、許してあげる。その代わりに——」

ヘムカは妖艶な笑みを浮かべると、樹が持ってきた総合スーパーのビニール袋を手取る。

「この服貰っていくね?」

それだけ言い残し、ヘムカは別室へと向かった。

## 第16話 一步前進

「朝ごはんできたよー!」

ヘムカは樹の声により目が覚めた。寝ぼけていたヘムカは一瞬物事が把握できず、見慣れぬ景色に困惑していたがすぐに昨日の出来事を思い出し納得した。

和室に広げられた布団を出ると、日光が差し込む濡れ縁を通りダイニングへとやってくる。ダイニングへ行く途中に通過したりビングの掛け時計を見る限り、現在時刻は八時。

椅子に座ると、テーブルの上にあったのは洋風の朝食。食パン、ソーセージ、ヨーグルトだ。そして、キッチンの方を見てみると食パンの袋、ソーセージの袋、ヨーグルトの袋で溢れかえっている。

ヘムカは箸でソーセージをつまみ、齧る。元いた世界では味わえない肉質と肉汁がたまらない。続いて、キッチンのコンロへと目を向ける。IHというわけでもなく、普通のガスコンロであった。ヘムカは目を凝らしてみるが、近くにフライパンは見当たらない。水切りカゴを見てもフライパンらしきものはない。シンクにあるのかと思えば進めるが、その食事中とは思えない異様な視線に気がついた樹が興味深そうにこちらを見る。

「さっきからキッチンばかり見てどうしたの?」

樹は丁度咀嚼していたものを嚙下すると思いい切ってヘムカに質問する。

「いや、このソーセージどうやって温めたのかなと」

ヘムカは真っ白な磁器の皿にあるソーセージを持ち上げる。

「そのソーセージは、電子レンジ調理可能だからね。僕みたいな料理できない人にとっては嬉しい限りだよ」

ヘムカがキッチンを見渡していた理由、それはどうやってソーセージを温めたのかだった。一応電子レンジの記憶もあるのだが、八年も別世界で暮らしていると焼くと茹でるぐらいしか咄嗟に調理方法が思い浮かばなくなる。ましてや、蒸したり揚げたりではなく電子レンジのような二十世紀に入ってやっと登場した調理方法など、昨晚見た

にも関わらずすっかり記憶の彼方だった。

「ああ、なるほど」

へムカは悩みの種が無事に解消されると、ヨーグルトを一気に口へ掻き込み食べ朝食を終える。

「もしかして、電子レンジで温めた食べ物は何だ絶対に食べない人だったり?」

「別にそういうわけじゃないです。居候の身ですし、料理くらい作ろうかなと」

居候の身で、迂闊に外も出歩けない。そうなればずっと家にいることになるが、家でできることなどたかが知れている。せめてもの暇つぶしと思い、へムカは料理を作ることを提案したのだ。

「おお、いいね。助かるよ。でも食材ないから買い出しに行かないとだね」

冷凍食品やレトルト食品も、食品によっては面倒くさい加熱の仕方をするときもあるので決して全てが楽というわけではない。それに、健康面でも不安が大きいのも事実で樹はへムカの提案は喜んで受け入れた。

けれども、へムカの言うとおりにするには外で買う必要がある。樹が買いに行くならまだしも、調理する人と買う人が別では買うものを間違えないかという不安が残る。

「ですね」

へムカも、樹が暗に外出する必要があると言っているのはわかった。へムカとしても吝かではない。大きめフードを被ればギリギリ耳も首枷もしつぽも隠し通せるのだが、どうにも怪しい格好のためイマイチ積極的になれないという理由があった。

「そもそも話、フライパンないし、お皿も足りないだろうし」

樹の家にあるのは鍋と二個のコップ、二枚の皿だけである。二人分ということを考えてとどうにも数は少ない。

「それも買わないとね。じゃあ、支度しようか」

両方の物が同時に買える場所は総合スーパーか大型ディスカウントストア。この近くだと改装したばかりの大型ディスカウントストア

アが存在した。

樹は朝食を食べ終わると、皿をシンクに入れてすぐに外出の身支度を始める。ヘムカは樹の身支度を呆然と眺めていると、樹からパーカーを渡される。

「はい、これ」

ヘムカはパーカーを渡され一瞬戸惑った。一応見せたくない部分は隠れるのだが、どうしても違和感は拭えない。職質も受けやすいだろう。けれども、期待されている状況で断るヘムカではない。パーカーを受け取ると、その長い袖に短い腕を通す。

「しつぽの部分どう？ 窮屈じゃない？ 昨日買った服みたいに穴開けていいけど」

ヘムカは昨晚、渡された服に穴を開けていた。こうでもしないと、しつぽの部分が窮屈でしかたないのだ。

しかし、パーカーは大きめであるということが功を奏し、しつぽはそれほど窮屈ではない。とはいえ、少なからずパーカーを着ると尾骨辺りが妙に膨らんで見えるため、見知らぬ人が見た場合は違和感を覚えることだろう。

また、腕を伸ばしても指先ですら袖から見えることはない。いわゆる萌え袖という格好だ。首枷も無事に隠れて見える。

狐耳の場合は、無理やり押しつぶしフードを被れば特に問題は無い。

全体的に見ればかなり違和感のある格好だが。

「じゃあ行くか……」

行こうと言ったのは樹だが、改めてヘムカを見ると職質されそうだと感じる。懸念しながらも樹は外へと出た。

## 第17話 覗き見よう

家を出た樹たち二人は、敷地内に止まっている自動車に目もくれず道を歩き進める。この辺りは鉄道路線が通り、幹線道路があるといえども人通りは少ない。少し遠くを見渡せば小高い山林が見えてくる。「そういえば何か食べたいものはある？ 肉？ 魚？」

自分が料理を作るのだと張り切っているヘムカは、樹の方を見て食べたいものを聞く。樹は少し思い悩んだ後、苦笑しながら答える。

「肉がいいかな。魚はちよつとね……」

ヘムカが目覚めて鯖を食べていたときも、樹が食べていたのは肉だ。考えるまでもなく、単に樹は魚が嫌いなのだろうと確信する。

「そういえば、車は使わないんですか？」

ヘムカが外出するとき車の真横を通ったのだが、樹には使う気配がなかった。そのことをヘムカは疑問に思ったのだ。

「うん、ペーパーだね。極力避けたいんだよ。後、もつと碎けた口調でいいよ」

「わかったよ……」

ヘムカは樹の言う通りにすることにし、納得しながら駅までの道のりを歩く。

家の周辺はかろうじて民家が多いが、少し歩くと周囲は開けた土地になり見渡す限りの田畑になる。そんな中、田畑の中で異様な存在感を示している簡素な小屋が目に入った。

「……あれ何？」

「駅だよ」

白く舗装されたプレハブ小屋。簡素な駅名看板がかけられただけである。

ヘムカが呆然としてみると、樹はこの駅にどんどん近づいていく。ヘムカも急いで樹に追いつき駅へと到着した。

「電車乗るの？」

ヘムカにとつて、電車とは人で密集しているというイメージだった。密集していれば誰かしら自分の耳や首枷に気づいてしまうので

はないかと危惧する。

「気動車だけに乗るよ。嫌だった？　ほとんど人いないし、車掌と顔合わすだけで済むから楽かなと」

「そうなの？　ならいいや」

へムカが駅の戸を開けると、案の定誰もいない。壁に張られているポスターなども、年代を感じさせるものだった。

羽黒鉄道と書かれた時刻表を見ると、一時間に一本程度で二時間一本という時間帯すらある。へムカはさすがに前世の時刻表までは覚えていないが、さすがにここまで間隔が長くはなかったはず。

けれども、列車に乗るということに懐かしさを感じた。

「列車来たよ」

へムカが駅構内を隈なく眺めていると、すでに駅のプラットフォームにいる樹から声がかかる。微かながら列車の音しており、徐々に音が増していく。やがて、人を急かすような接近メロディが流れる。

へムカもプラットフォームへと移動すると、やってきたのは一両編成の列車だ。しかし、止まってもドアが開かない。

樹の方を見ると、止まった車両の後方ドアの目の前に立つなり車両についているボタンを押す。すると気の抜けるようなメロディとともに後方ドアが開き樹が乗り込んでいく。へムカも乗り込み、乗車券を取ると列車は出発した。

車内を見渡すと、乗っているのはへムカたち二人の他数名。クロスシートとはいえど、その大部分は空いていた。

へムカは、窓側に樹が座っている後方ドアから一番近いクロスシート通路側へと座った。窓の方を見てみると、左右どちらにも盛土と草が見え何も見えない。それらの区間を抜けると、逆に鉄道レールが敷いてあるところが盛土になり左右どちらの光景も見え始めた。西には田畑とたまに聳える鉄塔。東側には住宅や商店がまばらに。けれども、再び田畑へと戻る。

「今更だけどき、ここってどこなの？」

一応ニュースを見ていたとはいえ、流し見であり碌に聞いてやいないなのだ。

「ここは安積県羽黒市。人口10万人程度の都市で、県西部の中心地だよ」

「ふーん」

気になったから聞いたものの、聞いたところで特に何か思うわけでもなくへムカは興味なさげな顔で受け流す。

それよりも車窓から見える景色に何か面白いものがないか見るのに夢中だった。前世を経験しているといえども、元いた世界では見られないようなものが沢山あり逆カルチャーショックを体験しているのだ。普通の人には見慣れたビニールハウスのようなものでも、へムカにとっては興味深く思えてしまう。

殺風景な駅をいくつも経過したところで、樹がへムカの肩を軽く揺すった。

「そろそろつくよ」

前方を見ると、そこには今までの平坦な駅が何だったのかと思わせるほどに複雑な駅が路線を跨いでいた。プラットフォームには、人が二桁以上いる。

そのため、急にへムカは自分のことが心配になった。今までにへムカの格好を見たのは樹だけ。列車の運転手も見はしたが、停車する際に軽く見ただけでそれほど詳しくは見えていないはず。そして、列車の乗客に至っては皆こちらを見ようとはしていない。耳障りな接近メロディが無駄にへムカの心を焦燥させる。

「大丈夫だから。堂々としてれば何も言われないって」

少しだけ、へムカの心が楽になる。

樹はへムカに小銭を渡し、へムカはその小銭をきつく握りしめた。

有人駅なので足早に列車を降りたへムカたちは、改札口へと向かう。密集しているわけでもなく、人はまばらだったが緊張しておりへムカが握っている乗車券は手汗ですっかり湿っていた。

樹は先に改札口へと向かうと、改札口に置かれている箱に乗車券と小銭を入れる。精査することは行わないようで、駅員も散々言っているのか「ありがとうございやしたー」と言いやすい形に本人も知らぬ内に変化していた。

へムカも恐る恐る改札口へと向かい、静かに箱に乗車券と小銭を入れる。

「ありがとうございやしたー」

無事に気の抜けた駅員の声を聞くことができ、へムカは胸を撫で下ろした。

「大丈夫だった？」

手で仰いでいるへムカを見て、樹は声をかける。ただでさえパーカーを着ているのに、ずっと緊張していたのだからかなり暑く薄っすらと顔に汗が滲んでいた。

「うん、大丈夫」

ただ列車に乗り降りしただけなのに冒険に行ってきたかのようだった。けれども、まだ買い物は始まったばかりである。

「じゃ、行こうか」

「うん」

へムカは威勢のいい返事をして駅を出た。

## 第18話 きつく締めて

駅から街中を歩いて数分ほど。ヘムカは樹の後ろを付いてきている。しかしその間、街を歩き交う人から異様な目で見られ続けた。子どもたちの何の悪意のない指差し、ヘムカを目にして口を隠し何かを話している井戸端会議している中年女性たち。

ヘムカは薄々それらを感じとってはいるが、何も言わずに樹の後を付いて行く。そんな中、樹の脚が止まりヘムカの方を向いた。

「本当に、大丈夫？」

「うん、大丈夫……」

何も毎日買い物に行くわけではない。二人分の食事など、まとめて買えば一週間は外に出なくていい。それに、何度も繰り返す内に慣れで自然と話題にならなくなる。

その思いがヘムカを元気たらしめる原因だ。

ヘムカはフードで顔が見えにくいものの、確固たる意志を持った顔で頷いた。

「つらかったら言ってね」

樹とヘムカは再び歩き始め、やがて歩き始めてから十二分ほどのところで目的地である大型ディスカウントストアが見えてくる。郊外にある大型ショッピングセンターよりは小さいが、街中にあるショッピングセンターとして大きめのサイズだ。黄色と黒の独特の色彩が目につき、駐車場には多くの車が停まっている。

「もしかしてあれ？ 妙に新しいけど」

「最近改装したみたいだよ」

このディスカウントストアは、元々総合スーパーからディスカウントストアとして改装されたらしい。

ヘムカは駐車場で誘導員に戦々恐々しつつも無事に店舗内へと入った。

ヘムカが真っ先に思ったのは、店内放送だ。総合スーパーならまだしも、ここはディスカウントストア。客を楽しませるためなのか随分と店内放送に積極的である。だが、ヘムカからしてみれば騒音でしか

ない。

「うるさい……」

へムカはフードを引つ張る。

「ああ、その耳だもんな……」

一般的に人間に狐耳やしっぽはないとされる。樹は改めて目の前の少女が異質な存在であることを悟る。

フードを引つ張りつつ向かったのは食器コーナーだ。磁器やら陶器。無地から色付きなど沢山の種類がある。国外で大量生産されたような皿は百円程度で買えるが、中には一万円以上するような皿もある。

「ところでさ、お金大丈夫？」

数字が五桁以上書かれている皿の値札を見て不安になったへムカが、近くで別の皿を吟味している樹に聞く。

「ああ、大丈夫だ。でも六桁以上はちよつとな……」

樹は彼方を仰ぎ見ながら苦笑する。

へムカも、居候の分際で家主にそこまで浪費させようとは思っていない。おとなしく値札が三桁の白磁の平皿を複数手に取る。他にも、深皿や箸、カトラリーも手に取り買い物かごへと乗せ調理器具コーナーへと移動する。

樹は鍋と薬缶しか持ち合わせていなかったため、フライパン、まな板、包丁、ピーラーなどを入れる。

「こんなもんかな」

何か入れそびれがないか確認していると他のコーナーを物色してきた樹が戻ってきた。

「終わったか？」

そうやって樹は買い物かごを覗き込んだ。

「こんな安いのか？　六桁以上は厳しいと言ったけれども」

樹からすればへムカは子どもも同然、もう少し我儘でも樹は気にしないのだ。

「これで充分だよ」

へムカからすれば、自分は居候の身。無駄な出費は避けたいのだ。

そんな中、ヘムカはふと思う。樹はやたらと浪費したがるが、どのような職に就いているのかと。

「そういえば佐藤さんって仕事何してるの?」

何気ない一言だったが、途端に樹は挙動がおかしくなる。

「ああ、それはだな……」

樹は頭を掻きながら近くを右往左往するも、続く言葉は出てこない。

ヘムカは、何か地雷を踏んでしまったのかと思う。

「言いたくないならいいよ。ごめん」

「ああ、こつちこそごめん」

嫌悪されている職業なのか、或いは子どもに聞かせられない職業なのか。しかし、言いたくなさそうである以上、追及はできない。

「そうそう、ウランガラスとかに替えたくなったら言うんだよ」

樹が話を変えて冗談めかして笑う。

「気が向いたらね」

ヘムカも樹の冗談に乗り、笑い返す。ウランガラスなどここには売っていないだろうが。

「じゃあ会計するか」

樹はヘムカの持っていた籠を奪い、レジを探す。

「ヘムカは少し離れていてくれ。そんな怪しい格好のやつが包丁買うなんてさすがにあれだろ?」

ヘムカは樹の言葉に一瞬怒りそうになったが、続く言葉を受け尤もだと思っておとなくレジから離れる。樹の会計を見ていると、ポイントカードなどは作らず全て現金払いのようだった。

半自動レジで精算を終え、樹が買ったものを袋に詰め終わるとヘムカの元まで行く。

「会計終わったよ。そういえば料理どこで習ったの?」

樹はヘムカの詮索はしないが、このぐらいなら大丈夫だろうと思いつき話しかける。

「親とね。よく焙烙で炒めものを作ってたよ」

樹が反応したのが親という言葉だ。悲しげに何かを偲ぶような顔

になる。そして、表情はすぐに変わり何かを考えるような表情へ。

「ところでほーろく？　つてなんだ？」

　　へムカは咄嗟に答えようとするが、言葉が出てこない。元いた世界では焙烙は当たり前の物すぎたのだ。

「なんだろう……薄い土鍋かな？」

　　表現できる限りの言葉で伝えようとする。しかし、樹はイマイチ理解しきっていない様子だった。

## 第19話 やけに疲れた買い物

「おお……」

へムカたちはエスカレーターで二階へと上がるなり、へムカは思わず感嘆した。視界に入った物量に圧倒されたのだ。

衣料品売り場へと向かい、物色を始める。服は最低限持っているとはいえ、やはり自分で見たほうがよいものを選べるからだ。

そこにあるのは大量に陳列された色とりどりの服。地味なものから誰が着るんだと言わんばかりの際物まである。なお、しつぽのために穴の空いたものはない。

元々服に無頓着なへムカが際物など手に取るはずもなく、無難に無地の物を手に取る。

「やつぱりそういう系に落ち着くのか」

隣にいる樹はへムカが手に取った服を見ながら呟いた。二人はわざわざ衣料品売り場にまでやってきたが、へムカが無地の物を選ぶあたり樹が買ってきたものでも充分だった。

迷路のような服売り場を探索するも、やはりへムカの琴線に触れそうな服はない。今あるもので充分すぎた。

「どうする？ 買い物して帰る？」

樹が服選びに辟易したのか、へムカを唆す。この様子では、目ぼしいものは見つからない。自分自身がつまらないというのもあるが、へムカだって人の目に晒されるのは嫌だろうという計らいもあった。

「うん、そうする」

服を定位置に戻すと、そのまま一階へと降り食品売り場へと向かう。

食器や服売り場とは比べ物にならないほど人の数が多く、どこか眩しく感じられた。

「で、何買うの？」

樹の家には、生鮮食品などまるでなく塩胡椒すらない。へムカは頭の中で料理を思い描くなり、必要な材料を告げていき適宜場所を移動する。

やがて、必要な野菜やら調味料やらを籠の中へ入れ精肉コーナーへとやってきた。冷凍ショーケースの中には、大量の豚肉、牛肉、鶏肉が所狭しと並んでいる。片隅には、鴨肉なんかも売っていた。

「ここでは何買うんだ？」

樹がへムカの返事を待っていると、へムカは答えた。

「ウサギ肉ある？」

「ウサギ肉……う？ あるかなあ？」

てつきり豚か鶏、牛のどれかだと思っていた樹は思わず度肝を抜かす。

鴨肉が売っていた場所へと向かい、鴨肉を退けて探してみるもウサギ肉は見つからない。そんな様子を見ていたへムカが、「ああ」と納得した。

「日本ではウサギは食べないのか……」

一応現在でも山間部の一部の地域では食べられているらしいが、少なくとも一般的ではない。

日本ではウサギを食べないことを思い出すと、他の肉にしようと考え直す。

「じゃ、じゃあ豚にしよう。豚ロースね」

樹は大々的に積まれている安価な豚ロース肉を手に取り籠へと入れた。必要な物を全て買い揃え、後はレジに行くだけ。そう思い二人がレジの近くまでやってくると、レジの直ぐ側に大量のチョコ菓子が山のように積まれていることに気がついた。

「そういえば、お菓子とか食べるの？」

樹は必要な食べ物しか買わず、菓子も食べないのだがたまには買ったほうがいいのかと思索しながらへムカへと聞いた。

「うーん。どうだろ……」

前世の頃には甘いものを沢山食べていた記憶があった。けれども、今は別の体。性別が変わったことも相まって、前世と好きなものが同じとは考えにくい。

「一応木の実とかは食べてたよ？」

「木の実……栗とか？」

食べ物の話ではあまり使わない木の実という単語に困惑しながらも、樹なりに具体例を探し出す。

「栗はなかったよ。胡桃とか」

「そうなのか……」

胡桃はあつたのに栗はない。その奇妙さに、樹は頭を抱えるも菓子売り場へと到着する。甘い菓子が多いが、へム力は自然な味やしよっぱい菓子が並んでいる場所まで移動する。

「じゃあ、これ」

海老煎餅を棚から取るなり樹の持っている籠へと入れる。そこでへム力は気がついたが、いつのまにか買物籠は満杯になり食器類も持っている樹は随分と重そうにしていた。

「大丈夫？」

この言葉はいつも樹がへム力にかけていた言葉だ。へム力が樹に言うのは、どこか緊張してしまった。

「大丈夫だよ。筋力あればよかつただけだね」

樹は自嘲気味に笑う。

へム力が樹を改めて見ると、色白で華奢な体をしている。同年代と比べてもかなり貧相な体と言えた。

「部活とかしてなかったの？」

へム力は興味本位で樹に聞いてみるが、樹は何と答えようか迷っていた。

「うん……帰宅部だったんだ。中高ずっとね」

詳らかに説明することなく、簡潔に樹は答えた。

「そうなんだ。入ろうとは思わなかったの？」

「思ったよ。でも、いろいろあってね」

言い方から、聞かれたくないというのは理解できた。

へム力も、これ以上何も聞こうとは思わず二人揃ってレジへと並ぶ。見えているわけではないが、後ろに並んでいる客から見られているような視線を感じた。

精算を終え、ディスプレイストアから出た後も二人の間に発生した重たい空気は淀んだままだった。

## 第20話 異端

へムカたちは駅までの帰路についた。その間も、二人は一言も交わすことはない。この重苦しい空気をどうかしよう、口を開けるが何か言葉が飛び出るわけではない。へムカは時折樹の顔を見ては樹から何か話しかけてくれないかと期待する。だからこそへムカは前面の注意がそれてしまった。

二人が丁度道を真っ直ぐ進んでいると、丁度へムカたちは路地へと差し掛かる。駅まで真っ直ぐ帰る二人は見向きもしなかったが、丁度路地には大通りのあるへムカたちの方向へと走ってくる育ち盛りの少年が居た。小学生低学年ほどの少年であり、その手にはサッカーボールを携えている。樹が道路側でへムカが路地側にいたこともあり、へムカと少年はぶつかってしまう。

「ひゃっ」

全く警戒していなかったへムカは少年とぶつかりその場に尻もちをつく。少年も同様であり、痛がりながらも立ち上がった。

「ごめんなき……」

少年は、尻もちをついたへムカを見て固まっていた。

へムカはすぐにその理由に気がついた。へムカと少年がぶつかった際にフードが外れてしまったのだ。元々パーカーはしつぽまで隠せるように大きめに作られておりフードの紐も緩かったのだ。

へムカを見ていた人物はもちろん、偶然へムカが視界に入っていた人もへムカを凝視せざるを得ない。

朽葉色の髪の毛はどうかなる。茶色と似ているし、茶髪と言いはれる。何より、髪を染めたといえどもなるからだ。

橙色の瞳もどうかなる。染め、カラーコンタクトをしていると言えば誤魔化せないことはないだろう。

しかし、問題は頭頂部から生えている狐耳である。コスプレをしているにしても、違和感が少なすぎて逆に違和感がある。髪の色と完全に同調しているからだ。ウィッグと一体化しているにしても自然な仕上がりだ。

そもそも、フードを被って目立たないようにしているがコスプレを止めれば目立つことはない。

樹は急いでヘムカにフードを被らせるとそのまま強引に腕を掴み引きずるように駅までの道を急いだ。ヘムカの容姿に驚いていた通行人は、歯を食いしばって歩道の中央を小走りで急ぐ樹に気圧され思わず道を開ける。

なんとか駅へと到着した二人。幸いにも追っかけてくるような人はいなかったため、駅に入ってもヘムカの容姿を見られたものは一人もいなかった。

尤も、走って息を切らしている若い男がフードを被り顔が見えない子どもを連れ回している様子は決して怪訝な目で見られないわけではなかった。

駅で膝に手を乗せ呼吸を整えた樹は、ヘムカの方を振り向いた。「まずいな」

ヘムカ自体あまり見られたくないとは考えていたが、一瞬見た程度ならコスプレだったと言いたい張れると思っていた。

しかし、樹の目はそんな楽観的な目ではなかった。

「撮られてなければいいが……」

樹が一番気にしていたのは、ネット上での拡散だ。

「あつ……」

それを聞いてヘムカも前世で見知った文明の利器を思い出す。何分、前世ではあまり使う機会もなく、現世ではテレビの単語でたまに聞くだけですっかり頭の中になかったのだ。

「当分出ないほうがいいな」

人の噂も七十五日とはいうが、そんな幻想はインターネットの登場でとつくに崩れている。

人の記憶は自然に消えていくが、インターネットは確実に消えない。万が一インターネット上に流出すれば外出などともじやないができなくなる。子どもであるため、マスメディアも配慮してくれるとは思いますが匿名を利用したインターネットユーザーの手にかかれば拡散など容易である。

「そうだよね……」

へムカは、悲嘆する。だが、諦めの気持ちもあつた。

へムカは、こんな見た目ながらも外出できることが嬉しかった。けれども、それは間違っていたと悟る。改めてへムカは人間ではない、異分子なのだ実感させられる。

「帰ろうか」

駅の時刻表を見るが、丁度数分後に発車となる。

自動券売機はなく対面販売しかないとため、きつぷを樹は二人分購入しへムカに手渡すとそのまま改札を通りプラットフォームへと降りた。

プラットフォームでも駅の外から見えない位置にあるベンチに腰を下ろすなり先程自分のことを見た人がいないかと、へムカは疑心暗鬼になりプラットフォームを見渡す。

もちろんへムカの姿を見た人物全員は覚えていないのだが、そうしたい気分だった。

幸いにもへムカの姿を見た人物らしき人物は見当たらず、列車がやってくるなり列車へと乗り込んだ。同じ駅から乗った人物は二人しかおらず、相変わらず列車内は人が少なかった。

列車の中なら外から見ても早すぎてよく見えないし、中にはほとんど人がいない。へムカにとっては心が落ち着ける場所だった。

その後の列車の旅も相変わらず人が乗ってくる様子はなく無事にへムカが乗った駅へと到着すると難なく下車できた。

そのまま無事に家までたどり着けるのだと思っていると寂声が聞こえてきて思わず体を震わせてしまった。

「佐藤さん、こんにちは」

樹に声をかけたのは隣の家に住む渡辺である。今日も元気に自宅の庭にある木の枝打ちをしていた。

「あ、どうも。渡辺さん」

樹は軽く会釈する。そんな中、へムカに渡辺の視線が移る。

「そちらの子は？」

へムカは自分が話題になったことを聞くと樹の後ろに隠れた。

「ああ、親戚の子で人見知りなんですよ。名前はへムカつていうんですよ……」

樹は適当に思いついた嘘で取り繕う。名前を言う必要はなかったが、長話が大好きな年齢。名前を聞かれるのは目に見えていた。

「おや、外国の親戚かい？ 日本も随分と国際化してきたね」

渡辺は樹の嘘を鵜呑みにすると、勝手に外国人の親戚だと見事に思い込んでくれた。

「それではどうも……」

何も疑う様子はなく、このまま引き下がろうと挨拶を述べると二人は家へと帰った。買ってきたものを棚に入れたり、冷蔵庫に閉まつたり。それが最後まで終わるとへムカはソファに勢いよく飛び込み「疲れた……」とため息をついた。

## 第21話 こねこね

「うーんおはよう……」

午前七時。ヘムカが樹の家に来て丁度三日目である。

朝起きて寝ぼけているヘムカが、樹が聞いているかも知らないのに朝の挨拶を口にしながらテレビをつける。するとちようど朝のニュース番組をやっており、アナウンサーが感情を込めずにカメラ目線で説明していた。

「次のニュースです。羽黒市で、本日遺体が発見されました。羽黒市で遺体が発見されるのは今週三回目であり、警察は注意を呼びかけています」

アナウンサーが読み終わると、場面は羽黒市の山中へと変わる。近くに民家も商店もなく山林しかなくカーブも多いが、別の町と羽黒市を結ぶ幹線道路らしく決して交通量は少ないのだという。

第一発見者は道路を車で走っていたが、物音に気が付き車を路肩に停め近くまで向かった。暗くてよく見えなかったが何やら細長い筒のような物を持った加害者が被害者を襲っているところを見たらしい。

警察へと通報し、防衛のためにと車に乗って止めるように言いに行くと、加害者が驚いて山中へと消えていったという。

「先日から起こっている事件との関連性も含め、安積県警は調査しています」

ヘムカはリビングを過ぎ、ダイニングへと向かう。丁度樹も起きてきたようで、いつもの癖で朝食を作りかけていたのか冷蔵庫から冷凍食品等を漁っている。

「ああ、おはよう……そうだった。朝食作るんだったよね」

樹は完全に覚醒すると同時に、昨日必死の思いをして購入した食器やら食品やらを思い出す。

「とりあえず、卵とつてくれる？」

シンクで手洗いをしている最中、樹はヘムカの言う通りに冷蔵庫から卵を取り出し手洗いを終えキッチンクロスで手を拭いているヘム

カに卵を渡した。

ヘムカの元いた世界では、鶏を見かけることなどなく鶏卵も同様であった。しかし、決して鳥類を食べる文化がなかったわけではない。その過程で、少なからず鳥類の卵を食べることがあった。

あまり気にせずに鶏卵を割ろうとするが、割れない。自然界に存在するものよりも養鶏場で取れたものの方が栄養が多く卵の殻も厚くなるのだ。

力を入れてみて、割れはしたが若干中身が飛び散ってしまう。

「はい、これ。ペーパータオル」

「ありがとう」

樹はこうなることを見越していたのか、ペーパータオルを丁度開封しているところだった。

その後も無事に作り続け、朝食は完成しダイニングテーブルへと移動させた。

ヘムカは椅子へと座り目の前の朝食と対峙する。しかし、視線はテレビの方を向いていた。

一通りニュースを一巡し、殺人事件の詳しい内容に入ったのだ。

「殺人事件だって、怖いね。ところで私に基本的人権は適用されるのか——。どうかしたの？」

この近くで発生しているであろう事件に、ヘムカは口では怖がるもあまり怖がっている様子はない。所詮は他人事であるため、イマイチ実感がわかないというのがヘムカの心情だった。

それでもヘムカは目玉焼きを啜えながら共感を求めたのだが、樹も目線をテレビに張り付けたまま瞬き一つしない。それはこの事件の報道が終わるまで続き、ヘムカは不審に思いながらもただ目玉焼きを咀嚼することしかできなかった。

「えっ……と。何か言った？」

樹はヘムカの話をもるつきり聞いていなかった。何かヘムカが言っているのはわかったが、テレビに集中するがあまりそこまで気が回らなかったのだ。ヘムカは呆れてため息をつくも再び言うことにする。

「いや、この事件怖いねって話。あと、私は人間扱いされるのかなって。駄目でも一応動物愛護法違反にはなるのかな？」

樹に説明している間にも、またもや疑問が浮かびヘムカは疑問を追加し述べてみる。

「ああ、怖いな。事件現場はこの辺りらしいし一応注意しとけよ」

ヘムカが対岸の火事だと思いき先の発言も冗談めいたものだったのに対し、樹は隣の火事に騒がぬ者なしと警戒しているようだった。「う、うん」

冗談半分で言ったのに真面目に返されヘムカも一応同意しておく。

「でも、動物愛護法で指定されている愛護動物は、人に専有されている哺乳類のほず。君は僕に専有されているわけではないと思うけど」

「人に専有されていないと言うことは、そこらの虫けらと同じ扱い？

つまり無罪？」

万が一の話だったが、もし狐耳としっぽがあるだけで殺人罪が適用されないのであれば随分と亜人に優しくない世の中である。

考えれば考えるほどに、ヘムカは不安になってくる。

「まあ、そうそう巡り合うこともないと思うけど、一応僕がいない時はちゃんとドアの鍵閉めてね」

ヘムカは大きく首肯した。

「じちそうさま」

樹は朝食を食べ終わると外出の身支度を始める。食べ物を買に行くのだ。当初はヘムカと一緒に行くこうと考えていたが、先の出来事があったせいで考え直し樹が単独で担当することになったのだ。

樹は玄関へと向かい、靴を履く。

「じゃあ、行ってくる」

ヘムカの方へ振り向きながら言うと、樹は家のドアを開けて外に出ていった。

朝食を口の中へと押し込んだヘムカが急いで玄関まで向かうも、樹は行ってしまった後だった。そして、挨拶の言葉も口が食べ物でいっぱい状況であるためすぐには出ず一分ほどして口の中の食べ物を全て飲み込めた後、ようやく小声で言う。

「いつてらっしやい」

けれども、返事をしてくれる相手はいない。ヘムカが目覚めてからずっと樹と一緒にいたのだ。急に一人になったことに不安を感じる。

ヘムカはリビングへと早足で向かい、気を紛らわそうとテレビをつける。朝のニュース番組の続きなのだが、国内外で起こった重要なニュースの報道は終わり芸能人のニュースだ。八年もこの世界にいなかったヘムカにとって、一応テレビで聞いたことのある名前も少しばかり出てきていたのだが今テレビに映っているのは若手アイドルである。当然、八年前にはテレビに出ていなかったためヘムカにとっては右も左も分からない状態だった。歌うならまだしも、ただメンバー同士の会話が延々と続きヘムカにとってはただただ苦痛の時間だった。

イライラして他の局に変えるも、ヘムカにとってはどれも同じような番組に見えてしまう。BSにしようにも、アンテナがないのかBSは映らなかった。

ヘムカは諦めてテレビを消し、リビングにあるソファで横になった。ただ目を瞑っただけなのだが、次第に瞼がどんどん重く開けられなくなっていくヘムカは眠ってしまった。

## 第22話 電話はどこ？

「ん？」

へムカふとおかしな物音に気が付き目を覚ました。最初は気にしなかったが、継続的に物音がするためソファから起き上がると音のする玄関の方を見る。しかし、誰もいない。

「帰ってきたの？」

へムカは樹が帰ってきたのかと思ったが、ニュースで見た不審者や出かける前に樹が言った言葉がふと気になり足を止める。

再び物音が玄関方面からすると、途端に体を震わせた。謎の物音に怖気づきながらも、玄関へと向かう。樹の靴は玄関にはないため、まだ外出中であることがわかった。

そうになると、音の原因は外にある可能性が高いわけだが樹に釘を刺されているへムカは迂闊に動くことができない。

この近くで殺人事件が今週だけで三件発生している。同じ羽黒市であり、郊外にあるこのへムカたちの家にもその殺人鬼がやってくるという可能性を否定できなかった。

「ま、まさかね。……おとなしくしてれば帰るよね」

まさかとは思ったが、異世界転生し再び元いた世界に戻ってきたへムカにとつて極僅かな可能性という言葉の中にある安全性は全く信用できない。

へムカは中に人がいると悟られないように、音を立てないようにリビングへと戻る。けれども、安心はできない。この家にはブロック塀があるが、ブロック塀を乗り越えさえすれば玄関ドアに鍵をかけようとも濡れ縁から入り放題である。

へムカはおとなしくソファへと戻り安静にしておく。しかし、数分経とうとも謎の音は消えない。それどころか、明らかに近づいており家の敷地内から音がしているような気がするのだ。

「大丈夫、大丈夫だから……」

自己暗示をかけ震えを取り除こうとするも、体の震えは止まらない。そんな中、敷地内へと侵入した音は濡れ縁へと近づき、終いには

濡れ縁から音がする。明らかな人の足音だった。

「そうだ、警察呼ぼう」

前世の記憶が曖昧だとはいえ、さすがに警察への緊急通報の番号は覚えていた。急いでヘムカは固定電話を探した。

「えつと……。どこだ？」

ただでさえ濡れ縁に足音が来てしまっている以上、下手に探して音を出しバレたら元も子もない。ヘムカはリビング中を探してみるも固定電話が一向に見当たらない。

リビングを出てダイニングへと向かうも、ここでも電話が見当たらない。

「なんでこんな時に……」

電話の位置を確認しなかった過去の自分を責めながらもヘムカは探し続ける。やがて音は一時的に遠ざかった後、どこか狭みのある音が響いた。

「こちらあー！ 人んちの庭でなにやってんだ！」

一瞬誰の声かわからなかったが、少なくともヘムカはその声を聞いたことがあった。事態がうまく飲み込めず動揺していると、近くで金属音がしきりに響く。

少なくとも、敷地内ではなかった。寝室の和室へと向かい、障子戸をわずかに開けて覗き見る。

しかし、庭には誰もいなかった。庭の安全を確認しつつブロック塀に囲まり顔を覗かせてみるが、そこには見知らぬ男と隣人の渡辺で戦っている光景があった。

見知らぬ男は短剣を使い、渡辺は鉈を使い六十八とは思えないほどの俊敏な動きで見知らぬ男と戦っていた。

「昭和五十四年安積県キックボクシング大会優勝のこの私に楯突こうとはな……」

渡辺は襲われているというのに、どこか生き生きとした表情を見せている。

現代日本とは思えない光景に思わず困惑してしまう。そんなことよりも通報したいところだが、少なくともヘムカが探した場所には固

定電話はなかった。

もし渡辺が負けたら次に狙われるのはヘムカ。どうすればいいのか、逃げようかと迷っているとパトカーのサイレン音が近づいてきた。

これで助かると思ったヘムカは、思わず手をブロック塀から離し庭に倒れ込んだ。一息ついたのも束の間、ブロック塀の向こう側は信じられないことになっていた。

「警察だ！ そこの！ 武器を捨てて投降しろ！」

拳銃を構えた警察官が男に投降を促し男へと近づいていく。しかし、勝てると思ったのか男は渡辺から警察官をターゲットへと変え短剣を持ち警察官へと突撃する。

「やめろ！」

警察官の叫び声の後、発砲音が炸裂し男がその場に倒れた。撃たれた場所が悪かったのだろう、倒れた男は一分もしないうちに微塵も動かなくなっておりただ現場には重たい空気のみがのさばっていた。

ヘムカはブロック塀に背中を合わせながら、大人しく聞いており思わず冷や汗を書いた。

「ヘムカ！ 大丈夫か？」

そんな中、慌てて帰ってきた樹がヘムカの元へとやってくる。

「良かった。無事か……」

ヘムカの無事を確認すると、買い物袋に卵が入っているにも関わらず手から脱力したのかレジ袋を落として安堵した。

ヘムカとしても、樹の姿を見れたことに安心できたため息をつく。そして、樹の方へと振り返ると、樹も何か話があると察してくれたように目と目が合う。

「ねえ、電話ってどこにあるの？」

家に来たことがない訪問客が言いそうな、ありふれた言葉。けれども、その言葉を受け樹は口を固く閉ざす。

電話の場所を聞いているだけでなぜここまで口を閉ざすのか、ヘムカには理解できなかった。そして、樹が閉ざした口が開くには数秒を要した。

「ごめん、電話は契約していないから持っていないんだ」

樹はへムカに頭を下げたまま話を続ける。

「そして、契約は……したくない。もちろん、携帯電話も……」

これがお金の問題でないことくらいはへムカにもわかった。ウランガラスを進めるような人が電話代をケチりはしない。

「理由を聞いても？」

過去に電話回線業者の対応がひどかったから。過去に迷惑電話が沢山かかってきた。どれも違うような気がして聞いてみる。

けれども、樹はまたしても口を噤んだまま何も話そうとしない。

「言えないんだね」

へムカの言葉に小さく樹は頭を縦に振った。

へムカとて、人に言えない秘密を沢山抱えている。他人に秘密を話すことを強要はしたくなかった。

悲鳴を上げればきつと誰かが通報してくれるだろうと、へムカは対策を練る。その後は、二人とも何も話さないまま一日が過ぎていった。

## 第23話 綻び

すっかり夜の帳が下り、月が真上に移動しているという時刻。ヘムカは雨の音で目を覚ました。

「雨か……」

ただでさえ音には敏感な種族。ましてや、最近ではヘムカは五感を良くも悪くも刺激され、何事にも過敏になっていた。

一度目を覚ましてしまったためか、布団に包まろうとも中々瞼が重くならない。水でも飲むかと思いい、布団を抜け寝室を出るとリビングへと向かう。コップを取り出し水道の蛇口を捻り注がれた水道水を一気に飲み干す。

胸の奥にある不安を洗い流してくれないだろうかと思ったが、全く徒労に終わってしまったようだ。

すっかり目を覚ましてしまったヘムカは寝れる気がしないためリビングへと向かうと明かりをつけテレビをつけた。

丁度深夜のニュース番組をやっていたらしく、アナウンサーがニュースを読み上げていた。

「昨日発生した羽黒市内の傷害事件で、警察は容疑者と思われる人物を逮捕いたしました。しかし、容疑者は身分を確認できる公的書類を有しておらずかつ言葉も通じないため身元確認が難航しております」

テレビに映し出されたのは、渡辺の家の目の前だった。リポーターが警察官たちにいる規制線限界まで近づきながら事態を解説する。

「次のニュースです、羽黒市において器物破損や窃盗等の事件が今週に入り犯罪の認知件数が急上昇していることが判明いたしました。不審者の目的件数が数多く寄せられており、警察もパトロールを強化するとのことですよ」

またしてもテレビ画面に映し出されたのは羽黒市の映像だ。物が壊された後や、盗まれる瞬間の防犯カメラ映像などが流れる。

続いて、羽黒市民であろう老婆にレポーターがインタビューする映像が流れた。

「怖いよー。本当に、どっから来るんだらうね？」

インタビュアーに老婆は不安げに語った。

続いて、画面は撮影スタジオへと戻った。アナウンサーやら芸能人やらが互いに怖いだの恐ろしいだのしょうもないことを話し合うと続いているニュースに移行した。

しかし、ニュースの内容が変わった後もヘムカはそのニュース番組に釘付けだった。とはいえ、別にヘムカはその別のニュースを一心不乱に聞いているわけではない。むしろその逆だ。アナウンサーの言葉など微塵も聞き取ってはいないのだ。

では、なぜヘムカはテレビ画面に釘付けなのか。

それは、とある可能性を考えてしまったからだ。

今まではどこにでもいるただの不審者がたまたま複数人いたと考えていた。けれどももしこれが、ヘムカがこちらの世界に来るのに使ったあの時空の歪だったら？

あらゆることの辻褄が合うのだ。

言葉が通じないのにも説明がつく。短剣などの物騒な物を持っているのにも説明がつく。

先日見た長い筒を持ったという男も、恐らく槍を持っていて見たことない自動車に驚いて逃げたのだろう。

あの歪が結局何なのかはわからない。けれども、ヘムカには大きな不安があった。これ以上放置すれば最悪ライブやライブの部下が来て自分が連れ戻されるのではないかという不安だ。

「これはまずい」

考えても仕方がない。そう判断したヘムカは、外へと飛び出た。

人目が気になるが、真夜中のしかも雨。あまつさえ、田んぼが広がる田園地帯。人通りなんてないし、街灯がないので真っ暗である。多少遠くから見られても漠然と人がいたことくらいしかわからないだろう。

ヘムカが家を出ると、真っ先に感じたのは魔力の流れだ。この世界では魔力がほとんどなく回復しきっていない。けれども、ごく僅かに魔力の流れが発生している。魔力に敏感なヘムカだからこそできた芸当だ。

すぐにその流れを探ることにした。しかし、魔力の濃度が低すぎて追跡は困難を極める。

そこで、ヘム力は方針転換をする。ヘム力が覚えているのは、森の中だ。熊がいた。そして、樹が居た。

樹、すなわち人間が森の中に入るということはそれなりに道路から近い位置にあったのではないか。

「じゃあなんで……？」

そう考えると必然的に疑問が湧いてくる。なぜ樹はあの晩、森の中にいたのかということだ。もしかしたら、自分同様に時空の歪に気がついたのではないか。そんな疑問が雨後の筍の如く湧いて出る。

ヘム力はその疑問を後回しするため、両手で頬を思い切り叩く。そして、とりあえず家の南にある森から入ることにした

森の中から南下していくが、徐々に魔力の反応が近くなっているのを感じる。ヘム力は、間違いないという確信を抱きつつ一時間近く歩き続けた。

元々村では老若男女問わず歩いたため多少の移動なら平気だった。しかし、この世界に来て以降家の中に閉じこもることになったため、脚が鈍り疲労が溜まる。

「後ちよつと……」

脚の痛みを我慢しながらもヘム力は森の斜面を進み続ける。こうして、記憶にある爪痕のある松の木を発見した。熊がいる以上、爪痕のある木など少なくはないだろうが、爪痕の形が完全に記憶と合致していた。

幸いにも近くに熊の気配はない。ヘム力は先日行えなかった、この松の裏を確認する。

「あった……」

空間が歪んでいた。

透明でありながらも、後ろに映る背景が歪んでいる。

ヘム力は息を呑むと、丁度近くに転がっている枝を手に取りその歪の中へと恐る恐る入れてみる。入れた直後は歪んでいるだけだが、押し込んでみると先端部分にかけて徐々に薄くなり、とうにその歪を貫

通しているであろう枝の先端は見えなくなっていた。

ヘムカが枝を引き抜くと、そこには先程と何ら違いのない枝がそこにはあった。

安全確認を終えるとヘムカは頭を歪へと埋めた。ヘムカの視界は徐々に歪んでいき、やがて薄っすらと明るい闇の世界へと誘われた。

殆どが闇で見えないが、明かりの正体だけはわかった。それはライベの邸宅であると。

今でもあそこにライベが居て自分のことを探している。そう考えるだけで体中から汗が吹き出し震えだす。

急いで頭を引っ込めると、松の木に凭れかかった。

「間違いない」

ヘムカは、謎の歪に視線を向ける。理由はわからないが、この歪を伝い向こうの世界の人間、特にライベの指示でこの辺りを探していた兵士がたまたま歪に入ったのだろうと。そうなれば、やることは簡単だ。

塞げばよい。

思い立ったが吉日とばかりにヘムカはその歪に対して修復魔法を発動させた。割れた皿を治すような要領で、修復魔法を使った。魔力が根こそぎ持っていかれるような感触の後、歪を見る。しかし、ヘムカは絶句した。

「なんで……？」

歪はたしかに小さくはなった。けれども、完全に消えてはいなかった。再び魔法をしようにも、ヘムカにはもう魔力がない。魔法を発動させることは不可能だ。

「どうしよ……」

向こうの世界に戻り魔力が溜まるのを待つかとも思ったが、ライベに見えられれば何をされるかわかったものではない。その愚かな考えを全力で否定する。

他に策はないのか。ただただヘムカは考え込む。そして、一つだけ方法を思いついた。けれども、それと同時にヘムカは歯を食いしばり澁面を作っていた。

### 第三章

#### 第24話 夜は明けた

へムカが家に戻った頃には夜が明け始めていた。あれだけ沢山降り注いでいた雨は、まるで嘘だったかのようには散っていった。

とはいっても、まだ五時。人通りは少ないため、へムカも無事に誰にも見られることなく家の玄関前へと到着した。樹は寝ているだろうと考え、起きてから話をしようと決心し扉を開ける。

「ただいま……」

小声で呟きながら玄関ドアを開けるが、玄関に誰かが立っているのがわかった。及び腰でその人物の姿を確認する。

「へムカ……？　へムカなのか？」

立っていたのは、樹だったのだがどうもいつもの樹らしくはない。何やら深刻そうな顔をして、へムカを見つめるなり間髪を入れずその場に泣き崩れてしまった。

わけもわからず嗚咽を漏らす樹に、へムカはどうしていいかわからなかった。

「わ、私だけど……。どうしたの？」

とりあえず、樹の側まで来て質問の返答をする。

背中を擦ったりして宥めようとするが、樹はへムカを抱きしめた。

樹は歔歔の声を出しつつ、どんどんへムカを締め付ける力が強くなっていく。

「ちよ、ちよつと!」

へムカは当然動揺した。元男だったとはいえ、八年も前のこと。

父親を除いて異性に抱かれたことなど、現世では初めてだった。抵抗もできそうになく、ただへムカは樹のなすがままにされる。

とはいえ、へムカが樹に感じるのは親愛や家族愛に近いものであり、へムカとて嫌なものではなかった。

やがて樹が落ち着きを取り戻すと、へムカも落ち着きを取り戻す。

へムカには、樹が何を思ったのかはわからない。けれども、この慌

てよう。きつと樹は何か過去に何かあったのだと強く悟る。

今までお互い不干渉だったが、今回はどうしてもヘムカの過去を話さねばならない。そうなればその不干渉の協定は崩れ去る。もし、樹の過去を知れば何か役に立つのかもしれない。今までヘムカは樹にいろいろと助けられていた。だからこそ、ヘムカは樹のことを強く知りたいと思えたし力になりたいと思えた。

手を伸ばすと、頭上にある蓬髪を丁寧撫でる。

「大丈夫？」

樹は感極まったような顔のままヘムカ見下ろした。

さすがのヘムカもそんな顔で見られるとは思ってなかったようで樹のことを心配する。

「ありがとう」

わけもわからず感謝され、困惑し首を傾げた。

「なら、よかった？」

樹はヘムカから離れると、その場に座り込んだ。泣きつかれたのもあるし、何よりこのようすだと樹は寝ていない。ヘムカがいないとわかってからずっと探していたのだろう。

「ごめん、どうかしてた。とりあえず、ダイニング行こう」

樹は呼吸を整えるとそのままダイニングへと向かいヘムカも同様に向かう。コップに水道水を注ぐと、そのまま一気飲み。そして、樹とヘムカはダイニングにある互いに反対の位置の椅子へと座った。

「ごめんね。僕と一緒に生活、嫌だったのになって」

「そんなことない。私は、佐藤さんと一緒に居たい」

誰と一緒にあれ、この姿では碌に外出すらできない。それを同居人に言っても仕方のないことである。

それに、ヘムカの居場所なんてない。居場所を探すとは言ったが、ヘムカはずっと樹の側が良かった。まだ全てを明かせてはいないが、世界で一番信頼できるからだ。

「本当？」

いつも物怖じしている樹だが、このときばかりはとても弱って見えなかった。ヘムカは優しい言葉をかけることにする。

「うん、本当だよ。そして、ごめんなさい」

ヘムカは樹に向かつて頭を下げた。夜中に外出はあまり褒められたものでないのは理解しているし、何より今の自分は見つかると大変なことになるかもしれない存在で八歳なのだ。

前世があつたことを樹に伝えてはいないが、心配されるのは当然だろう。

「でもまあ、ヘムカが無事でよかったよ。で、どこ行ってたんだ？」

安堵の言葉を告げると、樹はテーブルに両肘をつけて本題に入る。

「その前に、一ついい？」

ヘムカも本題には入りたいが、その前に一度自分のことを話さなければならぬ。

「何だ？」

「羽黒市で起こってる殺人事件や不審者」

その言葉を聞き樹は息を呑む。

「私が原因かもしれない」

「どういうことだ!?!」

樹は思わず椅子を蹴飛ばすように立ち上がり両手で強くテーブルを叩いた。

一応ヘムカは驚くのを避けて冷静な話し合いをするために遠回しに言ったつもりだったが、驚くのは避けられないようだった。

ヘムカは手のひらを見せその場で優しく押すようにし、樹を落ち着かせる。

「落ち着いて聞いて。まず、私は人間じゃなくて亜人っていうのは以前言つたよね」

ヘムカと樹が本格的に話し始めた初日に、ヘムカは亜人について簡単に語っていた。それは樹も覚えているらしく「ああ」と答えた。

「で、亜人はこの世界にはいない。別の世界に住んでいるの。で、私も元々その世界にいたけどあるとき、歪からこっちの世界に来たの。羽黒市を騒がせている不審者も、みんな私のことを探しに来ているんだと思う」

樹には信じられない話ばかりであり、頭を抱える。しかし、ヘムカ

からすれば予定通りの反応だ。いきなりそんなこと言われて素直に受け入れられる人などいるわけないのだから。

「あんな大掛かりで？　となると、ヘムカは王女とかそういう立ち位置なのか？」

大人数が必死にヘムカのことを探している。庶民の子であつても家族は探そうとするだろうが、大人数の動員は不可能である。そうなれば、金や権力のある家庭を想像するのは仕方のないことだ。

「その逆、底辺中の底辺。奴隷なの。ある人に買われたけど逃げ出したから、いろいろ探しているんだと思う」

ヘムカは表面上は乾いているとはいえ、夜間ずっと雨を吸収し続けた重たいパーカーを緩めて首枷を見せつける。

樹も首枷のことは理解していたが、最近はずっかり見慣れてしまっていた。

## 第25話 死の直前

「最後に一ついい?」

へムカは、自分自身のことを全て話し終えたと思っていた。あと一つ、何か疑問を持たれるようなことがあったかどうかと思案するも思い浮かばない。大人しく樹の方を向いた。

「へムカは別世界から来たんだろ?」

樹はもう一度へムカに確認する。

「そうだけど」

へムカはもちろん肯定する。一体何を言われるのかと疑問だった。

「なんで日本語喋れるんだ?」

すっかり失念していたことを指摘され、思わず「ああ」と呟いてしまふ。

だが、日本語が喋れる理由。それは、中々に言い出しにくいことだ。前世があるのはまあいいだろう、問題なのは前世が男だったという点だ。最悪、言わなくても大丈夫のだがへムカは信用のためにも言うておきたいと決意した。

「その、私ね」

樹を刺激しないように遠回しに告げる。樹も何か言いにくいことだとわかったらしく、大人しくへムカのことを見守っている。

「前世の記憶があるの。それも日本人として」

急に樹のへムカへの視線が驚いた視線へと変化した後、痛い子を見る目に変化した。苦笑いをしながら、ただただ呆然としている。

「……疑ってる?」

へムカは眉を顰めた。

「いや、非科学的というか」

樹はどうにも納得がいつていないようだ。

「それをいうなら耳やしつぽだって充分非科学的では?」

「いやいや、既存の動物のDNAを組み合わせれば充分に実現可能だよ。へムカが実際例としてあるわけだし。それに比べて前世の記憶ってのは疑わしいよ。物質的な繋がりが無いのにどうやって記憶

を移転するのか」

ヘムカの前世は中学一年生まで。そこまでの教育課程でやる理科などたかがしれている。知識の差からいって、ヘムカは何も反論できなかつた。

「そうは言われても、記憶があるのは事実だし……」

論破されてしまったものの、証拠はある。しかし、ヘムカの頭の中だけで他人に見せられるものではないため証拠としては不十分だ。

他に証拠はないかと考えてみるも、何も思い浮かばない。

「とりあえず、前世の記憶話してみてよ」

「わかつた」

それから、ヘムカは過去のことを話し始めた。死ぬ直前の話だ。

◇

「俺さ、将来漫画家になりたいんだ」

地方の政令指定都市にあるとある街。マンションや小さなビルに囲まれた一帯で、街を縦断する大通りには車の往来が絶えない。

そんな街を歩いていたのは二人の男子中学生。ふくよかな体型をしている少年と、もうひとりの小柄な少年である煌こう。

煌というのはヘムカの前世での名だつた。

「へー、いいじゃん。家でも描いてるの?」

漫画家という職業を聞いて、興奮した煌は彼が家でどんなものを描いているのだろうと気になり質問する。しかし、彼は首を横に振つた。

「描くのを許してもらえないんだ」

描くのを許してもらえない。煌にとっては、なぜそうなるのかわからなかつた。

「どうして?」

画材を買えないほどに貧しいのかと想像しつつも彼に質問する。「そんなもの描いてる時間があつたら、勉強しなさいって」

煌は驚いた。なぜなら、煌はそのような生活に縛られたことがなかつたからだ。夜に出歩くなのようなことは言われたが、理由を聞いて納得していた。しかし、彼に言われたはずの言葉の意味がわからな

かったのだ。なぜなら、彼は頭がいい。テストがあればほぼ100点であり、苦手な教科などない。極稀に98点を取る程度だ。

とはいえ、家のしきたりに口立ちするのも憚られた煌は特に何かを口出しするわけでもなく黙々と共通の帰り道を歩いた。

「じゃ、ハンパだ」

煌の家はもつと先なのだが、彼の家はちようど途中のこの場所にある。彼の家はマンションの一室で家族とともに暮らしている。車も、それほど大きなものではない。煌は、彼に別れを告げる。しかし、彼は家を向いたまま動こうとはしなかった。

「どうしたの？ 帰らないの？」

煌は彼を心配そうに見つめる。すると、彼は煌を振り返って口を開いた。

「帰りたくない。もつと喋りたい」

家に帰っても何をしてもない煌は快く首を縦に振った。それから、彼らはいろいろなことを喋った。来世はあるかないか、もし漫画の中だったらどんなポジションにいるのか。漫画を描くなら、どんなジャンルを描くのか。

二人の会話が小一時間ほど続いたときだった。

「ちよつと！ 何をしているの！」

彼の家から怒号が聞こえてきた。

何事かと思い二人がそちらを見る。顔を醜いほどに歪め怒り心頭に発していた女性がそこに立っていた。彼の家から出てきたことを察するに、彼の母親なのだろう。彼女はこちらへ速歩きで近づくと、彼の頬を叩いた。相当な力で叩いたらしく、彼はそのまま倒れてしまう。ランドセルのせいで二次被害は発生しなかったようだが、彼の頬には赤い跡ができている。

このままではまずい。煌がそう思うと、すぐに彼女の方を向いた。

「お、落ち着いてください」

煌の発言を聞いた彼女は、反省するどころかその醜い顔をさらに歪ませた。

「なんなのあなた!? もしかして、うちの子のクラスメイト? あな

たの親御さんは他人の家庭内に介入しろと仰っているの？ 信じられない！ もう二度とうちの子に近づかないで！」

激昂した彼女は、煌と、その親を散々侮辱した後何事もなかったかのように彼の胸ぐらを掴み引きずっていく。

とはいえ、そこまで言われて何もしない煌ではなかった。煌は意を両拳を握りしめると決して彼女の方へと向かった。

「ちよつと待ってください！」

煌が近づくと、彼女は苛立ったように振り返りそのまま煌を突き飛ばした。

「うざいんだよ！ ったく」

彼女は突き飛ばした小学生を何ら気にすることなく家へ戻った。しかし、突き飛ばされた煌はただでは済まなかった。女性とはいえ、全力で突き飛ばされればそれなりの威力になる。体格が良い中学一年生なら大丈夫だったろうが、比較的小柄であったということも相まって、突き飛ばされた煌はそのまま道路上へと吹き飛ばされた。

そして、道路上へ寝そべった煌が痛みを耐えながら目を開くと、目の前にはトラックが煌に向かって走っていた。

## 第26話 彼には追いつけない

「つてことなんだけど……。どうかした？」

ヘムカが前世における死の直前を語る。けれども、樹の様子がおかしい。何か信じられないことを聞いて呆然としているよう、そんな表情だ。

ヘムカは思わず首を傾げた。

樹はヘムカから目を逸らし、天井にある照明を仰ぎ見ながら額や目を隠すように手を置いた。何か信じられないことがあつて困惑しているようだ。

「いや、なんでもない。……ヘムカの言ったこと。信じるよ」

少し間を置くと樹は一転してヘムカの主張を全面的に認めた。

「え？ 信じてくれるの？」

ヘムカは驚いた。なぜ一転して認めるようになったのかはわからないが、あまり探りを入れることでもない。大人しく受け入れることにした。

「ああ、信じるよ。確認だが、ヘムカの前世の名前は煌だったんだよな？ そして、その友人の名前は？」

樹はヘムカに確認をする。

「そうだよ。網代煌。中学一年生だった。その友人だけど、あまり覚えていないんだ。八年も前だしね」

前世の記憶があると気づいた頃だったらまだ覚えていたかもしれないが、世界を生きていく上では不必要。思い出すこともあまりなく、すっかり忘れてしまっていた。ヘムカはあまり悲観しておらず一応は思い出そうとしてみるが徒労に終わる。対する樹は随分と悲観しているようで「そうか」と嘆いている。

「で、本題だけど」

「ああ」

樹は他のことを考えていたらしく、ヘムカが樹の思考対象を本題へと戻す。

「この方法はあるより使いたくない。目立つちやうから。でもね、私。

安心して一緒に暮らしたいから——ってどうしたの!？」

樹は啜り泣いていた。

一体どこに泣く要素があったというのか。ヘムカには理解できなかった。

「ああ、大丈夫だ。続けてくれ」

樹はヘムカに話を続けるように言っているが、樹は先程よりも涙を流していた。必死で袖で涙を拭い、目元は真っ赤である。とてもじゃないが話を続けることなんてできそうにない。

しばらく時間が経った後、ようやく樹は落ち着きを取り戻した。果然と虚空を見上げ、話し始めて大丈夫なのかとヘムカが思っていると、樹の視線がヘムカの方へと向く。

「続けて」

本人が言うのであれば仕方がないと思い、ヘムカは改めて説明を始めた。

「テレビでやってたんだけど、捕まった不審者はみんな拘置所にいるっていつてた。言葉が通じないから取り調べもできないんだって。そこで、私が通訳する。送り返すことを条件に」

話を聞いている最中の樹は、あまりヘムカの話に耳を傾けているのかと疑わしいほどに呆然としていた。しかし、ヘムカが拘置所という単語を口にした瞬間に樹の目の色が変わった。ヘムカの話をも血眼になって聞くために飛び起きるかのようにヘムカの方へと体を前のめりにした。そして、ヘムカの言ったことを一つ一つ咀嚼するように聞いている。ヘムカが言い終わると樹はゆっくりと前のめりにして、た体を背凭れへと信じられないとばかりに放心していた。

「……それって拘置所に向かうのか？」

肉は動物から取れるのかと同じような質問だ。ここまで普通のことをなぜ聞くのだろうかと思ひ、ヘムカは少し答えるのを躊躇った。

「拘置所にいるわけなんだし、そりゃそうでしょう……」

逮捕された人物が向かうのは留置場、拘置所、刑務所のいずれかだ。しかし、刑務所は裁判により刑期が確定したものが移送される場所であり、留置所は逮捕されて二十二日以内の被告人が収容される場所だ。

ある。

それに対して、拘置所は二十三日以上の被告人または死刑囚だ。意思疎通できず碌に取り調べが進んでいない被告人が唯一入れる場所であった。

もちろん、そんなこと樹には理解できているのだ。そして、樹はすぐに結論に達した。

「駄目だ」

「え？」

ヘムカは思わず聞き返してしまった。一体どこに問題点があるのかというのか。仮に問題点があったとしても、羽黒市民を救う方法はこれしかないのである。否が応でも認めさせなければと思っていたし、樹なら承諾してくれるとヘムカも思っていた。

「駄目なものは駄目だ。危ない」

ヘムカの意見を一蹴すると、樹は立ち上がって買い物に向かうための準備に着々と取り掛かる。

だが、ヘムカからすればそんな悠長なこととしていられない。すぐに樹の元へと駆け寄った。

「この方法に問題点あった？ どこなの？」

しつこく聞いても樹は頑なに耳を貸そうとはせずマイバッグと財布を確認する。

「このままだと、羽黒市民が危険に晒されるの。特に、私たち二人は特に！」

命が危ない。そんなことをヘムカは必死に訴える。しかし、なぜか樹は絶対に耳を貸さないのだ。マイバッグを肩にかけている。

「じゃ、買い物行ってくる」

何もなかったかのように、樹は立ち尽くすしかないヘムカに向かって行き先を告げるとそのまま外へと出てしまった。

「どうして……」

ヘムカにその場に座り込むと頭を抱え、沈痛な面持ちで涙ぐみ呟いた。

わからなかった。樹がどうしてあんなにも作戦に協力してくれな

いのかと。

## 第27話 明日は我が身

ヘムカは、徹夜したというのに全く眠くなかった。樹が己の立案した作戦を、ただ危ないの一点張りで拒否した。なぜ、理解してくれないのかと思えば思うほどに頭が冴えて眠くなくなるのだ。

樹のいない部屋でソファに座り呆然と過ごす他ない。なんとなくソファに置いてあったテレビのリモコンを手に取ると、テレビをつける。画面上部に映った時刻は五時半だった。

先程樹は買い物に行くと言ったが、こんな朝早くに空いているところなんてあまりない。樹は、買い物をする気など全くなくただヘムカからの要求をはねのけるために買い物という口実を使ったのだ。さすがのヘムカでもそんなことはわかりきっている。

画面上部から中央部に視線を移すと、ニュースキャスターがニュースを読んでいる。朝のニュース番組だ。当然だが、扱っている内容は案の定羽黒市内の悪いニュースばかりだ。

「次のニュースです。本日未明、羽黒市内にて槍を持った男がコンビニに侵入し食べ物を奪う強盗事件が発生しました」

テレビに映し出されたのはコンビニの防犯カメラの映像。

現代のあらゆる技術が濃縮されたコンビニに、現代では全く見なくなった槍を持った男が侵入する。槍を持った男は、コンビニに入ると次々と食料品を手に取ると立ち去っていく。

その異常さ故、被害にあったコンビニのオーナーや店員には悪いが滑稽とすら思えなかった。

「また、同時刻。羽黒市内の別の場所では槍を持った男に襲われ死亡する殺人事件も発生しました。警察は、事態を重く受け止めパトロールを強化するため機動隊の導入を決定いたしました」

テレビに映し出されていた場面が変わる。

規制線が張られ大量の警察官がいる民家が映されたと思ったら、テレビに映されている画面は安積県庁舎に変わった。

やがて、記者会見場の映像が映され一人の男性が登壇した。多くのシャッター音とフラッシュが焚かれ、映像にはフラッシュの点滅にご

注意くださいのテロップが入る。

男性が演台の前に立つと、『旗峰知事』というテロップが表示された。知事は何ら動揺することなく会見を始めた。

「羽黒市を中心とした大規模な不審者の出没および不審者による犯罪が相次いでいます。県としましては、安積県警察を動員しパトロールの強化。そのため、県警本部と調整して機動隊を派遣するつもりです」

多くのマスメディアのカメラに映され、フラッシュにも一切動じない本部長は、画面の前の市民に向けて懸命に訴えかけていた。

続いて、場面は総理官邸へと変わる。

「羽黒市内で起こっている事件について、総理も憂慮しており場合によっては治安出動も厭わないとしています」

総理の映像こそ映らなかったが、総理が懸念するほどに事態が深刻になってきているということだ。

実際機動隊はすでに派遣されているようであり、武装した機動隊の隊員が羽黒市内で警備活動を行う映像が紹介されていた。

ヘムカは、思わずテレビのチャンネルを変えた。まだこの時間は全ての局でニュース番組をやっているわけではない。しかし、今ニュース番組を放映しているどこのチャンネルに変えても同じ様なことを扱っていた。ニュース番組以外にもあるが、ヘムカにとつては何の面白みもなくテレビの電源を消した。

理由はなぜか。

簡単である。テレビを見ると、テレビに映っている出来事が全て自分のせいであると批判されているような気がしていたたまれなくなりおかしくなりそうなのだ。

テレビを消し、心の安定を図ろうとするもやけに外がうるさい。音に敏感なヘムカならなおさらのことである。

濡れ縁に出てみると、頭上にはなぜかヘリコプターが飛んでいた。警察ヘリであった。

警察ヘリの音がうるさくかき消されていたが、耳をすませば近くには大量のパトカーが停まっている。そして、パトカーから降りた警察

官は隣の渡辺の家にどんどん入っていった。

何が起こっているのか気になるが、万が一ヘリコプターが映像を撮影していた場合ヘムカの姿が映ることになる。この姿のまま外には出られない。フードをかぶろうとも、それはそれで怪しいのだ。ただでさえ羽黒市の警察は不審者に敏感になつてきている。ヘムカが様子を見る方法などなかったのだ。

「あ、そうだ……」

ヘムカが聞き取った雑踏の話し声の中には、警察のものではないマスメディアの声もあった。恐怖しながら再びテレビの電源をつけた。「速報です、本日羽黒市にて銃を持った男複数人が男性宅に侵入する事件がありました。この事件で、家の住人である渡辺さんが死亡しました。犯人は未だなお立てこもりを続けています」

映し出されたのはこの近くの映像だ。そして、画面には隣人である渡辺の顔写真が表示されていた。

「警察は説得を試みていますが、言語が通じていない可能性が高いとのことです」

現場にいるリポーターが状況を説明する中、後ろでは銃を持った男が外に出ていた。

拳銃を構え威嚇する警察官たち、しかし拳銃を銃だと認識していないのかあまり気圧された様子はない。それどころか、何かを喋っている。

さすがに遠すぎて何を言っているのかはわからない。

すぐに警察がなんとかしてくるだろうと思ひ、安堵した瞬間だった。

一人の銃を持った男が叫んだ。

「ヘムカはどこだー」

もちろん、その言葉は向こうの世界での言葉だった。当然だが日本人には何と言っているのかわからない。

しかし、ヘムカはその言葉を聞いてしまった。銃を持った男たちは、間違いなくライブの指揮下にある。

そして、渡辺の家まで侵入してきている。ヘムカが見つけれられるの

は、目前に迫っているのだと。

## 第28話 危機一髪

「まずい、まずい、まずい……」

ヘムカは、考えるよりも早く家を飛び出した。

目の前の道は、丁度朝日が差し込んでおり警察官やらマスメディアやら野次馬やらで多くの人が密集している。

この中に飛び込んでいけばフードを深くかぶろうとも、不審者に見えることは明白。けれども、現在は一刻を争う事態だ。

建物の影に隠れるように外に飛び出ると、そのまま例の歪がある場所へと向かった。

幸い、野次馬は全員隣の家には注目しておらずヘムカが注目されることはなかった。

前回とは違い、今回は歪の位置がわかっているため時間がかかることはなく数十分ほどで目的の場所に近づいていく。

しかし、近づけば近づくほどにヘムカは俯き足取りは重くなるばかり。

終いには、歪を目の前になると足が動かなくなった。

なんとか足を動かし歪の直ぐ側まですると、改めて修復魔法を放つ。しかし、今までに溜まった魔力は極僅か。そのような弱い魔法で修復できるわけもなく、ただ魔力を浪費しただけに終わる。

手を強く握りしめ、歪を見上げた。

この中に入りさえすれば、ライベの部下はヘムカを探さずにすむ。そうなればライベの部下たちがこちらの世界に入り込むこともないし、犯罪もなくなるはずだ。

いいことだらけだというのに、ヘムカは樹と過ごした時間を思い出してしまいどうしても帰ることができなかった。

不甲斐ない自分に情けなさを感じていると、遠くから足音が聞こえた。

熊かと思いい咄嗟に振り向くが、槍を持った兵士が不敵な笑みを浮かべながら足音を気にする様子もなくヘムカの方へと近づいてきていた。

「なるほどな……ここにいたのか」

コンビニで奪取したであろう、スティックパンを啜えながらへムカを見下すと槍を突きつけた。

「痛い思いしたくなきや大人しくしろ。わかるだろ？」

帰れば、何もかもが上手くいく。

わかっている。けれども、帰りたくなかった。

先程から強く握りしめられていた拳は、滴るほどに汗だくになり、息を呑む。

「自分の立場がわかっていないようだな」

兵士はへムカの直ぐ側までやってくる、槍の先の方を掴んで穂をへムカの瞳にあたる直前まで近づけた。へムカの目と穂の間は五センチもないだろう。油断すれば一瞬で貫かれる距離だ。

そんな状況下で悠長に瞬きなどできやしない。

「……やだ」

それは、小さな呟きだった。目の前にいる兵士が聞き取れないほどに。

「なんだって？」

兵士の表情には、威圧感があった。兵士も戦闘を極力避けたいのだろう。

しかし、あのライベが待っている世界には帰りたくない。

何度考えても、ライベの元へ帰ることをへムカの体は拒否する。だからといって、樹の迷惑になる以上樹の元へも帰れない。

だからこそ、へムカが取った行動は一つだった。

目をしっかりと見開いて兵士にも怖気づききっぱりと告げる。

「絶対に帰らない。あいつのもとに帰るくらいだったら、死んでやる」その言葉に嘘偽りはなかった。

槍を掴むと、そのまま首元へと近づける。しかしへムカの弱い力では、兵士によって握られている槍を動かすことはできなかった。

兵士としても、殺すのは避けたい。ライベは、殺さずに連れてくるように指示したのだ。

とはいえ、ライベは治癒魔法を使える。多少傷を負おうが、四肢を

切り落とされようが動けなくなった時点でゲームオーバーだ。

兵士は、槍で四肢を切断し動けないところを連れて帰ろうと企み、へムカの方へと襲いかかる。

幸い、森林の根が多く地面は凸凹。空振りした槍が木に刺さり中々抜けないらしく、兵士は予想以上にへムカに苦戦を強いられていた。

「クソがつー！」

効率が悪いと考えたのだろう。

兵士は、脚を狙う作戦から体のどこでもいいから当てるといいう方針に切り替える。万が一喉や胸に刺されれば、ライブまで連れて行く最中に死亡する可能性があるが気にしていられないのだろう。

へムカとしても、運良く喉や胸に刺されればいいのだが腕や脚に当たる可能性に比べたら低い。避け続けるしかなかった。

まだ体力的に幼いへムカは、長時間避け続けたことによりさすがに体力が疲弊し息を切らし始める。幼い頃から外で遊んでいたため、年代の現代日本人よりはよほど体力はある。けれども、相手は訓練を受けた大人。多少息が上がっているものの、あまり疲弊していないようにしている兵士は、へムカに槍を突き刺す。咄嗟に避けるも、体のバランスを崩したへムカはそのまま森の斜面を転がり道路まで飛び出してしまう。

しかも、道路まで転がったときに斜面にある石や木の根、そして到達地点の地面のアスファルトといった硬いものに体をぶつけ続けたためあらゆるところが血まみれの状態になっていた。

「いったつー！」

立ち上がるにも、全身を打ったためか碌に痛みで体が動かない。無理して体を動かさそうとしている間にも、兵士はやってくる。

「観念しろ！」

兵士は槍の柄の部分握りしめると、動けないへムカを気絶させるように後頭部を殴打しようとして構える。

しかし、その時耳障りな音が聞こえた。

車のクラクションであった。

音の方へと視線を向けると、法定速度を遵守しているのか不安にな

る速度でヘムカたちへと走ってくる一台の自動車があった。

兵士が車に目を釘付けになっている間、どうにかヘムカは道路脇へと逸れる。そして、兵士はその車の衝撃をもろにうけて吹き飛ばされた。

車が直撃すればただではすまないだろう。安心している中、自動車の扉が開く。

「ヘムカ……」

自動車の中から出てきたのは樹だ。

「何しにここに来た？」

樹は、表情に滲み出る程に憤慨していた。

「……迷惑がかからないように、帰ろうとした」

ヘムカは樹と面と向かう覚悟ができず顔を逸らす。そんな態度に痺れを切らし、ヘムカの頬を叩いた。当然手加減などしていないため、直後に頬全体に痺れるような痛みが広がっていく。

「おまえは、それでいいのかよ。ずっと言いなりになって、好きなように弄ばれて、一生奴隷として生きていくんだぞ！」

樹は涙をまたもや流し、まるで自分が経験したことあるかのようにヘムカを説得する。

ヘムカに反論はなかった。

「僕さ……」

樹の言うことは尤もだ。だが、もっと不幸なことになる。そう言うおとした時樹が口を開いた。

「運転免許、持ってないんだよ」

「え？」

思わず気の抜けた声を出してしまうヘムカ。しかし、樹は続けた。

「まあ、こんなことは序の口だよ。なんでヘムカの考えた作戦、反対なのか教えてあげるよ。僕ね、人を殺したんだ」

ヘムカは、信じられなかった。反応する猶予すら与えられず、樹は黙々と自身の過去を語り始めた。

## 第29話 ある歯車が欠けて

「樹、将来の夢はあるのかい？」

佐藤樹がまだ幼い子どもだったあるとき、父親から言われた言葉だ。

樹はまだ小学校に上がったばかりで夢や目標はあってもそこにたどり着くまでに必要な努力など微塵も知らない。けれども、夢や目標を言うだけであれば誰にだってできる。かくいう樹もそうだった。

「僕、大きくなったら漫画家になるんだ！」

漫画家になるのに必要な技術や知識は何も知らない樹はそう父親に熱く語って見せた。

それを聞いた父親は大層驚き、感心した。

「漫画家か。それはいい。もう描いているのか？」

樹のことを全肯定した父親は樹が描こうと思っている漫画がどんなものか、興味を唆らずにはいられなかった。

「いいや、まだ。絵があまり上手くないんだ」

そう何の屈託のない顔で樹は豪語した。

自分はまだ子ども、絵なんてそのうち上達する。

そんな現実を知らず樂觀視をしている子どもだからできた行動だろう。

「誰しも、みんな最初は上手くないさ。少しずつ練習を重ねてって上手くなっていけばいい。それに樹はまだ子どもだ。将来の目標が決まっているというだけでも偉い。誇っていいぞ」

父親は樹を教師のような口調で、尤もらしいことを述べる。そんな簡単に努力が実らないことくらい、父親とてわかっている。けれども、夢をそう安々と諦めてほしくなかった。

「うん」

佐藤の父親には、学がなかった。高校に進学せず、中学校を卒業するとすぐに地元企業に就職した。

母親は高校は卒業していたものの、大学にはいかず地元企業に就

職。そして、職場において彼と恋に落ちた。

「頭の良さなど関係ない。愛があれば不要だ」

そんなテレビか本の中でしか見たことがないような文言を両親の前で平然と言つてのけ、二人は結婚し樹という子どもを授かった。

余裕があるとはまでは行かなかったが、慎ましい生活をしていれば何ら経済的に問題はなく三人は幸せな生活を送っていた。

しかし、状況は一変した。アメリカの大手投資銀行が破綻したことを発端にした世界規模の不況が発生した。当初は日本への影響はあまりなかったが、影響が取引相手などに伝播。そして、父親の会社を襲ったのだ。

父親の務めていた地元企業は最初は樂觀視していたが、得意先が影響を受け売掛金が回収できず次第に堪えられなくなり倒産した。大勢の社員が路頭に迷うこととなり、父親は失業保険で食いつなぎながら就職活動に勤しんだ。

けれども、学もなく資格もなく技術もない。

どこの会社も採用どころか、リストラに積極的であり父親など書類審査すら通らないこともしばしば。やつとのことと書類審査に受かり、面接のために会社へ行つても採用して何のメリットもない父親に対し会社は渋い顔をするほかなかった。

それでも、父親は樹のことを大切に考えていた。数少ないお金から息子の将来の職業の力になれるならと安くはない画材を大量に買ってあげた。

その後、父親が就職活動を開始して数ヶ月。ようやく無事に派遣社員として建設会社で働けることが決まった。父親にとつては未知の領域で慣れないことも多く年下の上司から叱られることもしばしば。けれども、家に帰つたら笑顔を保ち続け、樹に対しては描いた漫画を真剣に読み父親なりのアドバイスをしてあげた。

「ねえ、お父さん」

父親が樹の描いた漫画を真剣に読んでいると、樹から不安そうな声がかかった。

「どうした。樹」

「僕ね、小学生の漫画コンクールに応募しようと思ってるんだ」

「それはいいな」

受かるかどうかではない。挑戦することが大事だと思ってる。父親は、樹の発言に肯定した。

しかし、樹の声は震えている。樹は手を握りしめていた。

「でもね、不安なんだ。みんな絵が上手そうだし」

悩みを聞いた父親は、うんうんと頷き樹に語った。

「そうだな、落ちることもあるかもしれん。でも、樹の代わりに上位入賞を果たした子たちを見返すような漫画を描けばいいだけじゃないか。そうだろう？ 樹」

見返せる漫画を描くことなど、並大抵のことではないが当時の樹は、それができる気がしてならなかった。

「うん」

無事に送ったものの、入賞とはならなかった。けれども、樹は落ち込むことなく漫画を書き続けていた。

そんな中、工事現場で事故が発生した。父親は重機の下敷きにあつたのだという。幸い、命は助かったものの意識は戻らなかった。派遣先の企業は責任を認め父親の医療費に関しては全額を負担するとはいったものの、本来あるべきだった収入まではもらえない。保険も入っていないかったため、手元に残ったのは僅かな労災保険と慰謝料のみだ。

さらに家庭は苦しくなるも、樹はそんなことわからなかった。まだ小学生であつたし、何より父親は樹に気を使わせないようにと必死に隠してきたのだ。そのため、暇があればひたすら漫画を書く日々。

母親は苛立っていた。ただでさえお金がないというのに、息子は金にならない漫画を延々と描いている。心のゆとりはとうに潰えてしまったのだ。

この苦しい生活を脱したいという思いからだろう、母親は樹に勉強の重要性を教えるようになっていた。

「私は樹に勉強を頑張ってほしいのよ。漫画なんて大人になってから

いくらでも描けるわ」

勉強したほうが漫画のネタとしても使える。いろんなことを吹聴した結果、樹は勉強に意欲的になってくれた。幸いにも、樹の成績は決して悪くはない。

「わかった！ 僕、いっぱい勉強するよ」

しかし、二人の考えていたことはまるで違ったのだ。

母親が考えていたのは、名門大学に進学し立派な企業に勤めてほしいということ。

一方で、樹が考えていたのは、芸術大学に進学し立派な漫画家として活躍することなのだ。

### 第30話 ブレーキはなくなった

母親が勉強を強制するようになったとはいえ、家族の関係は大きくは変わらなかった。

樹は必死に勉強し、当然成績は上がった。褒めてもらおうと母親に見せたこともあった。

「学年一位？　そう、ならその調子で頑張りなさい。私だってあなたの塾の費用を稼いでいるのよ。くれぐれも成績を落とさないようにね」

褒める気などまるで感じられなくなってしまい、今までに見てきた優しい母親はもうそこにはいなかった。

当初は勉強しろと小言がうるさい程度だった。

だが、意識不明のまま父親は亡くなった。

死亡保険など入っていないなかったため、貰えたのは派遣先の企業の弔慰金。けれども、葬式代と墓代ですっかり消え失せてしまった。

「何で私がこんな目ばかり……」

母親はこれを受けてさらに壊れてしまったのだろう。密かに樹が母親の様子を見に向かうと、母親が口にしていた言葉だ。

「私は何も悪くないもの。そうよ、全部あの男が悪いんだわ。それに、あの派遣先も、派遣企業も市も県も国も悪い」

その後は、常に頭を抱えながら怒声で人、物、政府、拳句の果てには自然現象までに文句を垂れ続けるようにもなった。

樹の教育費でお金がなくなりそうになると母親も仕事を掛け持ちするようになり、金を捻出。しかし、職場からはあまり快く思われなかったのか頻繁に職を変えた。

朝早くから夜遅く。一日も休める日がなく来る日も来る日も勉強漬けだった。次第に、母親の樹への風当たりはどんどん強くなっていき家で漫画は完全に描けなくなってしまった。

だからこそ、学校の休み時間や放課後が唯一趣味に没頭できる時間だったのだ。

「ねえ、何してんの？」

放課後、樹は勉強のために居残りをする。というのは建前であり、その間に樹は漫画を描こうと模索したのだ。

机の上に教科書や参考書と一緒に置いてある漫画用紙。樹は鉛筆を握ったままあれこれと耽つているなり後ろから声が聞こえた。

煌だった。

樹と煌は小学生からの付き合いだった。中学校に進学しても、同じクラスであったため交友関係は続いている。

樹は煌の声が聞こえるとすぐに漫画用紙を机の中へとしまった。恥ずかしいと思つたのだ、それには家では描けないのだから言わないほうがいいとも思っていた。

けれども、樹は言いたいという衝動に駆られる。家では漫画に対する風当たりは厳しく、碌に自由がない。せめて学校だけでも自分は大好きな漫画に囲まれていると実感したかった。

「ん？ どうしたの？」

煌はすぐに樹の机を覗き込むが、そこには興味をそそられる様なものは何もない。ただ、見るだけで憂鬱になる教科書と参考書が置いてあるだけだ。

「なんでもないよ。ところで今日一緒に帰らない？ いろいろ話したいし。ああそうそう、今週週刊ウィークリーに載ってる初連載の漫画見た？ 主人公が異世界に転生するっていう——」

週刊ウィークリー。煌のみならず樹も大好きな漫画雑誌だ。けれども、当分樹は読んでいなかった。

笑顔で感想を語る煌に、樹はただ相槌を打つことしかできない。そんなよくわからない表情で相槌を打たれた煌は困惑した。

「もしかしてまだ買ってないの？ なら読む？ 家にあるよ」  
魅惑的な提案だった。

本来であれば、この時間は勉強の時間。しかし、抑圧され続けた樹の漫画への欲望は抑えられなかった。

「うん、そうするよ」

今日だけ。そう、今日だけ。

罪悪感から逃れるために呪文のように延々と心の中で呟きながら

煌の家へと向かった。

「でね、とにかくその異世界漫画がつまんないんだよ。高校生が異世界に転生するんだけど、魔法で拳銃とか自動車造り出すんだよね。製造業舐めてるのかな？」

煌は笑顔で新連載の漫画を辛辣な口調で語る。ネタバレではあるのだが、怒る気にはなれない。ネタバレであつたとしても、漫画に飢えていた煌にとっては幸せだったのだ。

「でね、特に何もしてないのに女の子がどんどん主人公のもとに言い寄ってね、全く共感しないんだよ。——あ、そろそろ着くよ」

煌の家は、異常な生活を送る樹から見て普通の家だった。決してお金持ちというわけではない。マンションの一室にあり、家自体は樹の家よりも狭く感じられた。

部屋の中へとお邪魔すると、そこにあつたのは本棚一面を閉める漫画雑誌。全部読み尽くしたいが時間が足りない。遅くなれば母親に違和感を抱かれ学校終了後すぐに帰ってくるように言われかねない。

樹が選んだのは一冊だけ。週刊ウィークリーだ。長年見てなかった長期連載の登場人物たち。そして、初めて見る漫画たち。巻頭カラーはなく、連載している漫画は全部モノクロだ。しかし、どれも樹の目には色鮮やかに見えた。

「え？　なんで泣いてるの!？」

気がつけば、樹は涙を流していた。嗚咽もせず、ただ漫画の世界に浸っていただけ。自分では気が付かなかった。いつしか、激しく咽び泣いてしまう。

煌はすっかりパニックになり親に連絡しようかとも提案される。しかし、それだけだと咽び泣く中全力で拒否し続けた。

そして碌に漫画も読めない中、帰った方がいいと言われ大人しく同意する。他人に迷惑はかけられない。

万が一のことを考え、煌が送ってくれることとなった。

漫画を読めないのは残念だったが、まだ煌が連れてってくれる。そう思っていた。

けれども煌はその直後、トラックに轢かれて死亡した。

### 第31話 丸見え

「つまり、煌くんは縁石に躓いてしまい、運悪くトラックが突っ込んできたんですね」

樹の家の前では、大量の警察官が右往左往し、規制線が張られていた。

そんな中、一人の警察官は母親に事件当時の状況を聞いていた。

「はい、そうなんです。私も必死で助けようとはしたんですけどね……」

涙ぐみながら事件の凄惨さを語るのは、樹の母親だった。

目の前で子どもを一人失わせてしまったという強い罪悪感からか、二度と子どもを失わせないとばかりに樹の腕を強く握っていた。

実際のところ、腕を強く握りしめているのは樹が何か変なことを言いそうになったら振り強引に賛同させようとしているのである。

そんなことを知らぬ警察官は、ただまるで自身の子どもを失ったかのように心を痛めている母親を気の毒に思っていた。

「犯人は、酒気帯び運転で居眠り運転をしていたようなんです」

「え？ ああ、そうなんです。道理で……」

正直なところ、母親は自分の犯した罪が暴かれるのではないかと恐怖していた。しかし、幸いにもトラックの運転手が酒気帯び運転と居眠り運転を行っていた。責任は全てトラックの運転手に擦り付ければあらゆる問題が解決する。その事実により、母親は大きく安堵した。

だが、樹からすれば安堵どころの話ではない。貴重な友だちを失ったのだ。しかも、自分自身の母親が原因で。

とてもじゃないが、良心の呵責に耐えられるものではなかった。けれども、悲しむ暇すら母親は与えてくれはしない。事情聴取が終わると、樹は自身の部屋に閉じ込められた。

漫画や漫画用紙が積み重なっていたあのときの面影などどこにもない。あるのは教科書、ノート、参考書、辞書。そして多数の監視カメラのみ。

「ちよつとでかけてくるから勉強してなさい?」

母親はそう告げて家を出てるも、こんな状況で勉強に集中できるほど樹にサイコパスの自覚はない。

ノートを開き、ペンを持つも何も考えておらずノートは白紙のままである。そして、しばらくの後母親は帰ってきた。

「あなたがもつと勉強を頑張れるようにしておいたわ」

帰宅早々に告げられたその文言を聞き、樹は妙な胸騒ぎがした。一体何をやらかしたのかと。けれども、聞いたところでそんなことより勉強しなさいと言われるのは目に見えている。ただ領き、勉強するしかなかった。

翌日、樹は大人しく学校へと向かう。しかし、どうも様子がおかしくなかった。

同級生が不慮の交通事故でなくなったのだから、ある程度他の同級生の様子がおかしいのはありえないことではない。

しかし、皆挙つて樹を避けているのだ。教師陣ですら、最低限の会話しかしようとしめない。孤独を感じながらも、樹は一心不乱に勉強を続ける。漫画なんて、もう描く気が起きなかったのだ。

学校が終わり下校時刻になるとあるクラスメイトの会話が聞こえてきた。

「なあ、聞いたか? 樹の母親やばいらしいな」

樹は悲しくなった。別に母親を悪く言われたことが悲しいのではない。とうに信頼度がどん底の母親に対して、感じる憐憫の情など一欠片もありはしない。

しかし、そこまで言わせるとは一体母親は何をしたのか。

気になった樹は会話をしているクラスメイトの死角に入り会話を盗み聞きする。

「ああ、聞いたよ。煌の家に怒鳴り込んだらしいじゃん」

……は?」

樹は、信じられなかった。ただ、頭の中が真っ白になったような、そんな衝撃を味わう。

「うちの息子は医学部に向けて勉強してるんだから誑かすなって。事

故にあったのは自業自得だと」

「改めて聞くとひどいよな。よりもよって葬儀の準備中だろ？ 煌の母親ヒステリー起こしたって」

「まあ、それはしようがないよ……」

次々と明かされていく自分の母親の悪行。母親が嫌になるのはもちろんだが、自分がそんな母親の子であり、顔色を窺っているということも嫌でも再認識させられる。

気がつけば、涙がこぼれ落ちていた。

泣くのはいつぶりだろうか。勉強を強いられて以降泣くことはなかった。ただただ勉強するだけの毎日。すっかり操り人形と化した樹は泣く必要がなかったのだ。

「……逃げたい」

このままいけば、人間としての尊厳が奪われる。そう考えるなり、決意した。逃げようと。

そして、早速樹は家出をすることにした。すっかり避けられている樹に伝手なんてなく、ただ電車に乗って数駅。学校と塾と家を往復する生活をしてきた樹にとっては、たとえ数駅であってもまるで異国に来たようなそんな情緒を感じられた。

全てが新鮮に見えた。けれども、金はない。小遣いなんて渡されたことないのだ。塾の費用は引き下ろしなので、渡されるのは交通費と食事代。しかも、電子マネーで渡されるため他の用途に使うのは難しい。

ただ、なすがままに夜を迎え近くの河川敷で月光を眺める。月光を眺めたことなど、いつ以来だろうか、全てが心地よかった。

「その君！ 佐藤樹くんかい？ 親御さんから連絡があつてね、勝手に家出したそうじゃないか」

最終的に警察官が来るのは考慮していたが、想定していたよりもずっと早く、あまりにも早すぎた。

「ち、ちが……」

心の準備すら終わっていない樹は頭ごなしに否定しようとした。しかし、警察官たちは家出中の少年だと確信しているようだ。

「まあ、親と意見が合わないことくらいあるだろうさ。でも、きちんと対話で話し合う習慣をつけないと」

警察官は、対話の重要性を説いているがそんなこと関係ない。あの母親には、対話なんて通じないのだから。

「さあ、パトカーに乗って。所で親御さんが待っているよ」

このパトカーに乗れば、またあの地獄の日々の始まりだ。

「やだ……」

樹は泣きじやくりながらパトカーから遠ざかる。けれども、過換気症候群のためか碌に呼吸ができずその場に蹲る。警察官に必死に抵抗し、子どものようにごねる。

他人から見れば子どもっぽくともじゃないが他の人には見せられないが、プライドなんてどうでもよかった。

自分の母親が友人の家に乗り込んで自業自得と言い放った時から、樹の中にプライドだの誇りだのという余計なものは全てなくなり空っぽだ。今さら失うものなんて何もなく、母親から逃げられるのであれどんなことでもできるとすら思っていた。

「落ち着いてー!」

警察官二人と、非力で過呼吸気味の少年。逃げ切れるわけがなかった。

署での対応も、事にあたった警察官は母親のでっち上げた嘘に対して唯々諾々。恐ろしいまでに身なりの整った母親に連れられて家に連れられた樹の処遇はそれはもうひどかった。

ありとあらゆるところを棒で叩かれ、食事は抜かれ、心無い言葉を散々投げかけられて。

目がうつろになった樹に母親は声をかけた。

「来週の模試、頑張りなさいよ?」

そう言つて、自分の部屋へと戻っていった。

後から知ったが、樹が使っている電子マネーは利用額や内容が瞬時に親に伝達される仕組みであった。

### 第32話　ぐつぐつ

皮肉にも、勉強の無理強いにより成績の上がった樹は無事に地域最難関の進学校へと合格を果たした。

しかし、同級生の多くは最初から地頭のよい者ばかりだった。遊び呆けているにも関わらず、樹以上の成績を叩き出すものもいる。

そんな者たちがいる中で、樹は劣等感を感じていた。進学校に入れば樹と同じ様な境遇の者もいるだろうと踏んでいたが、その実態は全く異なった。

好きな漫画、ゲーム、アニメ、アイドル。多くのクラスメイトは、それらを熱く語っていた。

話を振られても全く理解できない樹は、当然友人を作ることさえ叶わずすぐに校内でも孤立する。いじめられはしなかったが、樹の劣等感は一日に日に強くなっていき勉強しようにも勉強に身が入らなくなっていた。

「ちよつと樹！　学年66位!?　ふざけてるのですか!?!」

学期の終了日、戦々恐々としながら樹は成績表を母親に渡すが、返ってきたのは案の定罵倒の言葉だった。

「いい？　あなたは国公立の医学部に受かるの！　決定事項なの！　何のためにあなたを予備校に行かせたと思ってるわけ？　私だつて、贅沢したかったわよ。それでも、あなたのために身を粉にして働いてそのお金をあなたの未来のために使っているのよ？　どうしてこれがわからないのかしら!?!」

一度母親の罵倒が始まれば、延々と続く。

意味のない言葉を延々と述べられ、途中からはまたすでに言った内容について何度も何度も繰り返すように喋るのだ。

樹のメンタルはもう崩壊寸前だった。

勉強を強いているといっても、肝心の母親は何も勉強の苦勞を知らない。ただ成績表を見れば激昂し、医学部のある大学のパンフレットを見れば気分がよくなる。そんな人間だ。

そして、高校三年の頃には、樹はすっかり母親を恐怖するように

なっていた。

「ただいま……」

樹が学校から帰ってくると、母親は電話をしているようだった。「え？ 病気なの？ 大丈夫？ あ、うん。樹？ 部活も勉強も意欲的に頑張ってくれてるわ。なんでも、医学部に進みたいんですって。私全力でサポートしてるわ」

誰かと話しているようだったが、その話している内容がひどく気に入らなかった。

部活なんて入らせないと母親は宣言していたし、一度たりとも医学部に進みたいと思っただけではない。嘘まみれである。

母親の行動にもはや驚きもせず、ただ呆れ返るのみだ。

「ちよつと!?! 何そこに突っ立つてるの！ さつさと勉強なさい！」  
いつの間にか母親の電話は終わったようで、樹を目視するなり怒鳴ってくる。

「電話誰から?」

基本的に母親は何事にも威圧的だった。それが、普通の口調になるなど、誰なのかと興味を持ったのだ。

「おばあちゃんよ。たまには孫の顔見せろってうるさいのよ。まあ、医学部に受かったら一回くらいなら見せに行ってもいいでしょう。わかつたらさつさと行きなさい」

樹の祖母。まだ父親が元気だったころよく遊びに行っていたのを樹は思い出す。

家は安積県の山中にあり、祖父は樹の生まれる前に亡くなっていた。

温厚な性格で、先程の話から察するに自分は親孝行のために医学部を進学した自慢の孫ということになっているのだろう。

当分会えていない祖母に思いを馳せつつ部屋へと向かった。

「やて……」

開いたのは、数学Ⅲの参考書。模試もあるので頑張らなければならぬが、集中力が持たない。今日だけではない、近頃はいつもそうだった。おかげで、成績はだだ下がり。けれども、樹はただ只管に勉

強することしかできなかつた。

結局、やる気のなさが改善されることはなく模試を迎えた。結果は、もちろん散々だった。

学校で模試の結果表を貰い、家に帰ると玄関で母親は待っていた。

「お帰り、模試の結果どうだったの？ 当然A判定よね？」

これだから模試は嫌いだった。

見せるのが嫌で捨てたこともあったが、模試の結果が知りたいと学校に怒鳴り込み、保管してあるデータを渋々学校側は保護者なのだからと渡してしまったのだ。

学校に迷惑はかけたくないので、それからはおとなしく結果表を持って帰ることになった。

樹は恐る恐る鞆から模試の結果を取り出すと、奪うように母親は雑に取る。

「私は優しいから別に旧帝じゃなくてもよしにして上げるわ。えーつと？ 上川医科大学、名草県立医科大学、西原大学医学部……」

今読み上げられている大学は、国公立大学にしてはどれも偏差値が優しいものだった。しかし、その大学名を次々に告げている母親は次第に模試結果表を握る力が強くなっていき終いにはしわくちやになつていた。

「何？ これ」

母親は模試の結果を樹に投げつけて詰問する。樹は答えようがなく黙るほかない。

「ふざけんじやないわよー！」

母親は樹の顔面を殴り飛ばした。玄関に鼻血が散るが、そんなこと一切気にしていなかった。

「私、言ったわよね!? 医学部に合格しなさいって！ しかも私は別に旧帝じゃなくても許してあげるって言っているの！ それはあなたの脳みそじゃ厳しいかなくなって思った私の優しさなのよ！ これでもできないって、本当さ……」

「あ、あの……その」

「ごめんなさい。」

反射的にそんな言葉が浮かぶ。しかし、本来の意味とは遠くかけ離れ『殴らないでください』の意味に等しかった。

「ああ!?! はつきり喋りなさい!」

「そ、その。浪人、させてくだ……さい」

浪人したいなど、樹は一ミリたりとて思ったことはない。しかし、言わねばならないのだ。母親の機嫌を取るには。

「あーもう、こんなダメ息子産まなきゃよかった……」

母親は髪の毛を散々掻き毟った後、わざとらしい大きなため息をついた。

「掛かった費用、全額私に後で払いなさいよ? ならいいわ」

全くもって愛情が感じられなかった。

その頃には、敬意や愛情といったものは樹の中からとうに消え失せ殺意しか湧いてこなかった。

### 第33話　かくして、彼は壊れてしまった

樹は浪人した。それも二回も。

掛かった費用を全額負担するということでもかろうじて母親の怒りを抑えているが、これ以上を待たせたらいつ怒りが爆発するかかわからない。

そのため、来たる試験に向けて勉強中だった。しかし、成績は一向に伸びないどころか下がってきてすらいる。そのたびに散々罵倒され、殴られ、食事を抜かれている。

高校を卒業してからは、ただ家で勉強し既卒生専用の予備校で勉強し、家に帰り勉強するというルーティーンを延々と繰り返していた。

さすがに予備校からおかしいと思われたらしく、保護者である母親に電話がかかってきたようだがやんちゃして怪我したのだと吹聴されすつかり予備校は樹の怪我を何とも思わなくなっていた。

会話は予備校と家での簡素な会話しかなく、現代文の勉強に必要な語彙を除けば非常に貧しい語彙力になってしまっている。

「わかんない、わかんない……」

樹は国公立大学向けの共通入学試験の問題集を開いていた。内容は教科書レベルであり、ましてや医学部を目指す樹にとってみればあまり難しいものではないはずだ。しかし、樹は目を虚ろにさせたまま頭を抱えて呪詛のように呟いている。

しかし、わからないものはわからない。苦しんでいると、樹の部屋へと足音が近づいてきた。

「ちよつとうるさいんだけど!」

勢いよくドアを開ける音の方がよっぽどうるさいのだが、そんなことは気にせず母親は樹の顔を引つ叩くと問題集を覗き見る。

「全然進んでないじゃない!?　三浪する気なの!?　あんたがさつさと医学部に受からないから、おばあちゃんも亡くなっちゃったのよ?」

さつさと受かったら最期に孫の顔くらい見せてあげたのに!」

いつものように母親は樹を罵倒する。

「(バ、バ)めんなや……」

樹は何一つとして悪くないのにも関わらず、謝る。謝らなければならぬ罵倒と暴行の追い打ちを受けるのだ。

「つたく。さつさと夕食食べなさい」

樹がダイニングへと向かうと、テーブルには大量の青魚料理。

「あなたの頭が良くなるようにわざわざ青魚を毎日調理しているのよ？ DHAを多く含むから頭が良くなるらしいけど、あなたには全く効いてないみたいね」

食事のときさえ母親は罵倒は忘れない。もう、習慣づいてしまっているのだ。

「いただきます……」

樹は小さな声で呟くと、食事を開始する。しかし、母親にその気はないようだ。

「三浪とか絶対許さないからね。絶対に国公立医学部受かりなさいよ？」

「はい」

「そういえばお隣の息子さん、旧帝医学部に受かったんですって。すごいよね、うちのポンコツと違って」

母親は全く悪意がないのか平然と隣の家の話をしてくる。

「うん……」

「私も再入学しようかしら？ おばあちゃんの遺産も入って車も買っちゃったし、仕事もやめたし。一応言っておくけど、私高校時代は頭良かったのよ。数学で満点取ったことあるし、ちよつと勉強すれば旧帝医学部なんて余裕ね」

この人に受験の苦労の何がわかるんだと、樹は内心苛立っていた。「私の遺伝子受け継いでるのにどうしてこんなものになっちゃったんだろうね、ああ。夫か。まあ、しょうがないか、あの人頭良くないし」

さも楽しい食事中の会話のような雰囲気で喋る母親。けれども、樹はもう我慢の限界だった。精神的にも、侮辱され、暴行を受けて軟禁同然の扱いを受けて。

樹は勢いよく立ち上がった。

「ん？ 何？ 反省して食事も忘れて勉強する気になったの？ だっ

た別にいいけど」

台所まで行くとシンクにある包丁を取り出した。魚を切った時に使っておりまだ洗っていないためどこか粘っている。

「ちよつと何してるの？ 早く包丁降ろしなさい！」

すぐに母親は静止するが、そんなこと樹の耳には入っていない。自制するための良心など、すっかり壊れてしまったのだ。

「うっせえよ……」

何の躊躇いもなく、樹は母親に襲いかかるも椅子から転げ落ちた母親は間一髪のところを免れる。

「ちよ、ちよつと落ち着きなさい。わかった、三浪してもいいからさ、ね？」

ここまで来ても母親は考えを改めない。きつと、もうとつくの昔に壊れてしまっているのだ。

だったらもう、生かす意味なんてどこにもない。

樹の中をそんな感情が支配した。

腰を抜かし必死に這い蹲っている母親に対し、樹は左胸へと包丁を突き立てた。左胸からは夥しい量の出血を起こすも、こんなことでは樹の気は治まらない。

何度も、何度も、何度も。

左胸だけではない。体のあちこちを突き刺した。

樹が気がついたときには、母親は全身刺し傷だらけであり、ほんの少し動いた後にやがて動きが止まった。

樹は、ようやく自分の犯したことを冷静になって考えられた。

目の前にあるのは胸を刺されている実母の死体。手に持っているのは、血まみれの包丁。

そう、自分がやったのだ。そう思うと樹は恐怖を感じたものの、それ以上の高揚感に襲われた。

「やった、やったぞ。僕は自由だ！」

次第に笑いが抑えられなくなり、ついには大きく口を開け哄笑する。

樹は、壊れてしまったのだ。

けれども、そんな高揚感と未来への希望に駆られた時間は長くは続かなかつた。

やがて、自分が犯罪を犯した。それも殺人罪という大罪であることを徐々に脳が理解し始めていた。

「やばい……どうしよう」

高揚していた気分が一気に消沈する。

「逃げないと」

そう思うと、すぐに樹は母親の鞆から財布と車の鍵を取り出した。また、ビニールシートで母親を包み込むと、車に載せるために外へと出る。

幸いにも、外は雨で夜。外出している人はかなり少なく見えた。急いで車のトランクに死体を詰め込み運転席へと座る。今年で21になる樹だったが、自動車教習所に行く時間など行く余裕などなかった。

碌に運転方法すらわからず、ただアクセルとブレーキがあるという曖昧な概念でしか理解していなかった。

「どこに逃げよう……」

逃げる先などなかった。ただ、頭を抱えて樹は考え込むと一つの可能性を見つける。

「羽黒市、あそこなら」

樹の祖母が住んでいた家がある。幸いにも、住宅自体はそのまま放置しているらしい。

目的地を決めると、樹は一切躊躇わなかった。アクセルとブレーキを間違えつつも、樹は車を運転し羽黒まで向かうことにした。

万が一のことを考え、すぐに農村部へと向かいそこから人通りの滅多にない山間の道を進む。他人の目に映らないようにするためだ。

### 第34話 邪魔するものは何もない

「これで終わり。後は羽黒市近くの適当な森に遺体を捨てようとしたんだ。そこで君と出会ったんだ」

気がつけば、雨はひどくなっていた。少し遠くの木々さえ霞むほどの豪雨。大量の雨粒が車を叩きつけており、車が心做しか揺れているようにも感じられる。

そんな中で、へムカは次々と聞かせられる樹の過去に言葉にもならない思いを抱いていた。

自分が殺された事件が、冤罪になってしまったこと。

樹の正体が、前世の親友だったこと。最初に名前を聞いた時にどこか聞き覚えのある名前だと思っていた。だが、すっかり窺れている樹は臍げに思い浮かぶ前世の姿に似ても似つかなかった。そのため、疑う余地もなくいい人だな程度にしか思っていなかった。

そして、樹の送ってきた人生。

もはや、かける言葉が見つからないでいた。

「へムカ。固定電話を設置していないのは、通報されないように。頑なに拘置所に行くことを拒んだのは、僕は警察に殺人犯だとバレると思ったからだ。つくづく僕は自分のことしか考えてないんだ。幻滅した？」

今までへムカが樹の家で経験した事態の多くが、解明した。真実を知れたことこそ嬉しいものの、その実態は殺人者だったという事実。

へムカは、言葉に詰まった。

「それは……」

へムカは幻滅していた。殺人犯だと知れば、誰だって幻滅するだろう。

けれども、樹を憎むことなんてできない。今まで散々お世話になったし、話を聞く限り樹の母親が悪いようにしか思えなかったからだ。

とはいえ、殺人は殺人。本来なら罪を償わなければならぬ。いくら情状酌量が認められても、刑期は長い。

樹と一緒に居たいという気持ちと、自由に生きたいという気持ち。

どちらとも大切な気持ちなため、すぐにどちらかに天秤を傾けることなどできなかつた。

「で、答えは？」

樹はへムカに返答を急かす。

冷静に考えれば、多くの市民の命が掛かっている以上へムカの方法を推し進めるべきであった。しかし、父親から言われた言葉が頭の中に蘇る。多くの命を優先することも大切だが、大切な人の命もまた優先するべきなのだ。

「……逃げよう」

根本的な解決にならないのはわかっている。けれども、へムカにはこれしか浮かばなかつた。

「羽黒市を離れて遠くに逃げよう！ そうすれば私も狙われることもないので平和です」

無茶苦茶な提案だとわかっている。

仮に転居したところで、へムカは外には出れないし樹は胸を張って歩けない。いつ警察にバレるのかと、内心震えながら暮らすのだ。

そんなもの、平穩という言葉の意味からは離れすぎている。

「いや、いやよ」

樹は妙に落ち着いていた。包み隠さず全てへムカに話す覚悟で来たのだろう。

「どうして!？」

「僕さ、母親を森に捨てた後しばらく遊んで自首しようと思ってたんだよ」

樹はへムカの方を振り向くと、穏やかな表情で微笑んだ。

「でもへムカ、君に出会った。あの時見たへムカは、体中に痣があつて自分と同じ様に虐待されてたんじゃないかって思ったから他人事とは思えなかつた。でも、僕は犯罪者。救急車を呼べば事情聴取のために警察官と会ってバレるかもしれない。救急車だけ呼んで立ち去ろうとも思ったけど、僕と同じように虐待を受けていたかもしれない子に寄り添ってあげたかつたんだ。だから救急車を呼ばず、家に連れて帰った。僕はあのときのこと、全然後悔していないよ」

樹は過去を偲ぶように語る。

「結果的にいろいろと違ってはいたけど、へムカと暮らした日々は楽しかった。今までが苦しすぎたこともあるかもしれない。いつしか、自首するという決心は大きく揺らいでいた。だからこそ、君が拘置所に行くなんて言った時反対した。そりゃ、多くの人が助かるなら反対したくないさ。でも僕は君と一緒にいたい。それでも——」

へムカにとって、甘美な言葉の連続だった。だからこそ、聞き手に徹していたが最後の言葉を聞いて眉を顰める。

「限界はくる。身元がわかってないとはいえ、母親の遺体はすでに発見された。へムカも、僕が不甲斐ないせいで危うく大変な目にあつた。僕は決めたよ、大人しく自首するって」

しかし、へムカの顔色は優れない。まだへムカの中では心の整理がついてなかった。

へムカが散々主張し、樹に突っぱねられた作戦。ようやく樹が理解してくれたと思つたら、へムカはリスクに怯えてしまった。

「全く、へムカは結局どっちなんだ？」

呆れるというよりかは、愛であるような声調だ。何も怒ってはおらず、ただどうするかを聞いている。

「わ、私は……」

頭を抱えるへムカ。しかし、並大抵のことではない。周りのことから碌に見えないほどに熟考していた。

「じゃあ、元の世界に帰りたかい？」

決めかねるへムカに、樹は別の質問を投げかける。今の質問よりもよっぽど決定が楽なものだ。

「嫌。絶対に、帰らない」

即答して見せた。樹は安心した様に、誘導するべく言葉を告げる。「なら、答えは一つしかないじゃないか」

へムカが元の世界と絶縁する方法、それは一つしかない。けれども、樹を失うというのも非常に心苦しい。

考えただけで涙が止まらない。緩みきった水道の様に延々と涙が垂れ流れ、涕泣に至る。ただ樹に抱きつき、その胸の中に埋まる。樹

はへム力を静かに抱きしめると、徐々に雨が止んでいく。

かくして、雨があがるとへム力も体を起こし真っ赤に腫れた臉を気にせもずに樹に面と向き合った。

「私、拘置所へ行く。一緒に来てくれる？」

樹は少しばかりの笑みを浮かべ、浅い首肯をする。

「いいよ。ただし一つ条件があるんだ」

「なに？」

「もし出所したら……そのときは、迎えに来てくれないか」

樹は、出所当日を想像する。成長したへム力が、迎えに来てくれるのだろうか。太陽の下を歩いているのだろうか。考えれば考えるほどに、疑問は浮かぶばかり。

何年先かはわからない、無期懲役にはならないでほしいと思う。そんなことを口走っている自分に対し少しばかり恥ずかしい様思った。とはいえ、殺人を宣言した後ではこの程度のことなどまるで相手にもされないとも思う。

「……もちろん！」

へム力は雨があがり月光が輝く中、太陽のような眩しい笑顔で言った。

## 第四章

### 第35話 ジレンマ

ヘムカたちが家に帰ってきたのは、丁度真昼間だった。しかし、激しい雨が続いていたせいとか、昼とは思えないほどには暗い。

樹が買い物で買ってきた食材で作った料理を済ませると、二人はダイニングテーブルで向かい合った。

「さて、拘置所に向かうってことだけど、どこにあるの?」

樹は羽黒市に来てから月日はそれほど経っていない。しかし、質問を投げかけているヘムカはもっと羽黒市の公共建築物について疎い。

「さあ? どこだろう」

拘置所というのは、テレビで報道されていたことだが今現在も拘置所に入っているとは限らない。仮に今でも入っているのだとしても、どこの拘置所なのかは皆目検討がつかない。

一応、羽黒市には拘置支所がある。だが、規模が小さく外国人の受け入れ準備など整っておらず可能性は低い。

「調べたほうがいいよね……」

電話で直接警察や拘置所に問い合わせるなり、インターネットで調べれば出るのかも知れないが生憎どちらもできない。

「あ、そういえば」

何かを樹は思い出した。

「西羽黒駅の近くに、確かインターネットカフェがあったな……」

しかし、問題はある。二人とも、インターネットカフェに関する知識は乏しかった。片や教育虐待を受け親から行動制限を受けていた者、片や中学一年生で異世界に転生した者。両者の知識が乏しいのは仕方のないことだ。

「じゃあ行くか。ヘムカはどうする?」

「私も行く」

その後すぐにヘムカたちは、羽黒鉄道で西羽黒駅まで向かうと近くのインターネットカフェへと向かった。

「ここか」

西羽黒駅から少し離れた場所にある雑居ビル。その一階にインターネットカフェはあった。

二人で店内に入ると、早速受付へと向かう。

会員登録は身分証明書が必須なので危うく詰みかけたが、幸いにも一日利用であれば不要とのことだった。二人用の個室を選択しその部屋へと向かった。

部屋に入り、PCを起動する。

樹は家でPCに触ったことなど殆どなかったが、高校時代には情報科の授業で触ったことを思い出し拙い動作でPCを操作する。

『羽黒市 不審者』

検索フォームに入力し、早速調べてみると早速大量の情報に出くわした。新聞記事はもちろんとして、著名人の発言、そして匿名であることを理由に過激な発言をしている者もいる。

不審者たちの正体を探る者も現れており、『羽黒市に行ってみた』なる動画を投稿しているものもいた。

「とりあえず、行き先を確認しよう」

キーボードを使い、『羽黒市 不審者 移送先』と入力して検索してみる。市長や県知事、警察本部長の会見を切り取ったものが表示されたためそれらを流し見る。だが、肝心の移送先についてはどこにも出てこない。

「中々出てこないな……」

樹が頭を掻きむしりながら検索結果の下のページまで確認する。

「私飲み物取ってくる。何がいい？」

ヘムカは先程から樹が悪戦苦闘する様子をただ横から眺めることしかできない。そのため、席を離れた方がいいだろうと思ひ飲みたいものを聞いた。

「烏龍茶頼む」

「わかった」

二つ返事で了承するなり、すぐに個室を開けてドリンクサーバーへと向かう。樹が飲みたい烏龍茶とヘムカが飲む林檎ジュースを注い

だ。お盆の上に二つのグラスを載せると、ゆっくりと樹のいる部屋へと向かう。

「ねえ、聞いた？ 最初の殺人事件のこと」

樹がいる部屋の前。丁度大量の漫画が陳列されている棚の近くで、へムカはそんな声を耳にして足を止めた。

声の感じからして、おそらく若い女性の声だろう。

「ああ、聞いたよ。遺体わかったんだってね」

「そうそう、確か地方都市に住む女性でしょ。で、殺人犯は息子。名前は確か……佐藤なんとか」

佐藤なんとかというのが、間違いなく樹を指しているのはへムカでもわかった。

これ以上聞いていられない。グラスに注がれた飲み物のことを全く考慮していないといえる速歩きで、樹のいる部屋へと入った。

「ああ、お帰り……ってどうかしたか？」

先程同様に、掻き毟っている様子は全くない。欲しい情報が見つかったのか、随分と呑気に画面を眺めていた樹はへムカの方へと振り返る。しかし、気まずそうな顔をしているへムカを見て、言葉を一瞬つもらせた。

「ううん。何にもない。ところで、情報見つかった？」

樹と別れる時が確実に近づいている。そのことを理解しているへムカはいつもどおりの表情へと戻すなり、樹の側まで駆け寄り烏龍茶を手渡す。

「ああ、ありがと。なんか安積にある拘置所に移送されたらしい」

早速烏龍茶を飲みながらへムカにも見つけたページをよく見せる。それは、県が公表した文書で全体に渡って堅苦しい日本語で書かれておりへムカにはよくわからない。

「何とか見つかったな」

樹は無事に情報が見つかって気が緩んだのか、烏龍茶を口につけた。

だが、へムカの心境は複雑だ。

PCの下部に表示されている現在時刻を見る。

簡単な調べ物だけのため。

そんな考えから一時間のプランを選んだのだが、両者ともにPCに疎いため結果としてかなり時間が掛かってしまっている。そのため、退出時刻までもう時間がなかった。

### 第36話 乗り換え

明朝五時半。日の出は終えているものの、まだ空の色は薄暗い。そんなまだ多くの人が寝ており、一部の早起きの人間が目覚めている時刻。羽黒市一本の一両列車が市を横断していた。

その列車の中で、ヘムカたちはロングシートに腰を下ろしていた。ヘムカだけが目をこすりあくびをする。声を抑えようと手で口元を塞ぐが、声がかくぐもるだけであまり効果はない。

無理もなかった。前日は拘置所へ行くための準備で忙しく、夜もあまり眠れていない。

ヘムカは前世の記憶こそあるが、体は正真正銘の八歳だ。子どもらしく、遅くまで起きていたりすることは体にとっても影響が大きいのだ。

ましてや、絶妙な温度調整がなされている心地よい車内のことだ。気を抜いたらすぐに眠りに誘われてしまう。そのため、無理に目をこすり寝落ちしないように尽力しているのだ。

「ねえ、あの子」

「何かの病気かな？」

「聞こえるって」

時折聞こえてくるヘムカについて言及された小言も、寝落ち防止に役に立っているというのだから皮肉なものである。

幸いにも、今乗っているのは安積鉄道の列車。満員電車などと比べれば明らかに空間が目立つものであったが、以前にヘムカたちが乗った時と比べれば格段に人は多い。前回は丁度人が皆無な時間に乗ったのに対し、今回は丁度出勤の時刻。サラリーマンなどが比較的多く乗車しており、中には遠くの学校に行くであろう制服に身を包んだ学生もいた。ヘムカについて言及していたのも、学生たちである。

その中で、大きめのフードを被り車内の年齢層と明らかに異なるヘムカは非常に目立っていたのだ。

しかし、乗客の大半が一瞥をしたりする中で列車は無事に終点の羽黒中央駅に到着する。

前回同様に小銭と乗車券が乱雑に入れられた箱の中に、ヘムカも同様に小銭と乗車券を入れる。しかし、真面目な駅員だったのかヘムカを一瞥こそするもののごった返す改札の流動性を保ちたいが故か、特に何か声掛けすることもせず改札を通過した。

「ここからだ本番だぞ、ヘムカ」

ヘムカは強く頷いた。

拘置所に行く上で、職員にヘムカの容姿がバレるのはほぼ確定だ。

拘置所は脱獄しないように警備が厳重。怪しい者など門前払いだ。それに、ライベの部下に話し合う面会室では必ず職員も同席する。

その上で緊張しないようにと、フードを被りながら衆目環視の状況下に置くことに決めた。しかし、本番はここからだ。

羽黒中央駅は、羽黒鉄道の他にもう一つの路線が乗り入れしているのだ。

羽黒鉄道の改札を通過し、別の路線の改札へと到着するがそこにいたのは尋常じゃないくらいの人々の数であった。

「うわあ……」

とはいえ、乗客の多くは早く列車に乗りたいたのか脇目も振らず、駅に入るなり改札に一直線であった。

樹が自動券売機で安積駅行きまでの切符を二枚買い、ただ人混みの多さに驚いているヘムカの元へと戻る。

「本当に大丈夫？」

「うん。びつくりしただけ」

ヘムカは、樹から切符を受け取ると二人で自動改札を抜ける。駅のプラットフォームまで来るなり、ヘムカの異常さを周りが認知し始め微かにざわめき出す。

けれども、何を言っているのかまでは聞き取れない。隣の人にしか聞こえないような、最低限の音量で会話しているのだ。

「見られてるな」

樹が周りの迷惑にならないように小声でヘムカに告げる。

「うん」

羽黒鉄道が悲惨なのか、或いはこの路線が主要路線なのかは知らな

いが、プラットホームに立って列車が来るのを待っている者の多くはヘムカの方を見た。

一瞬見ながらも、名残惜しそうに別の方向を向く者。一見興味なきげだが頻繁にヘムカを見る者。所作に隠す動作が一切なく、堂々とヘムカを見つめる者。様々だった。

すぐに列車到着のアナウンスが流れると、丁度すぐ列車が来て乗り込む。先に座っていた者の多くは視線を変えず景色やスマホに夢中だが、一目ヘムカを視界に入れたのであればプラットホームにいた乗客同様の行動を取った。

しかし、以前のように迷いはない。拘置所へ行くのだから、否が応でもその姿を晒すことになる。

ヘムカたちは空いている場所を探す、生憎場所は全て埋まっていた。大人しく羽黒駅のプラットホームと反対側にあるドアの手すりに掴まった。

とはいえ、何もしないで立っているのはつらいことで寝不足を相まって急激な眠気がヘムカを襲う。樹に支えられて辛うじて立ってはいたところ、次についた駅で偶然一人分の場所が空いた。

「ヘムカ、座るか？」

樹の声掛けに首肯する。

ヘムカは、眠くてたまらないのだ。

だが、それと同時に乗車する人もいる。樹は、新たな乗客に取られないようにヘムカを支えながら移動し、空いている席に座らせた。

その場所に座ると、ゆっくりと目を閉じた。

### 第37話 もう、止まらない

「間もなく安積、安積です」

そんな車内アナウンスが流れると、列車の速度が逡減し始める。

その違和感でようやく目を覚ましたヘムカたちは降りるべく席を立つと、開くドアの方へと向かう。安積駅で降りる人は多いらしく、列車が停車するなり列車のドア周辺はかなり込み合った。

人混みで一番避けるべきなのは、フードが取れてしまうことだ。周りに人が大勢いるため、ふとした拍子にフードが取れてしまう可能性がある。そのため、ヘムカはフードを前方を引っ張ると、樹に腕を掴まれながらどうにか人混みに行く。

ヘムカは、まだ八歳という年齢を考慮しても背が低い。動く壁に押されているも同然で、周りの大人たちに合わせた早歩きをするのがやっとだった。

改札にたどり着くが、自動改札なため二人とも切符を挿入するだけで無事に終わる。一応改札口には駅員もいるが、切符を紛失したらしい老人の対処に当たっておりヘムカのことなどまるで気にしてもしない。

それでも樹は万が一ヘムカが緊張してしまうかとも思ったが、羽黒鉄道の改札の時のような戸惑いは一切ない。緊張で一杯だった。

「ふう」

人混みから逃れられたヘムカ。春とはいえ人混みの熱気で汗ばんでしまい、思わずフードを取ろうとしてしまうがすぐに気が付き自制する。

「大丈夫？ ヘムカ」

「うん。それにしても、ここの拘置所なんだよね」

まだ拘置所は見えないどころか駅構内である。とはいえ、ヘムカにとっても樹にとっても拘置所へ訪れるということは人生に大きな影響を与えかねない行為に等しい。二人はすでに緊張していた。

手で扇ぎながらヘムカが辺りを見渡すと、街がよく見えるであろう巨大なガラスのを見つけた。

近くまで行ってみると、高さは駅構内の高さの半分ほどまで。長さ  
は、階段と階段の間、複線を跨ぐほどに長い。

「ああ、きちんと調べた。羽黒市内にも拘置支所はあるが、別の不審者  
が脱獄を幫助する可能性があるから、あと多すぎて対処しきれないと  
いう理由で全員安積に移送されたそうだ」

樹は話しながら近づいてくる。

仮にも指揮が取れた集団である。万が一ライブが部下の收容場所  
を発見したら、襲撃するだろう。その点でも、警察の判断は正しかっ  
た。

「そろそろ行こうか」

「そうだね」

樹の後ろをついていき安積駅を出る。改めて振り返れば、その駅の  
大きさに驚いた。

羽黒市よりも都会である安積市は、県下最大の人口を誇るとい  
うこともあり商業が非常に発達している。

羽黒市でしばらく暮らしてすっかり見慣れたと思っていた近代建  
築も、まだ序の口に過ぎない。しかし、無闇矢鱈に感嘆している暇も  
ない。靴紐を固く結び直すと、駅前の交番に恐れ慄きながら道を進ん  
でいく。

「やっぱり交番通る時って怖い？」

小声で樹に聞いてみる。

「まあね。でも、一々交番の前で見つからないように行動するのも不  
審がられるから。西羽黒駅にも近くに交番あるし」

樹は堂々と喋った。しかし、手に汗握っているため少しは緊張して  
いるのだろう。それよりも、驚いたのは交番の位置だ。

「え？ そうなの？」

「そうだよ。見えない位置にあったから仕方ないけどね」

直線上では見えなかったかもしれないが、交番が近くになれば巡回  
している可能性が高い。万が一遭遇していたら職務質問されていた  
かもしれないのだ。無事に合わずに済んで良かったと胸をなでおろ  
す。

その後も、しょうもない話を続けること十五分ほど。

「ここだな」

しかし、ヘムカは何かを喋ろうにも尻込みしてしまう。その厳つい外観に気圧されたのだ。

目の前にあるのは、何かの官公庁の施設かと思われる大きな施設と、それを取り囲む高いコンクリート壁。ここが安積拘置所である。学校などの壁とは比べ物にならないほど壁は高く造られており、厳重な警備体制というのがわかる。

門扉で怖気づいていても仕方ないため、敷居を跨ごうと進む。しかし、すぐに警備員が二人の前に立ち塞がった。

「あの一。すみません。そちらのお子さん、ちよつとフードとつてもらっても?」

いざ取ろうとするが、どれだけ覚悟を決めていたとしても本番になると思うようにはならないものだ。

「どうされました? 光線過敏症とかですか?」

「いいえ」

ヘムカは、ゆつくりとフードを取った。首輪を見られるとさらにややこしくなりそうなので、首輪は見えないようにしたが。

しかし、警備員は顔色を変えなかった。

今まで多くの起訴された人々を見てきた警備員にとって、狐耳が生えていたくらいでは別段驚くほどのものでもない。

「わかりました。ありがとうございます。ところでご用件は?」

「羽黒市の確保された言葉の通じない方々に面会に」

「……失礼、何の目的で面会に?」

警備員は訝しんだ。

不審者の行動は、一般常識から逸脱している。仮に日本人の知人がいたなら最低限の知識を得ていると考えたからだ。

また、記者のようにも思えない。ましてや、子連れなのだ。

すると、樹はヘムカに視線を向けた。

「この子——ヘムカが、その人たちと同郷のもので言葉が通じる可能性があるんです」

### 第38話 波のよう

さすがにこの発言には警備員も驚いたようで目を大きく見開きへムカを凝視した。すると、ポケットから無線機を取り出し喋りだす。相手の会話が聞こえないため、へムカたちには何を言っているのかわからない。しかし、警備員の発言から拘置所内部にいる人間と話しているということはわかった。

「とりあえず、受付の方へ」

警備員から、門扉から拘置所の受付までを教えてもらおうと、へムカたちはその通りに拘置所の受付へと向かう。

受付に到着すると、係員から「こちらに、必要事項をご記入下さい」と書類を手渡された。

書く必要があるのは、本名や住所、面会目的等である。本名で書くべきかどうか悩んだが、樹は正直に本名と住所を書き記す。

その書類を出すと、番号札を渡された。事前に警備員から話を聞いていたために、あまり驚かないのだろう。

「わかりました。では、本人確認書類はありますか？」

「いえ……」

拘置所に入る上で、最も懸念していた事項の一つが本人確認書類の有無である。生憎、持ち合わせていない。受付の係員はしばらく考えした後、こう答えた。

「……わかりました。少々お待ち下さい」

言い終わるとどこかへと出かけた。

へムカたちは、ただ受付にある長椅子に座り係員が戻ってくるのを待つ。しかし、思いの外すぐに係員は戻ってきた。

へムカたちは座ったばかりにも関わらず受付へと向かう。

「通してよいとのことです。準備があるのでもうしばらくお待ち下さい」

そうへムカたちに告げると係員としての仕事に戻る。拘置所に面会に来た人は、へムカたち以外にもいるのだから。

改めて長椅子に座り、時が来るのを待つ。

やがて時間になると、別の係員に案内され拘置所の内部へと向かった。拘置所の内部は持ち込めるものがかかなり制限されるため、ロッカーの中に基本的には持ち物の殆どを入れる。しかし、ヘム力たちはそういった物は持っていないため、財布や家の鍵などの貴重品をロッカーの中へと入れた。

「では、こちらになります」

その後は、金属探知機を通過し面会室へと入る。面会室は、昨今のドラマなどで見るものと瓜二つであった。

面会室の椅子に座っていると、仕切りで区切られた反対側の空間に官品と思われる地味な服を着た男が職員に連れられて入ってくる。

男はヘム力を見るなり、少し驚いたものの椅子に座った。

「この面会は録画されている。それでもいいのであればどうぞ」

ヘム力が男の隣を見ると、職員がカメラを構えていた。

基本的にこういった面会では日本語以外の言語は使用禁止だ。もし使ってしまうえば強制退場ということもありうる。しかし、これらとは状況が異なる。

意思疎通ができていないため、もし意思疎通が出来れば事件解決の大きな一歩になる。そのため、拘置所側は容認したのだろう。

「お前、ヘム力だな？」

真っ先にヘム力が話しかけようとしたところ、その前に兵士が話しかけた。もちろん、日本語ではない。

「ああ、そうだよ」

兵士がヘム力を断定できた理由は、単純に村を襲った際にヘム力の姿を見ていたからである。

「やっぱりな、で？ お前はなんでそっち側なんだ？ と言いたいところだが、別にどうでもいいさ」

兵士は笑っていた。

生活を制限されていてなんで笑えるのかはわからなかったが、そんなことを考えさせる間もなく一蹴する。

「どういふこと？」

「帰る気がなくなっただよ。だってここ、何もなくてももうまい飯

が出てくるからな」

兵士は呑気にも足を組み、平然と笑つてのける。

しかし、それでは問題しかない。全く協力してくれる気がないというのは、ヘムカたちにとつても羽黒市民にとつてもデメリットしかない。

「それでいいのかよ」

帰りたくなるようにヘムカは煽りたかったが、煽る言葉が見つからない。

感情的な言葉しか出てこなかった。

「いいんだよ。俺は幸せだ」

口笛を流暢に吹き、どこからどう見ても幸せにしか見えない。

「お前たちはライベに忠誠を誓っているんじゃないのか？」

ライベの部下の忠誠心は高い。そのことを突き、なんとか帰るように説得するものの鼻で笑われる。

「あ？ 何いってんだ？ ライベ指揮官は俺たちと一緒にいるぞ？」

ヘムカという言葉が理解できないとばかりに兵士は足組みを止め、手を組む。

「どういうこと？」

「言葉通りの意味だよ。あのお方は、常に最前線に立ち続ける男だからな。お前を探す際にも、真つ先に動いたのはライベ指揮官だ」

かくして兵士は語った。ライベ指揮官の人格、性格、全てにおいて全肯定だ。何か洗脳魔法でも受けたと言われたほうが自然に思える程のものだった。

このままでは進展がない。そう思ったヘムカは思いを巡らせた。

「つまり、ライベはここにいるんだな？」

確認のためにヘムカは兵士に聞いた。

そして、兵士の反応も案の定ヘムカが考えたとおりだった。

「ああ、あたりまえだろ」

### 第39話 歪の謎

「そうか、わかった。とりあえず、ライブと話したい」

「わかった。でも、この国の言葉知らないからお前が職員たちに指図してくれ」

ヘムカは会話を終えると、職員の方を向いた。職員も気がついた様子で、近くまでやって来る。

「ライブという男に替えてください。この男たちのリーダー格です」  
「わかりました」

職員は兵士を連れていき部屋から退出したが、すぐにやってきた。職員の指示もあっただろうが、何より先程の兵士が話したのだろう。実際、部屋に入ってきたときのライブはかつてないほどに興奮していた。不気味な程に笑みを浮かべている。まさに、狂気を体現したような表情をしている。

ライブは椅子に大人しく座った。

「久しぶりですね、ヘムカ」

ライブは、ヘムカと話せることがよほど楽しみにしていたようだった。笑みが隠しきれしていない。

その不気味さ故、思わずヘムカは体を震わせてしまった。

「久しぶり……ライブ」

「部下から聞きましたよ。何やら、私のお話したいそうじゃないですか。私としてもいろいろと話したいことがあったので好都合です。何を聞きたいんですか？」

ライブは、ヘムカが思っていたよりもよっぽどおとなしかった。ライブとてここでは身元不明の犯罪者に過ぎない。暴れても無駄だということを理解しているのだろう。

「歪だよ」

「歪……？ ああ、もしかしてあれですかね。元の世界とこちらの世界を繋ぐあの時空の歪みのことですか。私も昔研究していたことがあつてですね」

ライブは何とも嬉しそうである。自分が研究していた物を他人が

興味を持ってきてくれて嬉しいのだ。

「時空の歪み？」

意味のわからない言葉に、ヘムカは聞き返した。

「もしかして、知らないでそう呼んでいたんですか？　だとしたらいい線いってますよ。あれは、世界が重なったために起こった現象なんです」

ライブは軽い拍手すら辞さなかった。散々な目にあつたヘムカとしては複雑な心境である。

だがそれよりも、ライブの言った言葉の意味が理解できなかった。「重なる？」

その言葉に呆れたのか、大きくため息をつくライブ。

「世界は一つではありません。世界の外側には、無数の世界が存在しています。普段であれば、重なり合うことなどまずありえないのです。とはいえ、可能性は無きにしもあらず。世界同士の衝突が原因でできたのがあの歪です。最初は小さいですが、次第にどんどん大きくなり次第には世界が一体化することでしょう」

ヘムカは正直理解に苦しんだ。

科学とか、魔法的なことで異常が起こっているのかと思いきや、ライブが口にしたのは何とも抽象的なものである。

しかし、ヘムカを気にせずにライブは続けた。

「我々としても、世界の一体化はなんとも避けなければなりません。必ずしも向こうの世界と元いた世界の常識が通じるとは限りません。例えば、こちらの世界では魔力がほとんどありませんね。では、魔力が豊富な我々が元いた世界と一体化したらどうなるのでしょうか？　向こうの半分くらいになるのでしょうか？　しかし、いくら考えようとも根拠などなく人類に大きな影響を与えてしまうかもしれないのですよ」

原因こそ理解できないが、二つの世界が衝突してしまったときのリスクは大きい。それはヘムカにも理解できた。

「詳しいことを説明したいのはやまやまなんですけどね。生憎、研究道具は持ち歩いていないのですよ」

ライブからは焦っているようには見えない。そこから、ある程度は余裕があるのだと推察する。

「それで、修復魔法で閉じるの？」

一応へムカが魔力を全て使い果たし行ったが、一応確認のためである。

「一応は閉じるはずですよ。なんて言っただけで、修復魔法ですからね。でも、世界の穴ですから相当な量の魔力を持っていけません。ただでさえ、こちらの世界は魔力が稀有なものですから、安易にはできません」  
やっぱりかと思った。

そもそも、万が一ここで使ってしまったら彼らは元の世界に帰れなくなる。使うわけがないのだ。

「ただ、一つ問題がありませんね」

へムカが考え事をしている最中、何かを思い出したようにライブが唐突に付け加えた。

「双方から修復魔法を使用しないとすぐにまた綻ぶんですよ」

何事かと思ったが、へムカは元いた世界に帰る気など全くない。

「ん？ もしかして——」

新たな質問をしようとしたへムカへと、ライブは怪訝な目を向けた。

奴隷の所有権はこちらにあると言いそうな顔である。少なくとも、こちらの世界では通用しない。

そんなことを考えていると、この部屋に大量の足音が聞こえてくる。

そして、勢いよく扉が開かれた。

先頭に立っていた警察官は一枚の紙を提示した。

「佐藤樹だな？ 殺人容疑および道路交通法違反諸々で逮捕する」

樹は、理解できない言葉の会話の応酬を聞き続けていたためすっかり他のことを考えていた。

だからこそ、唐突な出来事に理解が追いつかなかった。

逃げるべきか、否か。しかし、このままだとへムカと離れ離れになってしまう。

しかし、警察はそんな悠長なことを考えさせてはくれない。

「確保！」

その言葉によって、多くの警察官が樹を押え込み手錠をつける。そして、強引に立たすと部屋の外へと連れて行かれた。

「え？ これってどういう？」

残されたヘムカはすっかり混乱していた。

「大丈夫、もう大丈夫だからね」

女性警察官が、優しくヘムカを宥めようとする。しかし、ヘムカからしてみれば微塵も信用できないし、全くもって大丈夫ではない話だった。

「待って……。待ってよ！」

ヘムカは必死で樹を追いかけた。しかし、樹はそそくさと運び出されてしまい悲痛な叫びも届かぬまま女性警察官に腕を握られていた。

## 第40話 光は見えない

面会は強制終了となった。

へムカたちの身柄はどちらも警察署へと移送されることとなり、へムカは警察車両に乗せられた。逮捕されている扱いはないため、拘束はされていないが隣には女性警察官が搭乗している。

「大丈夫だからね。ところで、お名前聞いてもいい？」

優しい言葉をかけてくるが、へムカは内心全く信用していないため、女性警察官とは反対側を向いた。

「……へムカ」

閉じている窓に向かって吐き捨てた。

「へムカちゃんっていうんだね。どこに住んでいるの？ 家族の人は？」

一度答えてしまったためか、女性警察官は執拗に聞いてくる。

さすがに鬱陶しくなり、だんまりを決め込むことにした。

「大丈夫。お家に帰れるからね？」

何を言っているのだろうと思えた。

へムカの家族はもういない。家は焼けてしまった。

今家と呼べるものは、樹と暮らしたあの家だけだ。

「なら、帰して下さい」

不思議と、冷たい声が出た。

自分でもなんでこんなに苛ついているのか、不思議だった。樹と一緒にいるときはこんな憤りを感じたことなど一度たりともないというのに。

「すぐ帰れるからね。ちょっと警察で事情を聞くだけだから」

警察からしてみれば、不審者たちの通訳が手に入った上、殺人犯を逮捕できたりといい事づくめだ。散々身元を調べられた後、ライブの部下たちの通訳として駆り出されるのが目に見えている。

「着いたよ」

警察車両から降りると、警察署を目の当たりにする。移動時間がやけに早いとは思ったが、拘置所も、警察署もどちらも街の中心街に

あるためであった。

遠目で見ると、樹らしき人物が警察官に拘束されながら署内に入っていくのが見えた。

「こっちだよ」

ヘムカも同様に署内へと入っていく。しかし、樹とは一度も遭遇せずに少年補導室なる部屋へと連れてこられた。

すっかり取調室のような無機質な部屋で調べられると思ったが、少年補導室は落ち着いた色合いをしている部屋だった。補導の名前を冠しているが、補導以外にもいろいろ使われているらしい。

「じゃ、そこに座って」

何をされるのだろうかという不安を感じつつも設えてある椅子に座り、反対側には先程からずっと行動を共にしている女性警察官が座った。

机の上には書類があり、女性警察官はペンを持っている。

「まず、一応確認ね。お名前は？」

名前なら先程も聞かれたが、公式書類として書くので念の為に再び聞いたのだろう。

「ヘムカ」

「それは名前？ それとも名字？ 後、漢字ある？」

「名前。カタカナ……なのかな？」

日本語を流暢に扱っている割には、自分の名前の日本語表記が定まらない。違和感を覚えつつも、女性警察官は質問を進める。

「名字は？」

「ない」

女性警察官は若干困っていたが、すぐに書類に滞りなく何かを書き連ねていく。

「そう、わかったわ。世界には名字のない国もあるからね。で、ご家族はどこと？」

「もういない。殺された」

女性警察官は、殺されたという発言から治安の悪い国を想像する。たまたま親戚が日本にいて、その親戚を頼って日本まで来たのではな

いかというのが女性警察官の推理だった。

「そう、わかったわ。誰と暮らしていたの？」

「佐藤樹」

その言葉を受けて女性警察官は大きく混乱した。樹には殺人容疑がかけられた段階で、親族関係などが洗い出されている。しかし、日本人以外はいなかったのだ。

親戚関係がなく、樹がヘムカを攫ったという件も考えたがヘムカは樹に懐きすぎている。とても誘拐犯とは思えないし、殺人犯として名前が全国に公開されている中でわざわざ誘拐という何のメリットもない行為をする理由がどこにも見つからないのだ。

「謎ね……。あなたはどうかやってその佐藤樹と出会ったの？」

「それは……」

言うべきだろうかという迷いが生じた。そもそも、ライブたちを利用し歪を修復するためには、拘置所や警察、裁判所の許可は必要不可欠である。そして、その許可を得るためにはヘムカの素性を話さねばならないのだが、ヘムカは苛立ちのせいなのか全く話す気が起こらなかった。

「わかったわ。ところで、あの不審者たちと意思疎通ができるのでしょうか？ 手伝ってくれるわね？」

女性警察官は、書類を出した。契約書だった。ヘムカが通訳として全面的に協力するということ、その代わりヘムカの衣食住は保証するということ。突っぱねてもいいのだが、樹の家は絶賛家宅捜索中であり帰ることができない。

ヘムカは、この契約書に署名する他なかった。

「大丈夫？ 日本語かける？」

署名を躊躇するヘムカに、女性警察官から声がかかる。ヘムカからすれば侮辱に等しい行為だったが、女性警察官は単純に見た目や名前から日本語が書けない可能性を考慮したまでであり侮辱の意図はなかった。

「書けますよ」

契約書の欄に、苛立ちながらもヘムカは署名をした。

## 第41話 やはり傀儡

へムカが連れてこられたのは、無機質で中央に机のある部屋だ。そして、へムカの隣には女性警察官がおり人を待っている。

「いい？ 正直に訳してね」

「はい」

女性警察官は、改めてへムカに念押しする。年齢も考慮してのことだろう。

それに、契約書にも書かれていた。

通訳としての仕事を求められた場合には大人しく従うこと。

通訳の際、改竄しないこと。

へムカとしても、破って何ら特はない。大人しく遂行するつもりだ。

「あ、来たわ」

女性警察官が足音に気づき扉を見ると、一人の男が手錠をされ警察官に拘束されながら部屋にやってきた。

男は警察官に椅子に座らされると、へムカに付き添った女性警察官去っていき代わりに場数を踏んできたであろう強面の女性警察官が入ってきて男の反対側の椅子に。そして、へムカは丁度二人から見て真横の椅子に座った。

「それでは、取り調べを開始します。あなたの名前は？」

そこからは、ただ言葉を機械的に翻訳していく時間だった。へムカである必要はどこにもない、ただ翻訳できるのがへムカだったからという理由で長時間に渡って取り調べの手伝いをしていた。

「貴国で兵士の権限がいかに保証されているようとも、我が国の現行法では関係ありません。明確な銃刀法違反です」

警察官が男に対し、自国の兵士の権限が通用しないことを告げる。

しかし、へムカは新たな問題に直面した。途中、難しい言葉が出てきた場合には何と訳していいのかわからないのだ。

「現行法……ってなんて訳すんだ？」

文明化されていない小さな村に住んでいたへムカからしてみれば、

現行法の訳に相当する言葉など聞いたこともなければ考えたことすらない。小声で唸りながら考えるも、女性警察官は脚を揺らすなどして急かす。とはいえ、脚を揺らしただけで一応本人の口からは何も言っただけで男を威圧するのみだ。

ヘムカは通訳のために教育を受けたわけでもないのだ。そしてなおかつ、両者に共通の常識がないこともますますヘムカの神経をすり減らしていた。

「魔法？ こっちは真剣に話をしているんですよ！」

女性警察官は魔法などの概念はわからないし、兵士は全てが法で管理される法治国家の概念を知らない。両者の話し合いをスムーズに行うために、前提知識を伝えた結果かなりの予定された時間を大幅に超えた。実に十二時間通訳しっぱなしであった。

「お疲れ様。また明日もよろしくね」

感情など籠もっていないさそうな、合成音声ですら言えそうな挨拶を受けるのと設けられた部屋へと向かう。

食事はすっかり冷めきった留置所と一緒に一緒の仕立て屋の食事。夜遅くに食べる分、普通に留置所に入っていた方がマシだとすら思えた。それに衣食住が保証されたといっても、警察署内の一室。雑に改造された簡素な部屋だ。プライバシーなどあったものではない。死んだように寝るも、不審者が騒ぎを起こしたとかで真夜中の三時に通訳として駆り出された。

まだ未熟な子どもであるヘムカが心身ともに疲弊するまで二日かからなかった。

「あれ？ なんで泣いて……？」

気がつくのと、ヘムカは泣いていた。時計を見ると、深夜十二時。意識しないままに仕事を終えて寝てしまったのだろう。布団を見ると、涙ですっかり濡れてしまっていた。

布団が汚れたことよりも、頭に浮かぶのは樹のことだった。

「大丈夫かな……？」

本の僅かな短い期間しかともにしていないが、現時点でヘムカが最も信頼しているのは樹だった。たとえ犯罪者であろうとも、変わりは

ない。

暫く布団を上で起きたまま何も考えずに身を任せていたが、尿意を感じ立ち上がった。

「トイレ行こう」

部屋を出て、深夜の警察署を徘徊する。とはいえ、深夜とて犯罪がないわけではないためどこかしら明かりはついている。

「あったあった」

トイレを見つけ、近くにある部屋を通り過ぎようとしたとき部屋の中から甲高い声が聞こえ思わず尿意を忘れ聞き耳を立てた。

「取り調べもいいですけど、あの子のことも考えてやって下さいよ。あの子、さつき確認しましたが眠りながら泣いてたんですよ？」

最初に出会った女性警察官の声だった。ある程度はへムカのことを気遣ってくれていたらしい。

「その理屈だと、どんな大罪を犯した重罪人でも泣けば泣くほど罪が軽くなるぞ」

その言葉に、女性警察官は何も反論できないとか唸り声を上げるほかない。

「それはそうと、明日……じゃなくて本日。安積県知事が視察にいらっしやる。準備をしつかりな」

「……わかりました」

女性警察官は部屋を出ようとしていたため、へムカはすぐにトイレの中に入り隠れた。何かいいことがあると思いついて聞いているが、結局徒労であった。

トイレをしたあとは、すぐにまた布団の中に入り少ない自由時間を全て睡眠に当てた。

## 第42話 壊れた傀儡は翻る

「はあ？・森の中!？」

へムカが通訳になってから三日目。今日はライブと男性警察官の通訳だ。さすがのへムカも慣れてきたのだが、なぜかやる気が全くわかなかった。

男性警察官は、早速へムカから訳されたライブの発言を聞いて驚倒している。

「ええ、そうですよ。森の中にある、世界と世界の接触による世界の歪。それらを通して我々はこちらの世界にやってきたのですよ。彼女を連れ戻すためにね」

ライブはへムカの方を笑顔で見ってくる。

「なるほど、彼女はこっちの世界に逃げてきたのか。で、その歪つてのは塞がるのか」

「ええ、塞がりますよ。両世界から修復魔法を使えば理論上は塞がるはずですよ」

「両世界？　なら少なからず一人はこちらの世界に残らなければいけないのか」

男性警察官は、腕を組み誰か一人残らなければならないということについて考え込んでいる。

「そうですね、両世界が一体化したらどうなるのかわかったものではないのでいずれは済ませたいです。しかし、私どもの部下にはここで暮らしを天職だと思っている人もいますよ。とはいえ、まだ猶予があるはずなので時間はありますよ」

「馬鹿いな。早急に塞ぐに決まってるんだろ」

男性警察官は、机を叩きライブを威圧するように一蹴する。事を呑気に言っているライブが許せなかったのだ。そして、その怒りはへムカにも飛んできた。

「で、あんたも使えるんだろ。さっさと塞いでくれよ」

自分が協力すればすぐにでもこの問題は解決する。

わかっている。

わかっているのに、全く以て乗る気になれなかった。

「おい、あんた。聞いているのか？」

ヘム力はすっかり謎の感情の解明に夢中で、男性警察官のことなんて微塵も聞いていなかった。

何で？ 何で？

しかし、思い出すのは樹の顔だ。

樹とやる気のなさに関係はない。そう疑う余地もなく決めつけるが、逆にどンドン樹のことが頭の中に浮かんでくる。

気がつけばまたもや泣いてしまっていた。

「はあ。まーた泣いているのか。水分補給しとけよ」

知らない内に泣いていたらしく、男性警察官は泣くヘム力を何とも思わなくすらなっていた。

「お茶飲む？」

「飲みます」

男性警察官が紙コップに緑茶を注いでくれる。

飲み干すも、涙は止めどなく溢れ出てくる。

「嫌だよ。もう、嫌だよ……」

こんな仕事、後ライブたちが帰れば解放される。わかっているが、何もやる気が起きない。

「休憩終了。悪いなあんた。もうちよつと頑張ってくれ」

ヘム力はすぐに取調室に戻され、ライブとの会話を通訳する。ライブは無駄に落ち着いているため、通訳自体はやりやすいはずなのに昨日と比べてますますやる気がしない。

というか、自分が自分でない気がした。

「大丈夫かなあ。まあ、これだけ働いたら子どもは体調崩すよな……」

さすがの男性警察官もヘム力がこの状態では続行が不可能と判断したのか、取り調べは急遽延期となった。

部屋に戻されると、そのまま布団に寝る。どこか熱っぽい感じはするが、咳やくしゃみ。悪寒、食欲不振などはない。

初めての感覚に抗えずただ布団の上で全身を脱力させていると、部屋の向こうから聞き覚えのある声が聞こえた。

「佐藤さん？」

頭頂部に生えている大きな狐耳が、樹の声だと確信した。今までの脱力感が嘘だったかのように飛び起きると、急いで部屋を出た。

「佐藤さん！」

「ああ、へムカか……」

廊下に立っていたのは、ただでさえやつれていた体をさらにやつれさせていた樹本人であり、手錠を嵌められ警察官に拘束されながら移動していたのだ。

樹に近づこうとするが、樹はへムカから遠ざかる。否、無理やり歩かされたのだ。

「悪いが、今構ってやれる暇はないんだ。それにあんた体調不良なんだろう？ 大人しく寝てな」

樹を拘束している警察官がへムカに告げる。

「ちよつとだけだから」

へムカは気にせず樹に近づくことにした。

「まだ取り調べ終わってないんだ。あんたも疲れているだろう？」

確かに、へムカは疲れている。とはいえ、樹の近くにいるとそんな疲れなんか一瞬で吹き飛んでしまいそうなそんな気がしたのだ。

へムカは構わず樹に近づいた。

「だーかーら！ おとなしく寝ていなさい！」

拘束していた警察官との喧嘩になるが、まず勝てるわけもなく強引に引き離されてしまう。

「あんただって、さつさどこいつに出てきてほしいんだろ？ だってら邪魔するな」

話は尤もである。警察官の言っていることは正しいことであるが、ただへムカの感情はただただ嫌がっていた。

「だったら協力しない」

へムカも、嫌なことを言っているというのには理解していた。その上でこの発言だ。

「ああ、そうなのか」

へムカは、小声で呟いた。

何に気がついたのか。

それは、ヘム力は樹のことが好きなのだということだ。けれども、ヘム力と樹の間には遮るものが多すぎる。だったら、少しでも一緒に居たいのだ。

「はあ？ 何言ってるんだ？」

「ちよつとヘム力？」

警察官が困惑するのは勿論として、さすがの樹も動揺しているようである。

「通訳もしない。修復魔法も協力しない！」

ヘム力が宣言すると、樹を拘束している警察官は大きく狼狽えていた。

「そうは言ってもな……」

誰も得しない結果になりかけていたとき、近くに足音が聞こえた。別の警察官が騒ぎを聞きつけてきたのか、大人数である。

きつと、無理にでも考えを改めさせられるのだろう。

こんなことを思いながらも、ヘム力は感情のままに行動することしかできなかつた。

## 第43話 慮りの関係は

「どうかしたのですか?」

威圧感を感じない、警察官とは思えない声だった。誰かと思いいへム力は振り向くが、どこかで見たことがある人物だ。しかし、どこで見ただのが全く思い出せない。

「えーと……確か……」

唸りながら誰だったかと思い出していると先に目の前の男が喋った。

「おや、私をご存知ではないか。私、第二十代公選安積県知事旗峰です」

その言葉を受けて、へム力は「ああ」と感嘆の声を上げた。

「知事!・ どうかありませんか?」

知事のさらに奥から、案内係のやら撮影用のカメラを所持している職員が駆け足でやってくる。

「いえ、何か問題が起こっているようで。どうかさつたのかと思つたまでですよ」

知事が職員に何でもないと諭すと、知事は樹を拘束している警察官とへム力の顔を見比べる。

「で、何があつたのか聞いても?」

どちらからでもいいということだろう。

先に話し始めたのは警察官だった。

「いえ、彼女が佐藤容疑者の保釈を要求しています、主張が通らない場合は捜査活動に一切協力しないと」

知事が警察官の発言を頷きながら聞いた。

「そうかい。君からは?」

へム力に視線を移し、発言を求めた。

県知事の前で無様な姿を晒すのか?

でも、そんなことどうでもいいのだ。

「仰るとおりです」

へム力はきっぱりと宣言した。だが、一応付け加えておく。

「別に、減刑しろとか無罪にしろとか言っているわけではないのです。ただ、時間をください。そうじゃないと、私おかしくなっちゃいます……」

無理なお願いというのもわかっている。だからせめて、時間がほしかった。

転生したこと、奴隷になったこと、たまたま歪に落ちたこと。全ては極僅かな確率だったはずだ。

だったら、この無理難題もどうにかできるといえるのは高望みしすぎだろうか？

知事はへムカカの発言を受け少し考えると、先程の警察官の方を見る。

「佐藤容疑者の罪状は？」

「殺人、道交法、諸々ですがそれがなに……か……？」

警察官は、知事のしようとしていることに感づくと、語勢がどんどん弱くなっていった。

「そうか。なら、検討しよう」

その発言により、その場に激震が走った。

「知事!? 何を仰っているんですか？」

真っ先に反応したのが先程の警察官だ。

「知事！ お気を確かに！ そろそろ知事選ですよ？」

そして、警察官に続くように知事に同行する職員も驚きを隠しきれなく、カメラを持った職員に至ってはシャッター音を立てて写真を撮っている。

「本当ですか」

弱々しい声を出し、樹もまた信じられていないようだ。

「彼女、へムカくんだろ？ 通訳ができる唯一の存在だと聞いたが」

知事はへムカを見るとそのまま警察官に向かって話し始める。

「そりやそうですが……」

「問題だとわかっているさ。しかしな、羽黒市民は事件の早期解決を望んでいる。実際、不審者の数は増える一方だ。そのせいで羽黒市では殺人やら強盗やらで散々な被害を被っているのだ。詳しい話はわ

からないが、不審者を帰し、これ以上の出没を防ぐためには彼女の協力が必要不可欠なのだろう？ だったら我々は彼女の言いなりになるしかあるまい？」

知事だつてこの問題の重大さは理解している。少なくとも、知事にとつて最善の選択肢がこれだったのだろう。

この発言を受け、職員たちは黙りこくつてしまう。

ヘムカも驚いているが、何ら反対する理由があるため何も言わないことにする。

「それはそうですが……」

しかし、警察官は納得いつていない。

「納得行かないのもわかる。だが、別に減刑等は求めていない。時期が来れば再び逮捕され、他の人同様裁かれる。ただ、多くの有名人の逮捕同様に、保釈しただけ。そうだろう？」

少ないとはいえ、殺人犯でも保釈の例がある。

「……わかりました。ですが、どうやって？ 裁判所が保釈の許可を出すまで数日かかりますが」

保釈請求までにかかる日数は長くても一週間程度で短いのだが、一分一秒無駄にできない。

「その辺は大丈夫だ。私を誰だと思ってる？」

知事はあえて県知事だとは言わなかった。しかし、警察官はどこか怯えた様子で知事から離れる。そして、知事の視線はヘムカへと向いた。

「ヘムカくん、私は総理に超実定法的措置を要請する。ただ、別に君が可哀想とはそういうのだからではない。君がきちんとこの羽黒市の事件をくれるために行うのだ。きちんと調査に協力すること。できれば即座に許可を取り消し、強権発動してでも君を通訳として協力させる。わかっているね？」

「はっ」

ヘムカは理解した上で頷いた。その後すぐに別室で契約書を書かされると、確かに署名をする。

「確かに、契約は成立だ。すぐに県庁に戻つて総理に打診しよう」

知事とその職員が契約書をまとめ、警察署を発つ準備をすると急いだ様子でヘムカが知事の側にやってきた。

「あの、知事！」

「何だい？」

知事はヘムカの方へと振り返った。

「その……ありがとうございます」

ヘムカは頭を深々と下げた。

「なに、私は何もしていない。実際に判断を下すのは総理だ。私じゃないからね」

知事は首を横に振る。

「通訳、頑張つてね。それじゃ」

その後すぐに知事は帰庁のために警察署前に停まっている車に乗ったが、車が見えなくなってもヘムカは知事に向かって頭を下げ続けた。

## 第44話 最後の日

「つまり、あなた達は羽黒市内の森林内にある歪から出てきたと」

女性警察官が、手元にある書類を見ながら今までの取り調べで出てきた事実をライベに向かって確認した。

「ええ、そうです。ところで、この話をしたのは今回で五回目なのですが」

声調は常に一定で感情がよくわからないライベだったが、少なくとも皮肉を言っていることだけはわかった。

「あのときは魔法という概念が信じられなくて、一言一句妄言かと思つて聞き流していました」

女性警察官は申し訳無さそうに視線を逸らす。

「奴隷を認めないにもかかわらず、人の発言を妄言扱い。人権意識が高いのか低いのかよくわかりませんね」

「それに関しては謝罪するわ」

女性警察官は軽く頭を下げた。

「謝罪したいというなら、この世界の物をいくつか貰えますか？ 奴隷を失うことが確定しているのでその損失の補填も兼ねて」

ライベの隣にいるということはヘムカからしてみれば耐えられないことであつたが、この言葉を聞き少し心が軽くなった。

ライベは、ヘムカという奴隷を放棄することを半ば容認しているのだから。

「それは無理ね。でもまあ拘置所に持ち込めるものだったら誰かが差し入れてくれるんじゃないかしら？」

頭の位置を元に戻した女性警察官が語る。

「確か衣料品や書物でしたね。でしたら人体の解剖図鑑はありますか？」

奴隷を失うとはいえ、あの実験はやめないようだ。どこかしらの誰かが被害に合うと知り、体を震わせながらヘムカは訳す。

「まあ、あるんじゃないかしら。というかあんた読めないでしょう」

「聞いた話によれば、この国の先の学者たちは言葉を読めないのに異

邦の人体の解剖書を訳したらいいではないですか。だったら我々もできるでしょう」

同じ人間なのだからと、ライブはその難しさを認識するわけでもなく軽く言っただけのける。

しかしながら、世界の重なりを研究していたりと頭はいいため少なからず訳せる可能性があるということに、ヘムカは苛立ちを隠せなかった。

「一応言っておくけど、前野良沢は少なからずオランダ語を理解できたそうよ?」

「つまり、もし私が完全に訳しきれたのであれば、それはこの国の偉人をも凌駕する天才であると。まあ、褒め言葉として受けっておきましようか」

その後の取り調べも、ヘムカが樹に会えると本気を出して挑むとすぐに原因と対処法がわかってしまってしまった。そのためあまり進展はなく、ただの雑談になってしまった。

「あれ、もうこんな時間か。もうあいつのところに行つていいぞ」

女性警察官が机の上に置かれたデジタル時計に表示されている時刻に気がつくと、ヘムカに向かって仕事終了を告げる。

すると、ヘムカは一目散に取り調べ室を抜け出していった。

フードを被ると、真っ先に向かったのは安積警察署の近くにあるホテルだ。

保釈されたとはいえ、ヘムカは安積警察署に通う必要がある。羽黒市からは遠いということを考慮し、樹は近くのホテルを借りることにしたのだ。

ホテルに到着するなり、丁度エントランスホールに樹の姿があった。

ヘムカはその姿を見つけるなりすぐに樹のもとに飛び込んでいった。

「うわっ!? 何? ああ、ヘムカか」

樹はヘムカのことに気がついていなかったようで、飛び込まれた時本当に動揺していた。

「びつくりした？」

ヘムカは、樹にくつつきながら仰ぎ見た。

樹のことを好きだと自覚し、もつと知りたいたいと思うのに時間はかからなかった。しようもないことでも、ヘムカは聞きいのだ。

「ああ、びつくりしたよ」

樹がヘムカの頭を撫でてやると、ヘムカは気持ちよさそうに目をつむる。

しかし、樹にヘムカへ恋愛感情はない。保釈期限が近いから、甘えたいのだろうとしか思っていないのだ。

「それでね——」

「今日でさ——」

ヘムカがそのまま喋りかけようとする、樹の言葉が遮った。

「今日でさ、最後だね」

ヘムカの顔が曇る。

保釈は、今日が最終日。正確には、世界の歪みを修復するまでである。

明日の明朝には羽黒市内へ向かい修復魔法を執り行う予定なのだ。そうなれば、二人は当分会えない。

「やめようよ、こんな話。最後まで楽しく居たいな」

ヘムカとしても、最終日をこんな暗い気持ちで過ごすしたくはない。

「ああ、そうだな。何する？」

樹はヘムカの気持ちを慮り、憂いの一切ない表情でヘムカに聞いた。

「部屋でいろいろ話そう？」

「そんなんでいいのか？」

「人とはあまり関わりたくないもん」

「そうだな。だとしても夕食どうする？」

二人が一緒にいる時間の中で最後の晚餐だ。これといって好き嫌いのない樹はヘムカに話を振った。

「今日もあまり人目につかないところにしなないとね。高級寿司屋貸し切っちゃおう？」

へムカは最後の晩餐なのだからと、有り金全て使い果たす気持ちで提案する。

「魚はNG」

即刻否定した樹は、へムカと一緒にホテルの部屋の中へと入っていった。

## 第45話 歪の修復

明朝。まだ日の出もしていない薄暗い空の下、羽黒市郊外にある山中を目指していくつも警察車両が走っていた。

その車の一つの後部座席に、へムカと樹は座っていた。

しかし、何も喋ることはない。

昨日は気の済むまで会話をし、へムカたちは徹夜覚悟で話をし続けた。だが、期限が近づけば近づくほど話したい内容は増えて終わらないものである。

にも関わらず、いざ警察車両に乗り込むなり途端に話すことができなくなってしまった。

そんな謎の出来事を同乗している警察官は不思議に思っていたが、当の本人たちはそんなこと考える余裕もなかった。

「そろそろ到着です。降りる準備をしてください」

運転している警察官が、そう告げると車が速度がゆっくりと下がり道路上に停車する。

「ここからは歩きです」

へムカたちは車を降りると、目的地へと向かうべく森の中を歩いていく。

森の中は以前来たときよりもだいぶ歩きやすくなっていた。というのも、この場所からライベの部下が来ることを知った警察はこの歪周辺を囲い、万が一来てしまった部下を瞬時に取り押さえられるようにしていたのだ。

歩いて数分もすると見覚えのある松の木々が目に入った。へムカがこちらの世界に来てしまった時に初めて見た松の木々だ。相変わらず熊の爪痕も残っていた。

「ここで暫く待機しててください」

へムカたちの先導をしていた警察官は、何かの準備のために去っていく。とはいえ、別の警察官はこの場に残り二人の監視を続けた。

「なあ、へムカ」

今までずっと黙っていた樹が口を開いた。へムカも、樹の方を見る。

「僕がいなくてもさ、元気でね」

当たり前障りのない別れとしては一般的な言葉だ。

「うん」

へムカも、ただ頷くだけ。

これでいいのだと思った。

樹がいなくなった後、自分がどうなってしまうのはへムカにはわからない。児童養護施設で過ごすのか、或いは誰かに養子として迎えてもらうのか。

しかし、そんな未来のことなどどうでもよかった。へムカは樹のことが好きだ。もつと一緒にいたい。なのに、引き離されるのだと思うと胸が張り裂けそうで、言葉が何も出てこない。

仮に言えたとしても、樹の方は困るだろう。八歳児から告白されてもどうしていいかわからないだろうし、今でこそ女性とはいえ元男なので断られるかもしれない。その上、少なくとも十年は会えない。会えてもガラスを挟んでである。

万が一承諾してくれたとしても、十数年後にはどうなっているかわからない。

だから、告白しないのが正解なのだ。

「そろそろか……」

へムカたちがこの場所について三十分程度。二人を監視している警察官が腕時計を確認した。

道路の方を見ると、捕まったライブを筆頭に次々とライブの部下たちが連れてこられていた。

だが、ライブの部下たちは皆手錠をつけていない。そんな中、ライブが向こうの世界の言葉で「帰れ」という。従うしかない部下たちは名残惜しそうに歪みの中に入り、消えていった。

そして、ライブには手錠がつけられていたがかなり特殊な手錠だった。

薄いパーツを留めて作られており、手に嵌っている部分と留め具の

距離がある程度離れている手錠だ。

ポータルが閉じると留めた部分がこちらの世界側に残るため、向この世界では分断されるため外れるという仕組みである。

ライベもまた、名残惜しそうな表情ではあったがどこか満足げな顔をしており手錠をしてでもなお大切そうに本を持っていた。

医学書である。どこかの誰かが差し入れたのだ。

「じゃ、彼に向こうの世界に戻って修復魔法をかけてと伝えて」

近くにいた警察官から、へムカに対して要請される。へムカは、恐る恐るライベに近づいて訳した言葉を伝える。

「わかりました。そして、へムカ。お元気でね。仮にも私の所有物になったのですから、そう安々と朽ち果ててくれては困りますよ」

言われなくても、へムカは朽ち果てるつもりなどない。少なくとも、出所した樹と会うまでは。

「言われなくても」

そう生意気な態度で返すと、へムカもまた修復魔法の準備を始める。警察官たちは離れた距離から見守り、樹だけは近くで見守る。

以前使用して魔力は枯渇してしまったが、歪の近くに入れば最低限の魔力は回復する。

早めにこの場所に到着したのはそういう理由もあるのだ。

ライベが向こうの世界へと帰ると、歪を通じて二人は面と向かう。

「では、始めますよ」

ライベの合図に合わせて、二人は修復魔法を行使した。徐々に歪が消えていくが、世界規模というだけあってそう簡単には治らない。

そしてへムカは、せつかく回復した魔力を全て使い切り修復魔法を使った。

「はあ……はあ」

へムカが息を切らしながら歪のあった場所を見ると、そこには何もなかった。

「これで、終わった……はあ……」

疲れ切ったへムカは、おとなしく多くの警察官がいる場所へ戻っていった。

近くでへムカを心配そうに見ていた樹も同様で、おとなしく手錠にかけてもらおうべく戻って行く。

そんなときだった。一人の警察官が大慌てでこちらに叫んでいた。

「熊だ！・逃げろ！」

## 第46話 伝えたかったこと

突然の叫び声に、多くの警察官は落ち着きを保ちつつ辺りを見渡す。

「あそこだー！」

警察官が指した方を見ると、体長二メートルはあるツキノワグマがいた。

ヘムカたちから二十メートルほど離れた場所から警察官たちの方へ向かって突進し始めた。

とはいえ、幸いにも松の木々が邪魔で思うように突進できないようである。その間にと、多くの警察官が森の外へと戻って行きそれを追うように熊も追いかけた。

丁度警察官から離れた場所にいたヘムカたちは木の陰に隠れ、やり過ぎすことにした。

「ヘムカ、大丈夫？」

「うん」

何度聞いたかわからないようなやり取りを終え、少し時間が経った。熊はどこかへ消えただろうか、樹は松の間から帰り道を覗き見る。しかし、丁度帰り道で警察官を追うのを諦めており近くを呑気に闊歩しているように見えた。

誰がどう見てもまだ出るのは危険だった。

「ねえ、佐藤さん」

ヘムカはよくよく考えたが、佐藤の名前を呼んだことは少なかった。

常に二人一緒にいるのだから、わざわざ主語を用いる必要がなかったのである。樹は毎回ヘムカの名前を使っていたようだが。

「どうしたの？」

「出所したら、必ず迎えに行くからね」

「ああ、頼んだよ。きつと、その時にはヘムカもすっかり大人なんだろうな。十年ぐらいだったら、ぎりぎり高校一年とか二年とか？」

樹は十年後のヘムカの姿を想像するが、全く想像できない。背を高

くし、制服を着せた姿を想像する。

「え？」

しかしヘムカは、その樹の発言が理解できず思わず聞き返した。

「ん？ 何か変なこと言ったか？」

何か間違っているだろうかと、樹は今言った言葉を反芻するが何もおかしい点はない。

「何で十年後が高校一二年……？」

ヘムカは八歳である。少なくとも高校三年生でなければおかしい。「いやだつて……。そういや、ヘムカの年齢って聞いたことなかったな。六歳くらいか？」

その言葉に、ヘムカは衝撃を受け物言いたげな視線で樹を見た。

ヘムカは同じ年齢と比べても明らかに身長が低いのである。

しかし、それは当然の結果でもあった。食材にありふれている日本と、弥生時代同然の生活をしてきたヘムカ。摂取した栄養の量が段違いで違うのだ。

「……八歳」

その言葉を受けて樹はどこか重くなった空気を感じ取り、ただ一言述べた。

「……すまんかった」

だが、こんな何気ない会話がヘムカにとっては楽しくて楽しくて仕方なかった。

「ふふっ……ははっ……」

堪えきれなくなったヘムカは、失笑してしまう。そして、樹もまたそれに釣られて笑ってしまう。

最後に二人で朗らかな空間を満喫できた。

だが、ヘムカの頬に涙が伝う。

今、この時と直後に待ち受けている事実。あまりに差が大きすぎた。

このままだと、きっとまたもや駄々をこねてしまうかもしれない。だが、前回は異例中の異例。今後やったとしても、許可は降りないのだ。

「なんかへムカ、この頃やたらと泣いてるな」

思い返すだけでも、毎日のように泣いている気がする。

樹は泣いているへムカをあやすため、抱きしめながら頭を撫でる。

「佐藤さんも、だよ？」

へムカは、気づいていた。樹も同様に泣いていることに。

「ああ、そうだな……」

樹は泣いていることを自覚したのか、一気に涙が零れ落ちる。そんな中、へムカはある決意を固めた。

「ねえ、佐藤さん」

「どうしたの？」

「私ね、佐藤さんのことが好き。出所したら結婚しよう」

へムカは、すらすらと言つてのけた。

樹のためにこの思いを封印するつもりだった。でも、ここまで来て告白しないというのは無理だったのだ。

「八歳は結婚できないぞ」

樹はただ、法律上無理なことを伝える。

「じゃあ、大人になつたらいいの？」

樹の返事は、どちらの意味にもとれる文言だった。へムカは諦めずに確認する。

「そうだな……人を殺したこんな僕だけど、それでよければ。後、出所してもへムカの気持ちが変わらなかつたらね？」

樹は一瞬考えるも、へムカの顔を見て妥協したのか、それとも本当に添い遂げる覚悟があるのか承諾した。

「……ありがとう」

ただ一言、へムカはお礼を述べて樹の胸の中に飛び込んだ。

樹が優しく頭を撫でてやると、近くから物音が聞こえる。熊が近づいてきたのかと思い、警戒態勢に入るが出てきたのは警察官だった。

「先程の熊ですが、遠くに行つたことは確認済みです。どうぞこちらへ」

へムカと樹は離れるも、並び合つて警察官の後に続く。しかし、その表情には何の屈託もない。やがて、森を抜け道路上へと出た。そし

て、樹を待っていた警察官が樹の前に来る。

「佐藤樹、殺人および道路交通法違反諸々の容疑で逮捕する。異論はないな？」

逮捕状を見せられた樹だが、一切抵抗はない。

「はい」

大人しく両手首を差し出し手錠が嵌ると警察車両に乗せられる。そして、すぐに捜査のためか警察署へと向かってしまった。

警察車両を見送るヘムカに、警察官とは別の人物が近づいてくる。

「ヘムカさんだね？」

近づいてきたのは、若い女性だ。

「はい、そうです」

「私、児童相談所のもんです。来てくれますか？」

彼女は、ヘムカを保護すべく警察からの依頼でやってきたのだ。

これに対するヘムカの答えは、もちろん決まっている。

「はい」

ヘムカは児童相談所の車に乗せられると、今後どんな人生を歩むのかということを考えつつ児童相談所へと向かっていった。

## エピローグ

十二年が経った。

安積県から遠く離れた所にある刑務所を、一人の男が敷地外へと出た。樹であった。映画やドラマで見るとような、「戻ってくるなよ」の声がかけられるのかと思いきや実際にはかからなかったが落胆するほどのことでもない。

そもその話、樹はこんな余計なことを考えている余裕などなかった。

樹が逮捕されてからも月二回程度はへムカからの手紙が届いたのだが、最近はずっと手紙が来ず最期に来たのは三ヶ月も前。

「へムカ、来てくれるのかな……」

思い出すのは、樹がへムカに自分自身の過去を全て打ち明けた時にした約束。出所したら迎えに来るというものだった。

期待半分不安半分で塀の外へと出たものの、近くに人の姿は見当たらない。

大きいため息をつき、仕方なく握りしめている作業賞与金で帰路に就こうと歩き始めた。

しかし、突如として黒い高級車が反対側から走ってきた。そして、樹の近くの路肩に停車する。

何事かと思いつつ樹はその車を不審そうに見るが、その中からフードを深く被った人物が現れる。身長は百五十センチ後半。薄っすらとフードの隙間から見えた顔も、黒いサングラスにマスクでよく見えないう。怪しき満点だ。

「誰ですかあなた……？」

樹は思わず声をかけた。

「大丈夫？」

樹が警戒態勢をとっているのは全て目の前の人物が原因だ。そんな事言われる筋合いなどない。

しかし、その声は聞き覚えがあった。

「まさか……？」

樹がとある可能性を思い描くと、マスクの上からでもわかるような笑みを浮かべる。

「ああ、そうだよ」

フードの人物がそう言うと、サングラスを取り、マスクを取り、最後にフードを取った。

「待ってたよ。佐藤さん」

フードの人物、ヘムカは樹の顔を下から覗き込み小悪魔的な笑みを浮かべる。そして、首元には枷はない。

「ヘムカ……ヘムカなのか……？」

樹は涙を浮かべ嬉々としながら確認する。

「そうだよ。ずっと待ってたんだよ。とりあえず、車に乗って」

ヘムカは樹の腕を掴むと強引に高級車の助手席に乗せた。

「この車、ヘムカの？」

樹からしてみれば、あのヘムカがこんな高級車を乗り回しているとは思えなかった。

「レンタカーだよ。さすがにそんなお金はないからね。じゃ、シートベルトしてね。じゃないと、道交法違反だから」

「ヘムカ、それは僕に対する嫌味かい？」

おとなしく樹はシートベルトをつける。

「……何年待たされたと思ってるの？ いいでしょ、そのくらい」

ヘムカは十二年間、ずっと待っていたのだ。

その思いを考慮すれば、樹も何も言えなかった。

「そうだったな。ところで免許いつ取ったんだ？」

「この前取ったよ。ほら」

ヘムカは財布の中から自動車運転免許証を取り出し、樹へと渡す。

ヘムカの言った通り、免許証の左下にある取得日時には先日の日付が書かれていた。

「証明写真も狐耳なんだな……。旗峰？」

樹がヘムカの免許証を感慨深く眺めているが、氏名欄を見て思わず声を出してしまう。

そこには、氏名：旗峰ヘムカと書かれていた。

「旗峰へムカか……。名字はどうやって？」

どのように名字が決まったのか。そんな思いから樹はへムカに聞いてみる。

「旗峰家に養子に入ったんだ。元県知事の」

その言葉を受けて、へムカと以前交わした約束を思い出す。そう、結婚の約束であった。

結婚をするためには、元県知事に対して直談判しなければならぬ。そう思うと、愕然として震える他なかった。

「……そうか。そういえば、今からどこに行くんだ？」

とりあえず元県知事のことを忘れようと、話を帰る。

「どこってそりゃ、私の家。つまり、旗峰家だよ？」

「……元県知事と会うのか」

樹は軽く絶望しながら頭を抱える。

「大丈夫だって、私が養子になってすぐに選挙で落ちやがったからね。その影響でだいぶ謙虚になってるから大丈夫だよ」

養子とはいえ親の落選を笑いながらへムカ。そこまでいうのであればそうなのだろうと、樹の気はだいぶ楽になった。

「へムカがそういうなら」

樹が了承すると、へムカの車は勢いよく走り出した。

◇

「あれから十二年ですか……」

同時刻、へムカが元いた世界。

ライベの邸宅に一人の男がいた。もちろんライベである。

机の上には、読み尽くされた医学書が置かれておりその隣には訳された文章が綺麗に置かれていた。

「それにしても、まさか前回の実験は失敗でした。なにせ、世界に歪みが生じてしまうとね。おかげで奴隷を失ってしまいました。今度は歪を生じない程度に実験しませんとね……」

十二年前に発生した歪の原因、言わずもがなライベの実験が原因だったのだ。多少後悔はしているものの、それほど後悔はしていないライベは独り言を呟きながら別の部屋へと移動する。そこには、狐耳

としつぽのある亜人が拘束されており、亜人は必死に抵抗するも拘束が固く微動だにしない。

「さて、実験を開始しましょうか」